

麻生路郎主宰

# 川柳雜誌

新春特輯號

第十卷第一號



孝

27  
136

120号

# 磨齒ンオイラ



むし齒除けには  
寝る前の  
ライオン齒磨が  
何よりです。  
然も翌朝の朗さは  
又格別です。

ライオン齒磨本舖

株式會社

小林商店

東京・大阪・名古屋

# 初詣で

厄除方違神社

厄除もす八幡

厄除あびこ観音

官幣大社  
厄除開運  
**住吉神社**

和歌山三社めぐり

厄除加太淡島神社

官幣大社  
大鳥神社

別格官幣社  
阿部野神社

御陵めぐり  
(仁徳、履中、反正  
後村上帝陵めぐり)

南海電車

# 川柳雜誌第十一卷新春特輯號目次

題字 麻生路郎・表紙繪 田村孝之介

文苑

## 新春雜筆

科學的作家の惱み

讀む川柳と聽く川柳

川柳天神縁起(一)

演藝今昔名譽帳

武玉川初篇研究(二十)

## 日本柳壇百人撰

路郎、霞乃、新水、閑生、綠之助、青龍刀、珍竹林、茶六、山雨樓、盈

光、鞍馬、福造、不浪人、蝶五郎、千枝、塊人、右近、司郎、天痴人、綠雨、華水、溪花坊、革又、蟬古、天邪鬼

信子、翠夢、孔雀、民郎、有爲郎、水府、二山、雨吉、三太郎、鶴足、鶴太郎、春秋、太郎丸、柳建寺、周魚、雞牛

子、叱咤郎、五健、町二、琴人、鮎美、汀柳、雀郎、葉平、紫痴郎、柳秀、濁水、凡柳、明珠、懷窓、艸樂、山門

鐵洲、五花村、琴莊、清明、黃子郎、文久、夢路、砂人、嘘夢、百雷、亂耽、雅幽、豆秋、紋太、東洋鬼、吉丁

可香、松窓、角戀坊、瀧の人、金一郎、啞三味、柳兒、有石、迷亭、玄六、紅太郎、かほる、機見女、玉兔郎、夢

一佛、十七八、二南、水車、紫明、久流美、雨迷

評月 金・銀・鐵

江戸のうはさ

川柳バイロット欄 選ばれた言葉

妻の顔

麻生路郎 (六)

西田艸樂 (三六)

楊井二南 (三〇)

藤里好古 (三四)

正岡蓉 (四〇)

梅本秋の屋 (四三)

森子東省二魚 (四三)

雅幽、水車、鮎美、山雨樓 (五〇)

住田亂耽 (四三)

福田山雨樓 (四六)

(三四)

川柳をして得をした話

三世相から.....田村孝之介  
丸い月並.....赤井清司  
哀れ山の神.....安川久流美  
瀧れ羽色.....窪田銀波樓  
二十年間.....浅田一  
子供に感謝.....柴谷幸二郎  
丰收.....長谷川一徹  
變哲なし.....前田雀耶  
めらんごい.....大谷五花村  
うらなり.....長野吉高  
植木鉢の花.....前田五健  
朋友の如し.....蛭子省二  
八人の母.....大島濤明  
顔はまあ.....麻生路郎

收攬術 A.B.C.....二南  
作苦より作句.....新里十水  
浄るりの會費.....夢九  
先生のニツクネーム.....晦日金  
滿洲に來た名士.....萬機見女し  
大晦日のおちつき.....天痴人  
M 署の優遇.....あや美  
晦日の金.....あや美

創作

近川一粒 作柳柳樽塔

麻生路郎選 (八九)  
麻生路郎選 (九〇)  
麻生路郎選 (九四)  
麻生路郎選 (九四)

一粒川柳集

前田五健・長崎柳秀

煙.....大島濤明選 (六〇) 命令.....西村球共選 (六二)  
日本名所名物川柳.....大阪の巻 粟おこし.....麻生路郎選 (六六)  
京阪神支都聯合忘年句會.....豆秋記 (六八)

各地柳壇

柳壇畫報.....川柳家 戶籍調.....山雨樓 (八六)  
西之町メモ.....緑 雨 (八四) 編輯の窓.....山雨樓 (八五)

謹賀新春 川柳雜誌社同人

# 報・畫・壇・柳



京成神楽部聯合會に於ける諸郎主幹、木村、及東京、大野、塚、莊氏の記念撮影  
 向つて右より、(前列)里十九、團八、秀山、野水、翠夢、結美、水東、司郎、明珠  
 (中列)山田、藤、雄見、女、風流、翠莊、諸郎主幹、二南、時葉、没骨子、春秋  
 (後列)藤原、鶴峯、友帆、八舟、丹路、豆枝、葉水、雅潤、かほる、夕顔  
 註(一九三三)二、三

たと催演で活貨百物丸都京月一年三三九一  
 都京るけ於に「會覽展柳川るめ因に月正」  
 、山樂亡(りよ右てつ向) 部幹の戲柳川  
 君語の山二、枝子、明紫

# 柳・壇・畫・報



君那河岩手の姿麗科學大社志同 (右上)

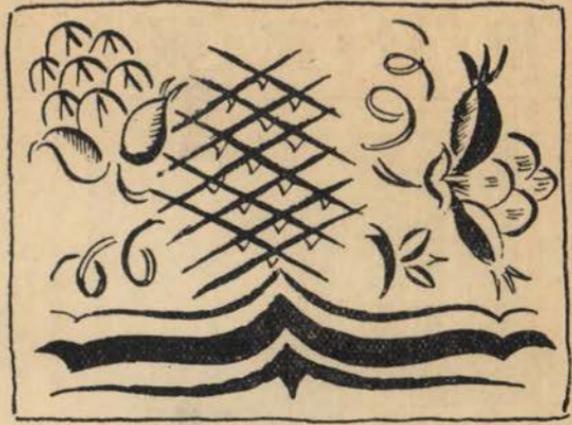
君新訂舟楫主盟會球卓阪大 (左上)



君坊里角木真彌重の環柳都宗 (左下)



君秀柳助長士博學醫教授大等阪大 (右下)



# 新春雜筆

麻生路郎

## 尊稱

僕を言葉で呼ぶのに、いろ／＼な尊稱を用ひてくれる。

麻生クン、麻生サン、と、姓にクンやサンをつけて呼ぶのと

路郎クン、路郎サン、と雅號にクンやサンをつけて呼ぶのと、

麻生ハンとハンづけにしたり、あーサンと、麻生を省略した呼

び方をする女性がある。この中で麻生ハンは一才低級な呼び方

のやうに思はれて、あんまりうれしくないが、あーさんは尖つ

た神經を多少軟化させてくれる尊稱である。

姓名のどちらも用ひないのでは、「先生」に「あんた」に「お  
ツさん」に「大將」の四つがある。

僕を先生と呼ぶのは筆の人間としての一般的稱呼、つまり、

醫者や産婆や代議士を先生と呼ぶのと何等變らぬ扱ひとしての

尊稱で、今一つは川柳人としての僕に師事してゐる人々の尊稱

である。

一般的尊稱としての先生には馴れつこになつてゐるが、女性

歌人のＹさんと對談してゐる時、その家人や女中さんが先生と

呼ぶので僕のことかと思ふと、自分のうちの先生であるのに、「ホイしまつた」とどきまぎさせられることがある。

劇作家のNクンの宅では奥サンが、良人を呼ぶのに「先生」を以て呼んでゐる。

「先生は只今お留守でございます」と三人稱で呼ぶのは所謂先生級の人達の家庭では稀れではないが、二人稱の先生呼ばりは珍らしい。

師事してゐる人々の先生の尊稱に對しては責任を感じる。己れの足らざるを憂れ、且つ愴れる。この尊稱を、何人の前でも逡巡せずに云ひ得る人々は社會的地位の低い人々よりも高い人々である。社會的地位の低い人々は、事實は師事してゐながら同輩視されたい慾望から人前では「クン」呼ばりをしたり、「さん」で胡麻化したりしてゐる。これは一寸淺ましい。

私を先生と呼んでくれる人々には、自らその専門的立場から先生と呼ばれてゐる多數の人々がある。私はこの人々に對しては、その人々の立場を考へて、こちらからも先生の尊稱で呼ぶことにしてゐる。これはその人の地位に對する禮儀だと思つてゐる。

何人でも「オイ」と呼ばれるより「先生」と呼ばれる方が、たとへ慣れつこになつた人々でも愉快でない筈はない。よく巡查から「オイ」と呼ばれたと云つてフンガイしてゐるのを見かけるが「オイ」は稱呼であつても尊稱ではない。

### 先生と呼んで吐月峯棄てさせる

ほどの輕侮の意味がないにしても官尊民卑の流れを汲んだ稱呼

として不快である。

妻からは「あんた」とか「ちよつと」とか呼ばれる。あんたは兎も角、ちよつとはをかしい。「何がちよつとたい」と云ひたくなるが、一々とがめるのも面倒臭いから、「ちよつと」と呼ばれても、ふり向くことにしてゐる。しかも、この「ちよつと」使ひが一番荒い。

次は「おツさん」であるが、これはキング喫茶店のパーテンドーでの尊稱である。主として學生から奉られる尊稱だ。この「おツさん」には「先生」と呼ばれるよりも親しみを感じてゐる。中には僕が川柳人であり、筆の人間であることを知つて「おツさん」と呼んで、スグに「先生」と云ひ直すものもあるがこの場合の先生は何んだか、そぐはぬ。矢張り「おツさん」の方が板につく。そうでないと、第一お金儲けにならないし「ありがたうございます」と云つて頭を下げるのに、下げ場を失つてしまふ。

### おツさんと呼ばれマツチをするわたし

その點、「おツさん」とよばれると「おツさん」の氣持になれる。なんとなく、氣易くて、親しみ深い。

が、先夜、長期橋の停留所でたゞ一人、難波行の電車を待つてゐると、ツカ／＼と僕のところへ白服が鼠色化した五十四五歳の醉人がやつて来て、イキナリ「おツさん」と呼びかけられたのにはいさゝか面喰らつた。髭を生やして一丁羅の背廣服にステツキをついた一箇の紳士に向つて、「おツさん」とは何んだと思つたが、よく考へて見るまでもなく、彼は尊稱としては

「おツさん」より知らないのである。だからこそ、そこに憶するところもなく、おツさん難波行く、ワシ難波行くと質問を發したのであつた。

次に僕は又「大將」と呼ばれる。これは出入りの者や我等の經營する喫茶店の女性から捧呈される尊稱である。この「大將」の代用として「マスター」とも呼ばれる。

何れにしても、尊稱それ自體が、それ／＼にふさはしい役目を果してゐることを思はされる。

尊稱次第である時は侮蔑を感じ、ある時は責任を感じさせられ、ある時は氣易さに解放的にさせられるのも面白い。

## 賀 状

近ごろ、年賀狀を年末に出したことがない。いつでも春になつてから、ポツ／＼出すことにしてゐる。一時は年賀狀に凝つた時代もあつたが、あれは若さがさせた業である。一種の遊びにすぎぬ。近ごろはスツキリした賀狀に敬虔さを感じるやうになつた。

政治家や實業家の代筆賀狀位ありがたくないものはなかつたが、これも止むを得ないものとして宥すやうになつた。それだけ人に對する熱を失つて行くのかも知れぬ。世の中が判ると云ふことは灰色の悲劇に生きることだ。赤い悲劇、青い悲劇、そんな時代からだん／＼遠ざかつて行くことを思はされる。

## 例 證

壺をつくりくに、圓圓と太つた顔の持主である私のムスメが、

どうしたら瘦せられるかについて腐心してゐる。勢ひ、それが火鉢を圍んでの話題の一つになる。

S氏が「肉を喰べたら瘦せられるよ」といふ。

「でも、丸鐵のおツさん、あんなに太つてるわよ」とムスメがすぐに反證をあげた。なるほど丸鐵のおツさんのビール樽のやうな姿が私の眼に浮んだ。

しかし、S氏もなかく、スツ込んでゐない。「岸源のおツさんを見給まへ」とこれに應酬した。

なるほどと又も僕はうなづいた。そして岸源の大將の頬の瘦せかけた顔が目についた。

川柳家の議論を讀んでみると、兩方で都合のいゝ例證を擧げて、力んでゐること、ムスメの丸鐵説、S氏の岸源説に類する場が多い。

人間の肺腑を貫く名句は時間を超越するところまで行くもので、古句が現代句より古いとは云へない。お話にならぬ拙い句を創つてゐながら、本格的だの、自由律だのと力んでゐるのを見ると、滑稽に類する。古いと云へば拙劣で、新しいと云へば優れてゐると思ふのは謬説だ。殊に形式論に囚はれて眞の川柳の影すら踏んだことのない人々を氣の毒に思ふ。

榮光に輝く昭和九年の新春を迎へ

茲に謹みて各位の多幸多福を祈る



近作

謹みて 日の御子の御降誕を壽ぎ奉る (三句)

皇太子早くも春になし給ひ  
御降誕朝からさけこなりにけり  
日の御子に硯を洗ひ筆洗ふ  
足らぬのが當然のやう春を待つ  
月並をいつそよろこぶお元日







赤チヨツキ七十三でございます  
みぞのある話タバコに火をつけて

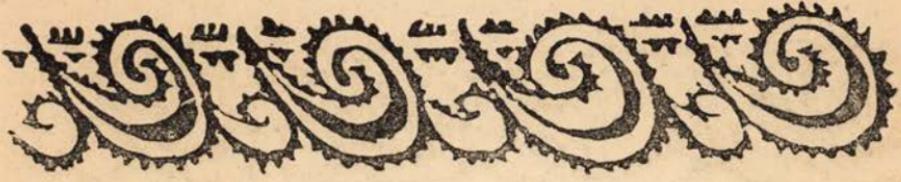
親しかりし同僚の友、二人帝展に入選  
病床にてあゝ多か

みなゆめとおもふ校友誌をふせる  
冬の風尾をふる犬がゐてくれる  
ひややかな手だ看護婦の眉ほそき  
むすめさんが日のにほひしてかへる  
四角な部屋で待たされてゐる  
お正月がきてゐる白飯  
透きとほる身体で秋の蚊がひとつ  
汗がふと頬に光つた萬歳師  
臍くりを迂闊にも出すことが出来  
お元旦女らしさを取りもどし  
桃割を擲擧ふ叔父を頼つてゐる  
行末を聞かれるをウエトレス嫌ひ  
慾心が朝の簾の先に觸れ  
實印を妻に持たせて小さく貯め  
義理かいで子の真中で飾にする  
四十の戀は間食のつもりなり

大原 高知 金澤 香川 島根 盛ヶ池

利同同青同同今同同三同同羅同同靜  
生 果 雨 汀 門 太





行樂の秋月給にしばられる

手と顔を出すと發車のベルが鳴り  
爪を切るひまを主人に見すえられ

妻の出産の日に迫りぬ

初聲を待つ身に貧しきなかりけり

舊同僚府吏となり突如現る

呑もうとも言へず別れし秋の風

すて猫の泣きごえとぎれつゝ嵐

廿九の秋も淋しき我が姿

眼とはなの戀へ神様ひどいです

秋とへば秋はコロリと落ちさうな

見送りの父一人だけ無表情

藥効のながくしさを胃弱よむ

チツプ受取る女の瞳を見てしまふ

來年のつゞくやすみをしらべたり

逢ひに行くのに剃る髭と見られまい

喫茶店あの娘は嫁に行きました

たらちねの母へは惱など書けず

決意又空しく戻す子の笑顔

半生の數寄すごろくにさも似たり

神戸

大阪

長崎

大阪

石川

神戸

高知

大連

大阪

同 吉 左 右

同

夜 王

同 林 一

同 岩 石

一 同 飄

同 貧 兒

同 映 珠

同 三 碧

同 沐 天



ホネムーン恰度二見の朝ぼらけ  
 夜を移ぐ父となりけり荷ごしらへ  
 喰べる話へ病人の慾があり  
 がん首のくぼみも父の個性なり  
 生糸暴落昇給などは程遠い  
 教會の空へ静かな雲が浮き  
 親馬鹿へまた百點をとつてくる  
 あとさしで寝る子へ足のおきどころ  
 朝々を子供に寝顔撫られる  
 一段づゝ冬へ近寄る糸針  
 云ひつゝのどこかに兄としての聲  
 見送つて呉れた母の脊まるかつた  
 個性を枉げずまたまた左遷  
 秋の風こゝろを砥げばちびるなり  
 腫物のうすく鏡を覗く秋  
 感心をしてると香具師はうり付ける  
 妻揚子自力更生満腹だ  
 生くる日ぞ友にねがへりさせてもらふ

病思く  
 寂しき静太君へ

蟹ヶ池

神戸

大阪

愛媛

今治

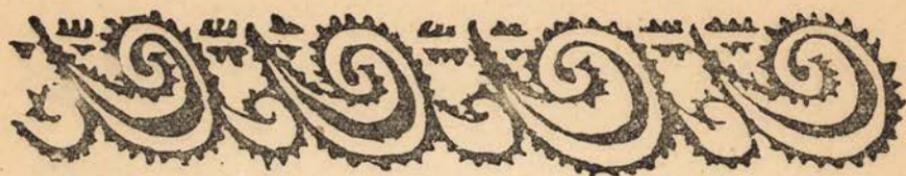
守口

神戸

高知

蟹ヶ池

眞弓 同 霞川 同 葉光 同 孤鶴 同 紫陽 同 櫻天 同 明坊 同 梨生 同 巷巴



風しうく静太の肩がとがつてゐぬくもりをそつと出てゆく女なり二人して踏めば落葉は私語きぬプラタナス裸になつた犬の戀空想にその日は空で歸る魚籠ババロヒゲが痛いです女の子

亡婦の日に

追談へみんなの鼻がつまりくる崩れ行くダリア思索の目をつむる泣けば足る事も女と云ふ強み座つたら脊に抱きつく子でありし貧しさが手遅れになる悲しさよ秋の陽のぬくもりにある鶏のかを秋深し蛇のゆくえも秋ふかし盗壘のあきらめかねて砂を投げラグビーの一團冬を攪きませる廢兵の顔瘦せてゐるこげてゐる金拾ふ夢に己をさげすみぬ落ちぶれて茶碗の影を取りぬ

大阪

同

大阪

愛媛

同

明

高松

同

茂都子

松江

同

翠句樓

大阪

同

ライト

神戸

同

かすを

京都

同

尖衛子

今治

同

心府

京都

同

清春



留守ですか鳩が表へ来てまつせ  
 鏡臺を立ち母さんと若うなり  
 仰山な聲で繼ツ子泣立てる  
 妾宅の鸚鵡も媚びてゐる如し  
 驚いて飛んだ雀のいゝかたち  
 死ねずゐる僕に聖書があります  
 ひとり居る雨の日雨の匂ひする  
 臺所親子で油蟲がゆく  
 臍抱けば臍は親身な毛むくじやら  
 日曜日うちにもこんな陽が當り  
 持つて居る様に見えるか貸せと云ふ  
 聖書を信じききつてゐて不運

五〇一五事件

財閥の犬等被告の目を懼れ  
 すつかりと事務的である似顔畫師  
 戦法を替へて服屋がやつて來る  
 妻のない顔古手屋に見てとられ  
 風に切り込み百匁ことづかり  
 儲けたは帳面すらの事なりき

龍田	京都	大阪	東京	八幡	神戸	豊ヶ池	東京	大阪									
翠	同	竹	同	素	同	蒼	同	十七	同	某	同	松	同	薰	同	菊	同
峯		雅		月		梧		八		人		雨		舟		路	



さびしさにマツチをすれば音高し  
 酔ふことを忘れこの頃子と座り

父

高 厨 七 十 三 の 元 氣 な り

あきたらぬ空氣へ妓いつそ酔ひ

エプロンに包む理想の華かさ

美しく着た日は女工慰安會

ほれたはれたとあはてものゝ女工さん

いゝ月へ淋しさ腕のやり場なし

念佛の女足の裏小そう見せ

自殺者の心理がわかり病んで居る

瘦て居る俺に戀などあるものか

百圓の仔犬糞尿苦にならず

慰むるには肋骨が出過ぎて

病氣して

なにげなくおし入れあけてどうする氣

いろくのきくにみとれるこちきの子

桃色の肌へさゝやく晝の湯

脚本部神経質な顔が寄り

兵庫

同 九 天

兵庫

同 木 圭

松阪

同 沃 里

和歌山

同 昨 夕

豊ヶ池

同 香 月

大阪

同 喜 由

神戸

同 英 彦

大阪

同 いの 助

同



今朝もまた御膳の上に相場表  
赤ん坊だけが本當に笑うなり  
寶石の冷たさを知る宵もあり

三朝にて

丹前にまだ落着けぬ年であり  
御主人の家が債祭またあたり  
ロボットである事それがお氣にめす  
安靜ももうそろ／＼とあいてきた  
やんでみてはゝにすまない日がつゞき  
十二月子供の貯金迄も借り  
ラツシユアワー長い袂が邪魔になり  
計畫の通り叩頭で押通し  
責任を持つとは云はぬ筈と逃げ  
故郷から柿は不作と十ばかり  
公休日たらひの中の日本髪  
女氣の小さな姿に負けてゐる  
そのポーズ女であつて馴れてゐる  
ブラジルで着る洋服の出来て来る  
二日酔心に誓ふことがあり

京都

富美三

鳥取

鳥南

石川

しとし

盛ヶ池

清人

愛媛

世都象

京都

丁路

大阪

一羊

松江

和子

高知

同 珍景

同



氣苦勞に咳して父の歸り來る  
 又一つ用事がふえていゝ男  
 思案したあげく大根買ふて去に  
 味噌汁のお替りをいふ旅に馴れ  
 叱られて出て來た空のまつさをな  
 今日も雨軒の干柿つまんで見  
 怪我してもこりぬ達者を褒られる  
 レジスターへ今の不平を叩きつけ  
 A B C 順に座つた若手組  
 黒板の文字が恐かる缺食兒  
 我講今年は家族一人殖え  
 端した錢錢は帽子の底へ落ち  
 子澤山主張もせずは無事勤め  
 木枯しの橋の灯にさへ嘲はれて  
 桃割の祈願へあきれ給ふ神  
 いゝ服も板につかない新入社  
 年の暮やとなの酒に酔ふて出る  
 賣られ行く牛も親爺も泣いてゐる  
 母親の留守に足つぎ要る戸棚

京都 不明 今治 大坂 大坂寺 大坂 同 同 同 同 鳥根 名古屋 大坂 同 同 同

貴代志 同 千兩 同 輝親 同 小三 同 春彦 同 團子 新市街 角丸 朱郎 鴉夫 三都 赤鬼 白嶺 白蝶



うす墨の部屋の底なる青き息  
 焼芋屋きれいな兒には一つまけ  
 十二月道草喰つて叱られる

白濱にて

白粉の指で圓月島を見せ  
 母のない娘を叱り過ぎて悔  
 木魚の音止まつてからの無心なり  
 遺失物手帳ですかとそっけない  
 しほ風にマドロスパイプのうごかざる  
 此の家も彼の家も犬文化村  
 僕の手が百動いたかトンボの眼  
 本當に酔ふたら裸で踊つたろ  
 天井にとゞく火の粉になれてゐる  
 望みない子のやせ腕をちつと握る  
 車中では二人はだまつてすわつて居  
 一坪の畠の芋を配りけり  
 妾宅は炬燵にあつて返事する  
 冬の氣配が盗人の背を匂ひぬ  
 あるだけを費つて酒はさめてきた

京都  
大阪

白扇  
たけを  
佐津美

紀伊

忠次

京都

啓秀

大阪

一杯

同

一文

大阪

白戀

同

青兒

名古屋

灰三

大阪

みのる

同

素萌

同

阿古

同

美津子

今治

バツト

松江

冬生

大阪

洋々

天馬





父親は帶もしめすにもらひ風呂  
 これなれば十人並と親はきめ  
 「其の筋の命」に埃がかゝつてゐ  
 猫なげて手切金の高を問ひ  
 夫婦でもなさうなのが氣にかゝり  
 何遍も驛夫が詫びる稀な雪  
 追はれるやうに冷たき床にもぐり込む  
 褒められてすぐ使はれて事が済み  
 肖像畫いだかれし事なつかしみ  
 氣分轉換麻雀打ちに出る  
 波の立つ髪は理想を高く持ち  
 死顔が我が子に似てる淋しさよ  
 サラリーにあまんず夢よまろくあれ  
 順禮に餅の報捨の年の暮  
 ウインドの水仙を見る雨宿り  
 面長が山田五十鈴に似て勤め  
 朝々を散歩と決めて病んで居る  
 舊友の門の構へに躊躇する  
 半額の肉屋へ橋を二つ越し

島 松山 大 大 同 今 今 高 松 名 今 同 大 松 島  
 阪 阪 治 橋 古 治 大 山 阪 治 阪 山 島  
 同 阪 治 橋 古 治 大 山 阪 治 阪 山 島

喜 春 丁 冬 一 月 赤 柳 芳 青 史 小 正 堅 良 東 柳 笛 愛  
 郎 峰 字 呼 風 茶 陽 夢 香 米 郎 松 司 之 佑 朗 志 秀 子  
 郎 峰 字 呼 風 茶 陽 夢 香 米 郎 松 司 之 佑 朗 志 秀 子

# 妻の顔・顔・顔

新春のお笑草として、本社関係の筆の人達から妻の顔の批評をお願ひ致しました。(福井局)

## 三世相から

### 田村孝之介

啓、御返事致します。オクサンの顔御覽の通り三世相に現われたる理想的美人



にて、即ち家庭圓滿金持相なりと申しますので、もうぼつ／＼裕福になれる事と楽しみにして居ります。

右御返事迄

敬具

## 濡れ羽色

### 窪田銀波樓

濡れ羽色の毛の濃いのが御自慢ですが



# 川柳天神縁起

(一)

## 藤里好古

御神火燃ゆる島から可愛い寫眞が届いて、ウツトリとしてゐる處へ、ゴメンと入つて來たのが路郎王幹だつた。一しきり東京句會の味噌を聞かされてからが、何か書けとの追撃だ。ちや「三原山情死者列傳」をと云へば

君の専門が「天神」だから、川柳天神傳を書けとの嚴命だが、折悪く僕の商賣が天神サンのチンドンやと來てゐる。それが爲めに遂に筆は御神徳はてな事になつて、讀者が有難がらぬ事は新田の水瓜ぢやないが、請合ひだから止める。と云へば有難からぬ事計り扱へと、コリヤ難題だ。しかし、思へば僕はパンの爲めに今日迄永年の間、鷲を鳥と天神サンを塗り潰し過ぎた。御神酒ぢやないが、一つ灘の生一本と云ふ處も悪くはない。こつそり書く事にすべいと引受けたのが、此の「川柳天神縁起」だ。こつ云ふ譯けだから、天神サンを友達扱ひにすることはもとより、メツキの禿げた處は禿けたまゝ、ハツキリと書いて

て罪亡ぼしをする。勿論、パンの方へは内密ナ事だらけで、知れでもしたら、晴天の霹靂それこそ

御立腹まつくるになる空の色で、此憂鬱サは、

二十五は雷の時誦むお經の「普門品二十五章」も効を奏せないハメとなるであらう。……

### (一) 誕生

天神サンの本體、菅原道眞の生年月日は「菅原氏系圖」に據れば、承和十二年乙丑六月廿五日となつてゐる。「公卿補任」には

菅原道眞、參議從三位刑部卿是善卿三男、母伴氏女となつてゐる。が、昔から傑物の出生には神祕譚が多い。豊臣秀吉は身卑賤より起すとなつて居りながら、一方では皇胤説を唱へるものがある。そ

それはまアとして三國一の富士額はおま  
り當世流行とも思はれません。鼻は低か  
らぬはよいとして唇の薄いの三人寄ら  
ずとも姦ましさうです。おかげで家内は  
賑やか過ぎます。

## 丸い月並

赤井清司

元旦だといつては我女房にほれて見た  
り、湯上りの我女房にほひがいととい  
つて見たりすることは、余りにもこと古  
りたりといふこと程左様に實は我女房の  
顔を研究して見たことはありません。毎  
朝毎日毎晩そばにガンパツテゐて、やれ  
御飯がどうの、着物が下駄が靴がといふ  
のは常のこと、痔もちの私には朝毎にカ  
ハヤから出て来ると「オイもう一度床だ  
〜〜」とごなるにきつてゐますが、  
その時の女房の顔が、笑ふにあらずオコ  
ルにあらず勿論泣く程シユシヨウな形に  
あらず、何といひますか眞丸い月並の  
顔がよけいに丸く白く鍋ぶたのやうなの  
が女房の顔のやうな氣がしてゐます。今  
夜かへつたら、改めて我女房の顔をよく  
〜見たいと思つてゐます。

のやうに現在道眞の誕生地と説するもの  
が、四ヶ所もある。即ち

京都市下京區菅大臣町、府社菅大臣神  
社。

大阪府南河内郡平尾村大字菅生、郷社  
菅生神社。

奈良縣生駒郡伏見村大字菅原、郷社菅  
原神社。

滋賀縣伊香郡余吾村大字川並、村社北  
野神社。

とありて何れもイミテーションで、實際  
は判らぬ。菅大臣社は是善卿の舊邸址、  
菅原社は菅原氏の發祥地とも稱せり。最  
後の北野神社には一異説あり。同村の農  
夫桐川大夫なる者、余吾湖に水浴せる天  
女と交はりて道眞を生む、幼時勉學の爲  
め同郡坂口村の菅山寺に入り、十一歳の  
時に寺を出て菅原は善邸に現はれ養子と  
なると云ふ。こは「諸國風土記」の近江  
國伊香小江の天女の傳説を附會せしもの  
なり。されど道眞が

虫腹を一ついたぬ御出生

なる説は古くよりありて「皇代記」仁明  
天皇の頃に、北野天神、化現是善家、  
此歳六。とありて六歳の時は善卿の許に  
現はるとするを初見とし、以後の菅家傳

天神縁起は全部是れを踏襲せり。「菅家  
御傳記」には

昔日、其宅（是善の）南庭に五六歳の  
童子出現す、問汝は何氏の男なるか、  
何の由に遊びに來りし、童子答曰く、  
我に居處父母なし、一意譯、原漢文一  
と、以て養子とすと云ふ。かゝる處より

後世の人々は  
元あれは棄兒と時平蔭でいひ

と作句する程迄此説半ば信ぜられて居つ  
たのであるが、是は大なる誤解で、「公  
卿補任」にも明らかに三男と云へる如く  
誕生當時は只野凡兒だつたのである。そ  
れが後に兄弟は天逝し、史乘に現はれ  
ず、道眞の「一枝蠶桂謝家君」の詩の  
中に

慈父獨相驚、相驚何故、日悲汝孤悻

我無父母、無兄弟、内無兄弟可相  
語、生涯我是一塵埃、無兄弟無弟身初  
老。―菅家文章―

との晩年述懐の詩句が誤傳の基ひをなし  
かくは不合理なる説が信ぜらるゝに至つ  
たのである。

―次回は「作詩始の段」と「譽田八幡宮參  
籠の段」―

## 二十年間

淺田 一

むつかしい主題ですな。二十年前まだ許婚中なりし頃は、實真を見てさへ心を躍らせて居た顔ですが、二十年間も毎日見合せて居るとトシと刺戟にも何にもなりません。批評なんてするには余り慣れ切つてしまひましたね。皮肉にも男の子供に割合に妻の美點が移され、女の子供に私のわるい所が移つてゐるので、神様もおいたをなさると思はず顔を見合せて苦笑する事があります。只長旅から歸つてブラットフォームに迎へられた時と、媒酌人をやつて美容でもした時とは、之が妻かと疑ふほどきれいに見えますね。之に反し稀ではあるがけんくわの時には逃げ出しますね

## 哀れ山の神

安川久流美

貰つた當座は、ごこやら春信の繪の名残りがあつて時代めいた女だと思つてゐたのが、四十路に入るともう婆さん、六ツと二ツの男の兒を生んでからは見るかげもないやつれやう、鹽茄子のやうにしなび



## 科學的作家の悩み

西田 艸 樂

學者に訊くと解らぬと云ふ。無學者に問ふと知らぬと答へる。

解らぬと知らぬとの間に、僅かな人間の學問の相違があるばかりで、學者も無學者も不明な事はそれ以外の何でもない。ニュートンが、現今の科學の進歩は宇宙の秘密に對して、僅か濱の一砂を發見したに過ぎぬと言つたとか、研究しても解らぬ事は幾らでもあり、學ばないから知らぬも當然の事、兩方とも不明の二字に盡きて、人類の疑問は永遠に跡を絶たない。

併し少し知つてゐる。これは實に厄介なものだ。ガソリンを食はして置けば地上を走り廻る馬を發明して、世界一と言

はれる富豪になつたヘンリー、フォードの自動車工場では、いろ／＼の發明が多く素人の手で完成されるそうである。でフォードは言ふ。學者と云ふものは、歴史を知つてゐるだけで未來を知らないのだ、だから、自分の歴史的知識で簡単にそんな事は出来ないと極めてしまふから物の發明に身が入らぬと。素人は何も知らないから、必要に迫るとあらゆる努力を拂つて學者の否定した發明を仕でかすのであると。

人間は何でも知つてゐるに越した事は無いが、知つてゐると云ふ事を忘れる事をも知つて置きたい。

殊に宗教とか、藝術の世界になると、

た顔は劍氏の舊作でないが

「もう戀もこれまでなりや子が五人」

で出来ることなら「三人の母と思へぬ舞の袖」の華やかさであつてほしい。貧乏と仲がよくて入齒させるのを無期延期になつてゐるが、來年は「舞鶴」の更生生活に妻の顔も昔へ呼び戻さう？

## 子供に感謝

柴谷宰二郎

僕が子供達へこれを見せたら、兄の方は「面白いなあ」と云つたものゝ何だか濟



まなきそうだ。妹の方は「そんなん母ちやんちがふヨ」と泣き出しそうだ。妻の顔よ、子供に感謝しろ。

僅か知つてゐる事が非常な邪魔になるのである。

キリストが處女の腹から生れたなんて科學の知識からどうして信じられやう。が牧師に言はせると尤もらしい結論をつけるが、それも、いろ／＼の理論からかうなると云ふのでは既に宗教ではない。それは一つのサイエンスで、宗教なら信仰によつて信ぜしむるが本當なのであるサイエンスと宗教とは全然世界が違ふので、サイエンスは現世の事、宗教は神の世の事である。

藝術も うである。詩の世界は理の世界とは遠く懸隔があらねばならぬ。けれども、宗教とか、藝術とかが、科學と最終的に合致せないものであるか否やの問題を茲に論じるものではない。只宗教の事は宗教の世界から視るし、藝術の事は藝術の世界から眺める事が肝要なのである。



私には悪い曲者が憑きまよつてゐる。製材所の軒を通ると、直徑一メートルも

ある木材が横はつてゐる。詩人は走れを見て、此の木が伐らる前には亭々天を摩し、月光に浮み出た風景を想像するであらうに、私はその木材の科學的解剖を始める。年輪を數へて年齢を尋ねる組織を調べて植物科名を探らうとする。木材の使用價值から、乾留するとホタールが採れて、クレオソートが何%得られると云ふ方面まで連想が続く。

古道具屋の前へ立つて、青銅の錆びを眺める。銅器が空中の炭酸瓦斯に作用されて凡そ幾年位でこれだけの録鏽が生じることができるか考へる。

別府へ旅行して、血ノ池地獄に人々が不思議がつてゐる時、ペニガラを溶したらかうなりますよ、赤いのは酸化鐵か、炭酸鐵でせうと無趣味な事を放言してしまつた。

室戸崎へ行つた時など、榕樹林の珍らしさと、亞熱帶的の植物に感心して、殊に濱木綿に違いない植物を發見して矢鱈に喜んでゐるうち景色を見る事を忘れてあの雄大な風景は改めて二度目に行つて見た様な始末。

長谷川一徹

妻の須に對する批評、漫畫でもお添え下さいと云ふ往復葉書に對して、まあ失禮だわと言ではねつけて解消さす位は心得て居る向もあり、そんな見暮位にはびくともせない主人に對しては下手に出て門外不出として珍重して置いて下さいれ。なんて云つて返事を出させずに置くと云ふ手もある。

「わが妻はつひにうるはし夏たては白き衣きてや、瘦せてけり」と牧水はあつさりやつて居る。實際みにくしと云ふよりもみめよしの方が良い。僕もそれに決める。字源を見るとみめよしに相當するむつかしい字が八種ならべてある。その最初の字が手となつて居る。一度も出會はさない字だ。フツと讀むのだ「おふう」なご、呼ぶとこれは良い名だ。おのづから和かな春である。解釋をみると顔がまろく肥えてうつくしとある。ついでに玉篇をひくと面貌豐滿也、この位にしておこ

或る婦人が樂焼の茶瓶に花を生けて居られたが、器の表面に水が吹出て困つてゐるのを、石灰水を作つて上げたら水が漏らなくなつた。それ以來、その家を訪問する毎に美しく生けられた花よりは花瓶から水が吹き出やしないかとばかり目が氣にしてゐる。

常にこんな頭で、習慣でゐるから、川柳なども非常な損をする。詩的感興が起さる前に理性の働きが作句の邪魔をする人の作品を見ても、詩的の感にれたれる前に科學的に理に合つてゐるか、その譯を解剖しやうとする。

理性の働きによつて得た句は如何に巧みであつても遂に詩でないといふ事は、町二さんに教はらなくても解つてゐるが私の憑物が一應邪魔をせずには置かない

併し川柳には、今日までに多く人事を扱つて來た關係上、人の生活相に於て多くあるべき事が詠まれてあり、それが川柳の表現に生命づけられ、機智があり、皮肉があり、ユーモアがあり、軽味があ

つて川柳と名づくる文藝はあつても、詩と云ふものではないものが極めて多く、此の後に於ても、此の種の價值によつて川柳の生命は相當に存在する事であらうから自分達、川柳詩人と名乗る事の違ひものが、僅かに存在を許されてゐるのである。

と云つて、話は元に還るが、如何に藝術だからと云つて、全然科學を無視する事は出來ないと思ふ。先年、本社が動物園にて句會を開いた時、林園長から、アホーアホーと鳴く鳥は鶴の様に詠まれた句があつたが、あれは鶴でないといふ訂正があつたとか、路郎先生もよい句は科學に反するものでないといふ演された事がある處が川柳のみでない他の藝術に於ても隨分科學を無視したものがあつた。

南天の葉は對生葉と云つて、各小葉は相對立して軸についてゐるのが、往々南天の繪を見ると互生葉と云ふ互ひ違ひ描に於てゐるのがあつたなど、あまり感心せぬ。

木や花を詠み込んだ川柳が近來多いが

# 植木鉢の花

前田 五健

毎日見飽いてる顔だが、さてと聞かれると困る。エート鼻、眼、口、耳、揃つてゐる。揃つてはゐるが、その揃ひ方、つまり配置についてはどうも感心しない鼻は無防禦的、眼は細過ぎてあるにはあると云ふ程度。口は相當なもの。それを鼻は花なり、眼は芽なり、耳は實なり、齒は葉なりの草木にすると、あんまりいゝ花ではない。まあ植木鉢に似合のものであらふ。然し初春の丸髷にでもなるとソレ古川柳の「松の内我が女房に……」座五が氣に食はぬので目下考へ中。

## 變哲なし

前田 雀郎

お需めにより本日女房の顔をしげ／＼と相眺め候へ共、別に世の常の女と異なる處も無之、取立て、お知らせいたす程の怪奇も發見いたしかれ候まゝ、その節ふと口に浮ひ候

妻といふ女ありけり眼のあたり  
の一句お目にお答に代へ申し候。

やはりこれとても附會的のものが多く、花や草を詠んだからとて直に詩とはなり難い。自然を詠んでも

酒とろり／＼大空の心かも

君見給へ渡菘草が伸びてゐる

と云つた句は、何等説明も解剖も要らない。直ちに詩感に打たれる。すべて藝術はかうなくてはならない。くだ／＼説明をして領ける様なものでは價値がなくかく／＼の理由によつて神を信すべしと學問的に宗教を説いて信仰が起らないのと同様である。だから川柳が自然界に伸びやうとする努力は好ましいが、よほど困難であり、得てしてわざ／＼茲で草木を詠まずともと云ひたい句に陥り易いのは、警戒ものだと自分は思ふ。

### ◇

こんな事を考へ氣にしてるから不相變私は句が上達しないのでもあらう。けれどもお蔭で、全く川柳のお蔭で自分は句は作れなくても詩の世界を覗く事が出来た事は、我が人生を十分に感謝してよい華やかな道頓堀のネオンを見て、空中の稀有原素であるネオンを掴んで來てそれに放電する科學者の苦心に心を痛めたり、爛熟期に達せる婦人の肌を見ても

女の肉體があんなに神秘的な魅力を宿すのは、彼女の女性的ホルモンによるものだなんて冷めたい解釋に陥つて居ては詩も歌もない。詩人が頭髮一筋にも鋭敏なる感覺を呼び起す代りに化學者は水中の百萬分の一の含有成分に神経が失るのであるが、一方は豊かであるが一方は狭いのである。溫みに對して冷たいのである軟みに對して硬いのである。

私は川柳は作れなくてもよい。詩の世界に生きる事が出来れば如何程幸福であるか知れない。同學の友人達に川柳を勧めたが、彼等の多くは、十七字をマイクロームにかけて顕微鏡下に檢し、試験管に投じた試薬を注ぎかけたり、十分の一ミリの化學天秤で秤量したすから、詩の世界が覗き難かつた彼等も學問や知識の憑物を持つてゐるからである。

川柳によつて曲者の正體を發見した自分は幸福であると思ふ。只私の身體からすつかり曲者が立去らない惱みは此の後の修練によるより他はないと思つて、句の拙いのを無暗に焦慮しても致方がない」と諦めてゐる。

この句により我等夫婦生活の近況御推察を得ば幸甚に御座候。

### 朋友の如し

蛭子省二

私は自分のトシを忘れる程落ちつきけました。

既に夢見てゐる彼の看護疲れを知る時に  
ごんな顔をしゝゐたか思出し得ません。

一齋先生が八十歳にして書かれた言志老  
至録に、老年夫婦、交如朋友、

これに因て私には妻はないものだと、心  
得としてゐます。

### めんごい

大谷五花村

私の地方の方言に、美しくない醜い容  
貌とか行ひとか表はすのに「めんごくな  
い」といふのがある候。子供の可愛い  
事などを「めんごいネ」など云ひ候。私の  
女房は顔からいつたら此の「めんごくな  
い」部類に屬し候。行ひの方からいつた



## 讀む川柳と 聽く川柳

楊井二南

落語や淨瑠璃は目で讀むより耳で聽く  
方が遙かに面白い。それと反對に小説や  
隨筆は人に讀んで貰ふより自分で讀む方  
が確かに楽しみなものである。

詩歌の世界に於てもそうである。諸君  
は百人一首朗詠の妙は屢々味得されると  
ころであらう。或は琢木集に於て默讀徒  
に頁を繰らるゝよりも自ら聲を發してそ  
の無限に迫る寂寥のリズムを食られたこ  
とはないか。之に反して最近勃興せる所  
謂新傾向俳句の如きはどうしても目を通  
じて玩味せねばならぬ部類に屬するであ  
らう。

植木屋の梯子の下へ子が歸り 明珠  
肩書が役にも立たぬ 十二月 路 耶  
戎橋月を眺むるとこでなし 濁水

水屋は儲けた事にされてゐる 變人  
若き日の父を思はず博多節 櫻天  
戀人と歩けば花の名も覚え 洋々  
是等の川柳から受ける感興即ち川柳味  
は、その目を通じての場合と耳を通じて  
の場合とに於て何等の差異を發見されぬ  
であらう。換言すれば、之等の活字が構  
成する迫力と、之等の字音が包含する迫  
力に強弱の差を認めないと云ふのである  
無論此の場合の朗詠は明らかな發聲と正確  
なアクセントを以てなされなければなら  
ぬ。畢竟是等の句は讀む川柳であり、又  
聽く川柳でもあり得る。

然らば先づ讀む川柳とはどんなものを  
云ふのか。之は川柳味を活字それ自體か  
ら探得する句である。即ち耳に聽くより

ら私の句の

家内中俺の廻りに生き、居り

の通り、一意専心私を中心として痛い處へ手の届くといつた行動で、主人の生命の川柳家なら誰人でも喜んで歓迎する心持ちを持つて居る事が、暴君なる私の感謝の一つに有之候。

### 八人の母

#### 大島 瀧明

一言で申せば太と表での四角な顔である。若い時は人間並みに肥へて丸くしてゐたが子供の八人も産むと齒はぬけ頬はこけ「是でも女かな」と思ふ様なみじめさになる。特徴とでもいふ點は鼻の低いのと髪の毛の赤いのと色の白い位であらうか、こゝ言つて仕舞ふと世界一の不綺麗の様だが、それでも若い時は僕に過ぎた美人だつた。

あの頬があの眼過去を偲ばせる

うらなり

#### 長野 吉高

ハーマトンは、海の初見、熔岩の流れ、河上の歩行、そして砂漠の旅行、これだけの四つは筆舌では形容が出来ぬと嘆じ

水も、目で讀む方がより明確に迅速に、そしてより深直に味得し得る川柳を指して云ふ。之に次の二つがある。

一、特殊の活字技巧を弄した句

君、君、愛爵を配つてあるくのは止せよ

路 郎

あいつが、こいつが、君が、僕がと御多忙だ

琴 人

蟻よーそこは下駄の下だよ

噴 兒

病めんへ行つてなみだの天と地

英 彦

せんりゆうはかなしわたしのかけらをひるふ

諍 太

前の二句に於けるピリオドとコンマが夫々の句に於てどんな役割を演じてゐるかを味はねばならぬ。作者が何の氣もなしに偶然つけたものではなく、そこに何等かの故意が働いてゐることを認めなければならぬ。「蟻」の句の線に於ても同様である。此の線かピリオドでなくコンマでもない所に作者の技巧があることを忘れてはならない。

次「病めん」の句は嘗て本誌の月評に提出されたことがあり丹路氏は「病めん」を病院とせず「なみだ」を涙としない用意のよき、少年作家の將來に期待する」と語

り、水車氏は「病めん」「なみだ」を假名としたことにそう深い用意のあつた譯ではあるまいが偶然の効果から来る餘韻はけなし難い」と評し、共にその活字の持つ特殊性を認めてゐる。最後の諍太氏の句は全部假名で綴られてゐるが、之は何も氏が漢字を知らない譯でもなく、又常に假名ばかりで用を足す人でもないが、この句の場合特に故意に漢字を一字も使はなかつたところに此の句の獨自性があるのであるまいか。

之等の句は勿論耳に聴いても意味はよくわかる。句の批判も不可能ではあるまい。併し果して作者自身が期待してゐる様に、その句の特殊性、獨自性を認識することが出来るだらうか。私は躊躇なくインボシブルと叫びたい。

二、音のみでは難解の文字を含む句

腹立て、来た一團の匂ひなり 大門

重壓へ君と僕との氣が揃ひ 新市街

タイ凝りの借れるパーとてなかりけり

葎乃

完全な愚夫愚婦となり汽車を待ち 亂耽

心耳濃濤光の走る音聴けり 町二

てゐる。

だが私ならこれに今一つ「妻の顔」と加へる。ハーマトン君ごうだす、とでも云ひたい。若し私が漫画家だつたら、すぐにうらなりのヒネ南瓜を描くだらう。何の暗示にしろ、恐らく女房にだけは解らない筈だ。明朝で、でも健康さうな婦人を見ると溜息が出る。何故つて木彫人形のやうに無表情で、永遠の憂愁をのぞき込んでゐるやうな女房の顔を思浮べるからだ。ホーマーは「オデシー」の中で、朝日の昇るさまの形容して「バラ色の指」とうたつてゐる。巧いことを云つたものだが低くとも、皺があつても、口が大きくてもそれは私にとつて問題でない。たゞ血色のよい明朝な、せめてバラ色でなくとも、うらなりの南瓜ほごでもの顔色が欲しい。蒼白い顔が役立つのは借金取りが来た時、この顔で泣き落す戦略の時だけだ。いやはやごうも、因果至極な顔ぢやおまへんか。

### 顔はまあく

#### 麻生路郎

おうちの奥さんは、別嬪さんだんなアと云ふてくれるのは、——サア誰だつたかハツキリ覚えてゐないが、八百屋か米屋酒屋か、肉屋か、何れにしてもツマリそ

私等は何の苦もなく是等の句を次々に讀過することが出来る。そして意味もわかつてゐる。併し最初からは等の句を耳に聴かされたとすればどうであらう。

IOHDAN と云ひ JUATSU と云ひ餘程頭のない人でも問ひ返さずにはゐられないと思ふ。最後の「心耳漂渺」に至つてはお釋迦様でも御存じあるめえと云ふ所である。

次に聴く川柳であるが、之は前者の能動に對して受身の形で味はふ句、即ち耳に傳はる音律によつて、より甚大に享樂し得る川柳を指すのである。

一、會話体及びそれを含む句

君見たまへ渡糶草が伸びてゐる 路郎

大平洋に面して僕は馬鹿でした 同

ごうにでもなれと別れる時思ひ 新水

辨當を提げてゆく氣になりなさい 觀月

生活の爲なら煙草も吸ひますわ 莞路

戯曲を讀むことゝ聴くこと、何れに多

分の價値を認めるかと問へば諸君は後者に舉手されることを誤らないであらう。

何となれば會話は發音に依つて初めて命を生ずるからである。百字の散文よりも

數語の傲辭が遙かに勝つて活力を含む場合さへある。上掲の句を默讀する時は、その句の價値は第二として、鑑賞者に訴へる力、叩く力、くすぐる力が如何に不滿にしか受け入れられないことを發見されるだらう。而も之を夫々適當な抑揚によつて朗詠されるのを聴いてゐると自ら餘りにも躍如としてその情景を髣髴たらしめ、更に人生の悲・喜劇の數々を夢想し續けることに飽かないであらう。

二、強調の語を含む句

五六人ごうにもならぬ顔を寄せ 閑生

儲からぬ人ばつかりに會つて來る 明珠

出迎える兒がほんとうの姿見せ 山雨樓

酔つてからハツキリ知つた彼の戀みつる

キツチリと足袋もたゝむで女氣の水車

以上は句のやまがその傍線の語にある

ことは云ふをまたない。それだけに句主

は此の強調の語を力めて鑑賞者の胸に響

かせ様としてゐる。鑑賞者に於ても此の

強調の語を認めれば認めるだけ、此の句

の眞價を合點し得るわけである。此の場

合「音は字に勝る」ことを一層痛切に感

のお出入りの人達だつたに違ひな。その程度の別嬪さんである。そして最大級の形容詞でホメなかつたところを見るとそれも割引しなくつてはなるまい。

日車君だつたか十幾年の昔水もしたゝるやうな愛妻の丸髻姿をホメてくれた事があるが、之は丸髻そのものにチャームされたので、顔とは至つて縁が薄い話だ。僕だつて、元より顔で貰つた女房でないだけに、今更、顔がむくれて青白くやつて来やうが、肌色の白粉をつけてもつけぬでも同じ顔世だと云つて、文句のいゝやうもない。まあ謹んでこれから先二十年か三十年を眺め暮らさうと覺悟してゐる。僅か二三十年の辛棒が出来ぬと云つては、あんまり水臭い話だ。辛棒々々斯う書いてくると、人様には彼の女の顔の美點と醜點とがハッキリしないうちみがある。そこで少しく駄足を加えやう彼の女の眉毛は薄い、三ヶ月型であることに間違ひはない。眼は後方に退いてその存在を示してゐる。宮尾しげを氏の漫畫で見ると目尻がグツト釣上つてゐる鼻も口もまア人並みと云つて置く。宗教仕込みの無表情の顔は冷淡にも見えればノーマルにも見える。もう少し色氣があつたらと思ふが、コッチの顔を棚に上げて兎角の批評は御遠慮申し上げるのが夫婦別ありといふところか。もつと老年になつたら、お茶屋の女将さんのやうな太つた顔になるのではないかと想像する。

じるものである。讀むだけではうっかり忘れるかも知れない句の重心であるが、耳にする時は絶対外れつこない句の急所である。

### 三、滑稽・感傷の句

音を通じての笑ひ、悲しみが如何に文字を通じてのそれよりも深大であるかを諸君は否定しないであらう。耳は感情的に目よりも鋭敏である。特に喜・悲両面に於て然りである。抱腹絶倒と云ひ、慟哭號泣と云ひ、文字に生ずるより音に發すること常套である。

時計屋はゴミが溜つてゐると云ひかほる  
まんざい屋知らん顔して電車にお春 秋  
まれき猫一現さんの金使ひ 佳風  
散歩なら財布を置いて行きなはれ素人  
寄贈品ほんまかいなと貰ふなり 二南  
我をはなれぬさびしき雲よ 鮎美  
粉ぐすりをさみしくなりて吹いてゐる  
静太  
薬瓶熱のある手に轉がされ 夢遊  
妻の眼の濁りて貧を訴ふる 町二  
刀根山を氣樂と云へりかなしけれ愚寵  
以上で讀む川柳と聽く川柳を大體區別

し得たのであるが、こゝに問題となるのは川柳を聽かす即ち披講と云ふことである。上述の論は總べて巧妙なる披講を基礎としての分類であることは云ふまでもない。巧妙なる披講とは明朗・圓滑・正確なる發聲であると共に適應技巧を必要とする。即ち音律技巧換言すれば音的表情であつて、私は之を川柳披講の味と稱してゐる。聽く川柳には盡く之が必要である。此の味の素の使用によつて益々句の眞價を鑑賞者に傳へ得しめるものなのである。之に反して味の素なき拙劣な披講は聽く川柳を敢へて讀む以上にその價値を減殺するものであることを常に警戒しなければならぬ。(了)

### 社告

今回左の諸君が同人として入社されました。

吉川 啞人  
平井 青春  
後藤 青兒  
大石 喜田  
明石 柳次  
眞田 幸捐

武玉川初篇研究

武玉川初篇研究

(三)

梅本秋の屋

森東魚

蛭子省二

(591) 抹香とても爪はつれ物

省 二 爪はつれば爪端、香をつまむにも、身のしこなしが  
ゐる。

秋の屋 抹香を撮む指にも、一の機巧がいと云ふの歎少し  
不明瞭の點が有る。

東 魚 香を捻するにしてが、指先の美しき、すつきりとし  
たのが良いと云ふのであらう。

(592) 盗てくれた人を正客

省 二 盗むたものは何にか、前句の關係を必要するであら

うが、例へば思つて居る女を盗み連れてきて呉れた人を、正客  
として酒宴を張る様な事は、いくらもあつた。

秋の屋 前説の如く掠奪結婚であらう。  
東 魚 異議なし。

(593) 餞別貰ふ初の勘當

省 二 21 「財布でふつて直に勘當」とあつた。初の勘當丈  
けに餞別も貰へようが、二度三度となつては……「面白いもの  
初ての勘當」(ム七)。

秋の屋 歌舞伎劇には屢々脚色される情景で、その代表的の  
ものに「ひらがな盛衰記」の梶原源太がある。

東 魚 初の勘當だけに、する方に大に未練がある。餞別貰ふは如何にものんびりしてゐる。叔母さんなどが第一の布施頭だらう。

(594) 妻かとつて廻す祝い日

省 二 祝ひ日は何んにでも適用出来ようが、古川柳式に解して、例へば「大太刀をひねくり妾威をふるひ」の端午に、お妾鼻高々と切つて廻す。

秋の屋 端午と限らず、子女が七五三の祝日にも、昔の大名の妾などが跋扈したのには、一大理由が有るのだが、それは餘り長文になるから茲に省く事とする。

東 魚 本妻に子のない淋しさが、裏面にうかゞはれる。

(595) 當坐のかれの顔へ風呂敷

秋の屋 放蕩息子などが、母の隠匿して置いた、金子を持出す處を、忽ちに發見されて、面目が無い故、其處に有合せた風呂敷を天窓から被つて顔を掩ふといふやうな句であらう。

東 魚 途上で都合の悪い人に行逢ひさうになつた、女房などでもよきそうに思ふ。一寸風呂敷で顔をかくして氣付かれぬ様に逃れる。

省 二 私も女の場合に解してゐたのだが……此句眉斧日録五にもある。

(596) あくらの側に上下の恥

秋の屋 前句がないので少し解し難い。三々九度の盃を舉げ

る婚禮の席上へ、花嫁の前の情夫が飛込み、音羽屋もどきで揺り懸るといふ句であると思ふ。

東 魚 場合が充分見當つかぬ。上下で出掛けた息子などがぐれて歸つて叱られる折るか、それだと「あぐら」が適切でなくも考へられる。

省 二 ？

(597) 老のむかしを咄す臺所

省 二 家庭に於ける年寄の咄「和尚のむかし咄す臺所」(ハム十一)の方が深か味がある。

秋の屋 其家の老母などが、下婢に對して昔語りをする。

東 魚 今の家庭に引直しても、此情景は云てある。

(598) 婆々はわすれて仕廻我顔

省 二 年とつて數くちやになると我、額など忘れてしまふものだ。顔などに必要もなくなつてしまふ(私は自分の齡を忘れるようになつてしまつた)

秋の屋 鏡などは幾十年か見た事が無いから、偶々水鏡でもみて、オヤ何處のお婆さんだらう、つひに見た事のない顔だ、といふので少し老してゐる。

東 魚 深い意味はなく、まるで鏡なんか見もしない。それ程に老ひ朽ちたと云ふだけを、かう興深く詠んだのであらう。

(599) 從弟か連れて歸る桶伏

省 二 桶伏などは随分滑稽な考案なのだから、エログロ時

代に復活してよさをうだ。徒弟であつて興ある作。「伴頭がきて桶伏にのびをさせ」

秋の屋 兩親は勿論伯父でも跋が悪いから徒弟は適當である。

東 魚 全く徒弟は動かぬ處だ。眞の兄弟より工合がいいものだ（と云つて私は桶伏にあつた次第ではないが）現在でも單に勘定がつかず、居残つて金策を待つてゐるのに對し、桶伏せになつてゐると云ふ地方がある。私は福井の人がいつたのを直接耳にした。

(600) 紀の關守の猿にさすまた

省 二 紀の關は紀伊和泉の境に在り、刺股は捕物の一道具なる事前句に陳ぶ。此句關所風景が出て居る。

秋の屋 紀州根來寺の故事で、戰國時代に根來寺の惡僧が跋扈して、屢々戰亂を起した故に、天正十三年の春、豊公が軍勢を差向けて討伐し、遂に根來一山を灰燼に歸せしめて、後患を除いたのであるが、此句の「猿」は豊公のことで、其軍勢が押寄せて來たから、紀州の國境の關守が、刺股を揮つて防禦すると、稍々滑稽化して咏むだ句であると思ふ。

東 魚 往來の少い山間の關守をなぶりにくる猿を、あり合ふ刺股を振つて迫つた處が頗る漫畫式で面白い。故事はなさそうに思ふ。

省 二 故事解を拜讀せしが、「猿の皮干す關の荒垣」（眉五）などの如く、句面丈の解釋で可なりと思ふ。

秋の屋 すると、紀の關守に何か故事來歴が有るのではない歟。

省 二 紀の關守が香蘇散盛る（ム九）もあり、來歴はなけむ。

東 魚 故事説面白く伺ひましたが、そういふ取扱をした例は甚だ乏しい。句がもつと時代があとのものなら、さう云ふ解釋をしても適切かと思ひますが、此場合では私は未だ不安に思はれる。

(601) 初會に先の見へる七夕

省 二 七夕は吉原の紋日の一つ。「先の見へる」は八潮等を指すのか。

秋の屋 七夕は吉原の紋日ではあつたが、八潮や二度の月見のやうな、大紋日では無い。先づ序曲とも云ふ程のものである。東 魚 たま／＼七夕の夜に初會に揚つた客。これは辻占が悪い、七夕様じゃ、いつ裏を返えしにきてくれるか、どうで來年ものだらう——先がみえすいてゐると云ふ諧謔味であると思ふ。

(602) いかた便りに歸る小舅

省 二 箆に托した便によると、小舅が歸ると認めてある。（前句が欲しい）。

秋の屋 如何にも前句が無ければ、解釋が出来ぬ。

東 魚 前句によつて判明するのだが、山深い方へ行つた小舅が春になつて箆の下ると共に又歸つてくると云ふ場合かと

思ふ。

(603) 鶴は龜より人をさわかし

省 二 〥「繩張をしい／＼鶴の評議なり」などの一例の如く江戸時代は鶴は大切がられたもの。

秋の屋 〥昔は鶴を捕獲して、死刑に處せられた事も有つたやうで、人を騒がした場合も有つたらう。

東 魚 〥献上の鶴などとなると、それこそ街道筋をさわがしたものだらう。

(604) 鯛かとれて闇の人聲

省 二 〥鯛のとれた時程、人聲やかましく賑かなものはない秋の屋 〥銚子の濱あたりの光景で「闇の人聲」で漁夫の右往左往する状が、よく表はれてゐる。

東 魚 〥曉闇の心持がされる。房州あたりでは鯛がとれるとさうだ鯛がとれ、それから鯨がとれる。順々に追ふて来るからだと聞いた事がある。さうだ鯛などは夜の明けか明けぬ、ほんの短い時間に釣るのである。

(605) 急く小早の反かへるこゑ

省 二 〥小早は小型の飛脚船(戰船にも用ひた。嬉遊笑覽に小早といふ舟あり、ちよろは即是なり(ちよろといふも小き物の疾き義也)。「松落葉」岡山通ひの六挺小早にるを八丁立て云々、又しとんとんといふ歌に、四丁の五丁の六丁、小早花のゑじまへおせやれをのこ、船は二挺立より色々數多く使用した。

「沖より十二人のりし小早横切れに押す」(西鶴諸國咄)。返返る聲で、スピードが判る。

秋の屋 〥此「反かへる聲」は、前の「闇の人聲」よりも、機巧が稍優れてゐる。

東 魚 〥「反かへる聲」は全く云ひ得てゐる。船の早さ乗つてゐる人物の姿が、見えるやうな氣がする。

(606) 隣をは人と思はず年忘れ

省 二 〥近所近邊へ無遠慮に、大に騒がねば、年忘氣分もせぬのである。

秋の屋 〥餅搗の音ならばまだ可いが、三絃太鼓で囃し立てられては、憤慨するのが至當である。

東 魚 〥此句を見て失笑した。曾て花菱君宅で我等の仲間が忘年句會をやつた。青風の音頭で八木節をやつたものだ。箱枕の底を叩き、文籠の蓋、皿、小鈴、小鈴手當りに叩いて騒いだ中に、濫いナリをした卯木さんが、腕組をして口笛をふいて、之に和してゐられた光景が思出された。

(607) 退分へ出て薬まで分け

省 二 〥退分に來て、薬を分ちあふ、さもあるべし。退分の句としては面白い一つ。

秋の屋 〥所謂「旅は道連世は情」である。  
東 魚 〥昔の道中情景が、しみ／＼思はれる。

(608) 奢盡して鶴龜を飼ふ

省 二 書畫骨董の道樂から、鶴龜までを飼ふブルチョア氣分。(拙家は貧乏な癖に丹頂の鶴を飼つた處、餌を與ふる父の頭をあの前で穴をあけた事がある)

秋の屋 驕奢の餘り鶴を飼ふは、先づ聞えるけれども、龜を飼ふのは少し可笑しい。私は龜の子を飼つた事があるが、彼は魯鈍で一向に面白く無い奴である。

東 魚 龜は金のかかるものでないが、鶴龜を飼ふと云ふ處に低級淺薄な成金氣分がうかがはれ笑止である。

(609) 氣違の一日置に通りけり

省 二 一日置は必ずしも時間的に解さなくても、好いような氣がする。前句なくしてはイキぬ作。(拙家へ狂乞食が來るが、これは二日隔きた)

秋の屋 醫師の許へ通ふのであらう。

東 魚 氣違が週期的に發作する心持ちで、一日置さと云ふ穿つた文字を置いたのであらう。

(610) 浪人の編笠斗むかし物

省 二 せめては編笠丈けが昔の物で、浪人の思出とはならう。

秋の屋 浪人の被る總笠は、歌舞伎劇で屢々看るが、あの笠は特別の物で、武士が平素に被る物では無かつたやうである。

此句の「昔物」は、古風の物といふ意で、浪人が賣残した物といふ意ではなからう。

東 魚 浪人姿も色々だが、編笠斗りは昔のままの姿だと云ふのではあるまいか。要するに浪人に編笠は昔から附き物だと心持ちかと思ふ。

(611) 心に無理の残る道心

省 二 法師の心境に入つてしまふ迄には、感情を押さへるに無理な事もあつたに相違ない。

秋の屋 現世への執着が斷切れないのが、凡夫の悲しさである。

東 魚 「無理の残る」は巧みな表現。

(612) よい男來る分散の禮

秋の屋 好男子に生れた故に、却て其身を保つ事が出來ず、親譲りの家産を蕩盡して、遂に分散の悲運に遭つたのである。

東 魚 すつきりした三代目殿の姿を想ふ。

省 二 分散の禮、—— 洵に義理堅い事である。呵々。

(613) 恥かしい所を湯舟の摺はらい

秋の屋 坐五不明。

東 魚 彼と此と略一直線上にとか、一平面上とか云ふ意味と思ふ。講釋師が、拳と鐵扇を摺拂に、例の片目はづしの正眼などといふやうだ。句意は恥しい所と湯舟の高さと、丁度同一水平線にの心持ではないかと考へる。

省 二 然らむ。

東 魚 俳諧ケイに「三圍の笠木は土手とすりばらい」を發

見した。

(614) 暮にちらりと後家の積物

秋の屋 積物が判明しない。後家が豫て芳町で最負にする男  
娼へ年暮の進物をするの敷。

東 魚 二 進物らし。類詠を探したい。

省 二 進物らし。類詠を探したい。

(615) 五月五日も毒の玉川

秋の屋 五月五日は薬日と唱へて、天より薬が降る日にも、  
高野の玉川ばかりは、依然として毒水が流れると云ふのである

東 魚 二 薬降る「季節にもなつてゐる。

省 二 支那傳來だから、朝鮮にても言ふ。

(616) 我分別のやうに薬湯

秋の屋 薬餌を何程服用しても、痼疾が全癒しない故、灸か  
針かと心に迷ひを生じて、我が分別の定まらぬやうに、彼處此  
處の薬湯を浴み試みても、更に功験がないといふ句であらう。

東 魚 二 我もの顔に薬湯に浸つてゐるさま、この薬湯は巳の  
発見なのだと云はぬ計りでゐるのを、斯く詠んだのではないか

省 二 自家で薬湯をたて、居る場合ではないか。

秋の屋 昔は煎薬をも、薬湯と稱へたが、此句はその方にも  
考へられて、確定しかねる。

省 二 然り、最初薬の方にも考へたのであつた。ヤクタウ  
は湯薬とも言つた。

(617) 踊る時には袖が魂

省 二 袖がなくては踊れないのが、日本の舞踊だ。

秋の屋 現代の舞踊は、ヅロース一枚が魂で、昔の六尺袖よ  
りも異彩を放つてゐる。

東 魚 二 袖が魂はうまい。日本舞踊の特徴を云ひ得てゐる。

(618) 雪の寒を止んで覺

省 二 俗に雪のふる日は、(冬の雨の日より)、却て温い  
氣がするなどと云ふが、止むでから日暮になると段々と底冷を  
覺える。

秋の屋 前説は如何。前夜は悪く寒いと思つたが、今朝起出  
てみると、雪が四五尺積つてゐる。前夜の寒さは此雪の故であ  
る。と云ふのではない敷。

東 魚 二 雪の翌朝晴れたのは、俗に裸虫の洗濯などと云つて  
暖かなものとされてゐる。で此句は卍巴とふつてゐる間は、其  
光景にみとれて、左程寒を感じないでゐるが、降り止んで、木  
々も雪に覆はれ、あたりがヒツソリとして、俄に寒さを覺える  
との心持ちであらう。

(619) 新らし過て凄い賣家

省 二 何んだか譯がありそうな家だナア。其譯たるや……  
秋の屋 化物屋敷が變死者の出た家か、賣家の札は三年すぎ  
ても剝がれぬ。

東 魚 二 實に巧い句だ、穿つた句だ。

# 演藝今昔名譽帳

## 正岡 蓉

### 1 桂文治腹痛美談

「下谷上野の山かつら、桂文治は落語家で  
でん／＼太鼓に笙の笛……………」

と歌はれた桂文治は、今から丁ど二代  
前である。

同じ時代の天津繪には、文治が鹿兒島  
芝居噺、おなじく引拔道具立……と残つ  
てゐる位だが、西南戦争をあてこんだ芝  
居噺をいろ／＼と創作し、仲々人氣を取  
つたと云はれる。

所でこの文治、一面はおそろしく着道  
樂で、初春の寄席へ出るときなど、元日  
から三十一日まで正月一ぱい毎晩服装を  
變へ通して嬉しがつて居たなど、いふ逸  
話が残つてゐる。

而し、晩年は可成落魄して昔日の面影

もなかつたらしいが、この文治が全盛期  
にある寄席で大道具大仕掛の芝居噺と看  
板を上げると途方もない大入だ。

さて、トン／＼と噺が進んでいつて、  
うしろの浅黄幕がチヨンと落ちる。

同時に華かな道具立で、鳴物が入る。

いざ、これから聲色で芝居が、りにな  
らうといふクラキマツクスのとこで、  
どうしたものか、文治は、急にヤリ／＼  
とお腹が痛んで来た。

それも、針でもむやうな、殆んど耐え  
られぬ痛さである。

「ハッ」と思ふと文治、急に型を改め  
て、

「あの皆さま、大へん申譯ございませ  
んが、急に腹痛を催して参りました——  
で大へん申譯ございせんが、ちよつと

便所へやらせて下さいまし」

と、そのまゝ、そ／＼と高座を下り  
便所へ飛込んで用を足すと、再び

「どうもお待ち遠さまでございまして」

と悠々、さつきの噺を續け出したが、さ  
て、その文治が便所へいつてゐる間、ひ  
とりも立つお客とてなく、みんな熱心に  
待つてゐたといふ。正しく此は藝の力だ  
文治の偉さだ。藝道美談に非ずして何ぞ  
や！ではないか。

### 2 狂馬樂自宅獨演會

師吉井勇の戯曲や歌にうたはれてゐる  
狂ひになつた蝶花樓馬樂は、今から二代  
前の馬樂がそうだ。

頗る奇行百出の男で、あるときヨコハ  
マの方に戀びと——といふよりもむしろ  
さつかけなく情婦と呼ばせて貰ふ可きだ  
らうが——とにかくさういふ筋の女が出  
來て、あるとき、はる／＼ヨコハマから  
淺草の馬樂の家まで、その情婦氏が遊び  
に來た。

朝から一杯のんだりして、いよ／＼電

氣の點く頃になると、馬樂をくきと立上り

「ちや一寸、寄席に行つてくるから、それまでこゝで待つてゐろよ」

と云つたものだ。すると、その女が

「お師匠さん、今夜は寄席をお休みなさいよ。その代り私がお客になつて聞いて上げるからさ、私に一席きかせてよ」云はれて馬樂考へてゐたが

「而しお前、寄席のお客は二十錢（當時の入場料は廿錢位であつた）呉れるぜお前に聞かせたつて、一文も呉れない」  
「あら、随分ねえ、ちや妾も木戸錢を拂つたら聞かせてくれる」

「そりや聞かせることも。お客様だもの」

「ちや拂ふよ、さあ、二十錢」

女は二十錢銀貨を投り出した。馬樂はそれを見るとすつかり喜んで

「や！二十錢だしたな。ちや今夜は寄席をみんな休んで、自家で獨演會だ。みつちりお前にきかせてやるぞ」

と、その夜、愛人を前にして三席熱演したさうだ。

愛人の二十錢に感激して寄席を休み三

席喋つた馬樂と、その三席を心から嬉しく傾聴した彼女とは大へん愉快な戀愛と藝術の融けあつた美談ではないか。馬樂が差おさへに來た執達吏に、得意の落語をきかせて感動させ、その差おさへを示

## 粒々集

松山 前田 五 健

こゝまでの智恵それから先の智恵郵便屋同情されて雪を踏み世渡りの術に妾も替へて見る滿洲に金が落ちてゐる譯でなし帳場から待つたを入れるイ、電話蜜柑山規則正しく熟れて冬突けさうに寒鯉底に型を見せ

談にしたのもその頃である。

### 3 女房殺しの文車

一立齋文車といふ講師と、ある夜、青山の墓地を抜けたのは、いまの四代目

柳家小さんが青年時代であつた。

いくらネオンの明るい今日でも、やはり谷中や青山染井の墓地は陽氣ハ風景にはならない。

ましてや明治の末、寂しい暗い墓道で

正月の城門風の吹き通し

御影 長崎 柳 秀

背の子の機嫌はシヤベリ續けなり  
岩田帯解く氣安さも戊の年  
風船に似る一生に金を追ひ  
遮斷機へ腮々のつけた馬の顔  
想ひざし笑うて受ける人の前

あつたに違ひない。

文車は、いまの小さんと黙々とその墓みちを、麻布の方に急いでゆく内、向ふから若い女が來た。――夏のことと白い浴衣を着た女である。

所がそれとすれ違つた瞬間、いまで駄つてゐた文車が

「ヤイ、この阿魔！」

と叫ぶと、いきなり、その女をつかまへやうと手を伸ばした。

「あれーッ、助けて」と女は驚いて逃出したが、

「汝、太えやつだ、逃げるつたつて、今度てえ今度は逃がすもんか」

と、文車は大へんな勢ひで追駈てゆくやがて、その女に近付くと、相手の黒髪をむんづと掴んでするくくくと引戻したが、星明りて相手の女の顔を見るが否や

「いや人間違ひでござんした、どうぞ御勘辯を願ひます」

と三拜九拜して文車とこゝろ小さんの方へ引返して来た。

呆氣にとられて居た小さんが

「一體、文車さん、どうしたんで」と訊ねたら

「いや、今度女房を殺す癖をやるのだが、その意氣がどうしてもわからないので、いま一寸實地に應用してみたんだ」

と文車おほらかに答へたさうだ。

こゝまで苦心する藝人たちが又この苦心まで買つてやれる客が、いま何人かをかぞへられやうか。ちよつと寥しい問題である。

#### 4 酒 と 修 業

明治講談界での名人、むらやま 邑井一といふ人ひどい大酒豪であつた。

今も残る淺草公園の金車亭といへば、當時から、五指に屈せられる禪場であつたが、ある元日の而もヒル席の事である。何しろ講談華やかなりし頃の、わけて邑井一の熱演といふので、元日の講談ファンは、文字通り立錫の餘地もないほどギツチリと金車亭へつまつてゐた。

そこへおめあての邑井貞吉——なんとこれが大トラのぶぶろくぐでんで、而も自分ひとりではヒヨロついて歩けず、門人に手を曳いて貰ひつゝ漸く高座へ上つて来たがピヨコンとお辭儀をするが否や「諸君おめでとう御座います。ウーイ、何、何しろ つて居りますから、こ今日はこれで失禮……」

といつたきりで又そのまゝ飄然と下りつて了つたが、満場の客、この無邪氣な一の醉態とその磊落な上に親愛を感じて、誰ひとり怒る者としてなく、却つてヤンヤと絶讃したといふ。

大ていの者ならハリ倒される所を、其が藝人の愛嬌となつて欣ばれたなぞ、實に邑井一の高大な藝徳に他ならぬといつてよからう。

所で、話術界では常々「酒」を斯ういましてゐる。

「酒をのんで、けふは酔つたなと思ふ時は、成可、鹿爪らしい、左様然らばの侍の出る癖をやれ。つひ堅い詞を使はうと注意するので、酔拂つてゐるためのロレツの怪しいのが自然になくなつて、喋つてゐる内に酔がさめるから。反對に酔つてゐる時、酔拂ひの癖を断じてやるな自分は今のんでゐるから、この儘普通に喋つても酔拂ひが如實に表現できるといふ安心のため却つて餘計酔が出てつひにはほんとに癖のズチを間違へる事があるから」と。昔の名人のおしへたさうだが、嘸みしめて味ひのあるコトバである。

# 江戸のうはさ

▼「先づ新年はお目出度う」といつてもこれから、書く噂は昨年のものであるが、テレビジョンの實用化されない今日遠距離電話のうんと高い今日そして又この雑誌が純然たる營業でない關係上、この點は不悪おふくみの上、炬燵の中で、もよんでいたゞきたい。

▼十一月十八日、迷亭、花川洞、茶六氏より銀座の寄せ書を書いて、オヘラの歸りにギンザで寛ぐといつた尖端的行動だつたさうで、茶六氏によれば「本格的なオヘラを觀に行きました。だあれも欠伸なんかしませんでした。でも麻雀の方がよい」とは迷亭氏ばかりではありませぬ。「どんなオヘラであつたか、この一文では見當がつきさうです。尙ほ花川洞氏は麻雀が債鬼よりも嫌ひです。

▼大佛は美男におはす鎌倉へ轉居された鞍馬氏、宅から店ま

では一時間二三十分程もかゝり朝早くより夜おそくまで「松竹梅」の爲に大馬力をかけてゐられる。益御發展を祈る。

▼溪花坊氏の句集行會で貰つた「万句會」のエハガキを久良岐氏におくつし所が、直ぐ御返事をいたゞいて「老生去明治三十三年頃相州箱根にありて病中百句合十冊を芝の村幸より得爾來三十五年今日の珍重を見る」とあり。あゝ明治三十三年

私は未だこの世に生を享けてゐない時代の話である。地球は廻る。地球は廻る。子規に和歌を教へたといふ氏だ。古い話もあらうといふものである。合向はかくしやくと句に文に、活躍して下さる老師をもつ日本川柳界、また多幸なるかな。

▼玉兎朗氏、區議戦應援の爲東奔西走席のあたゝまるひまなく、爲に東念寺ニユースの入りないので淋しい。

▲十一月廿五日、前進座の「観進帳とお千代傘を見る會」——吉川英治作——

同廿六日、通話會（川柳作家の出演）の觀劇、一たゞし電話局の慰勞會に非ずが、ありお小遣に追はれることばかりとはM氏のたゞり。

▼同舟會のメンパー坂下也奈貴氏醫議戦に出馬され、兩吉氏等連日詰切り應援の結果、好成績で榮冠を獲られしと、聖莊氏より川柳雜誌支部聯合會席上にて、伺ひおそまきながら、この欄にてお祝ひ申上る。

▼十二月十日、田中不倒人氏の新婚披露宴、劍花坊、○丸氏を始め櫻田烈士氏ご出席された由、きやり關係の十二人が二曲の金屏風へ自筆の短冊をはり交ぜして贈られたとは、近來の快ニースである。

▼十二月九日、雨の夜澁谷に「瞭火」の句會催さる。

▼十二月十一日附、左の諸氏より寄せ書をいたゞく。雀の子三番史、丘翁、鐵扇花、清流、

犇郎、一昔、米花、鬼佛、紅ン坊。（神田グイブ・ル・ジャパンより）

▼昨年十二月十日より、國民川柳會を川柳研究社と改稱、本年一月より會報「國民川柳」を「川柳研究」と改題さる。三太郎氏の「若々亭から」の一文を次に抜抄して、この改稱の理由を紹介少々お知らせしやう。

「作句はしない、然し川柳に興味は持つてゐる、さういふ人に讀んで貰ふ雜誌を作る事を今後十年計劃で實現しようと思ひ立つた。それも考へて二年終つた。その結果愈々來年から向ふ十年かゝつてそれに近いものなこしらへやうと決心したのである。それには「國民川柳」ではフアンの手懸りにならない。そこで少し大きい「川柳研究」としたのである。」

▼きやりの杜若氏と久春氏の合作くぢらひげ細工を雅人に頒布する會が東京の川柳家諸氏の後援によつて起さる。詳細はきやり吟社宛問合されたし。

（亂 駢）



# 川柳塔

路郎選

贈賄の女を中に引致され  
運勢を見て拐帯の行きつまり

生田翠夢

大笑ひ自分の椅子を忘れてゐ  
寝てばかり居て奥様の不機嫌な  
正月をいづこの空に見るものを  
職人と思へばこそその朝を起き

吉田水車

元日を訪へば去年のまゝである  
まな板の白々として三ケ日  
子供だけ正月にして寝るときめ  
そらあをくくとぬげげさびしむ  
おもしろくさくらは喧嘩してゐるなり

うつむいて行く鼻先きに慈善鍋

銀狐お金で賣つた身なりけり  
いつそもう殺してと云ふ切れ話  
さてもさても女給を送る身となりぬ  
人生論僕は歸つて寝るとしやう  
口紅のついた煙草を吸はされる

西田艸樂

女一人交つて話が宙に浮き  
紅葉の寺三日も出家して見たし  
人を馬鹿にして薄菜のどを越し  
頬杖で考へた事が早寝なり  
二合ほどバケツへうつす米の音

高橋かほる

百姓とをくそろばんに茶をよばれ  
棚板にならすとんどへ放り込まれ  
東京音頭 大阪音頭チンドン屋  
鏡臺を脊なに保険をすゝめられ  
餅花をひつつけ閑の無いマダム

橋本 緑雨

派出所和服がめだつところなり  
いくたびか素顔を詫びて送り出し  
金策に髭のあるのをおかしがり  
棺桶が二つ 噂の 人にして  
十二月九日帝展しひけり  
二つ 三つ賣れて帝展しひけり

阿部 閑生

謝恩會師は熱爛にむせかへり  
憂き顔へ君の密柑の汁がとび  
枯蘆にかゝり吹かれる捨手紙  
仕向けられる通りになりて母は老い  
丸善でほしい洋書の値にあきれ

住田 亂耽

極月の灘に出入りの米と酒

これでものがいへたらと小犬の顔を見る  
精神も貧困そこへお正月

關本 雅幽

年寄りの理屈箱でも焼きましたよか  
吹かるゝがまゝのすゝきの羨やまし  
鼻汁を吸る女房は貧に耐え  
正月を縫ふ手に甲斐絹摩れて鳴る

春元 紀太

縁談へ脊を丸くして聞く弟  
勝碁へ冷めたくくなつた碁石  
大望は捨てた春なり三十二

永田里十九

湯槽から柳の揺れを見つめたり  
敷金が今の家賃の三分とは

福田山雨樓

泥棒みたいに夜中歸つてひとり食ふ  
死んだ友の顔が横切る十二月  
月給が昇り家來が出来るなり

○ 奈良井柳人

儲かる日母の小言も嬉しくて  
洋食の皿が色氣を捨てさせる  
大阪が戀しい女のハイモニカ  
純粹な郷土町家に灯の暗し  
人みんな握ることしか知らぬ手か  
大根は二年子八東の土匂ふ

八東支部一周年記念近づく

喜多 春秋

雲を忘れて喧嘩し  
寶ラ子の連れて歩くけば袂持ち  
表札を額で見えてゆく郵便屋  
商賣の弱さを知らぬお前たち  
馬鹿な金使つた奴を送り出し  
ボーナスへちやんと来てゐる洋服屋

石森 静太

霧ふかくおんなが窓をしめてゐる  
お白粉になほさら嫌になつてゐる  
すずめらきてはいぬ掌がやはらかい  
美しいそらに死にたくなつてきた  
逢ふのかしら看護婦眉を刺つてゐる

病床吟(三句)

きみのすきなはお花晶にしやがむ

西村 明珠

隣の子遊びに來たい窓を見る  
正月の炬燵女にとられたり  
歩るきたい酒に正月出來てゐる  
色町を通り抜けるに子をせかし  
子がをますさかいと云へば許される

水谷 鮎美

長女茂美出生(十一月三十日)

眞夜中にきく産聲の夢でなし  
慶びのあまりて酒をのこしたり  
曉に軍用犬を走らせる  
獨り逍遙根上り松の風  
妓のいろへ二階の窓の小さすぎ

姫田 夕鐘

元日だそろばんづくはやめましよう  
度のきつい眼鏡のなかの師の慈愛  
貸した弱身が取りに行くなり  
落葉へおちば重なるさびしさよ  
生きてなはつたかと島田がもつれて來

年頭吟(二句)

われガスリンとなり火に飛ばむ  
劍戟の如く嵐を行かむかな

長女二百日

子よ、子よ二ツと笑へば白南爪

追はれる者の飽大工の子澤山

おちぶれた女に逢ひぬ町の灯に

北川あや美

打ち解けぬ二人にいんきな都屋でした

金のない戀はキツバリなげ出され

ホネムーンなど考へて風邪を引き

秋の夜別れる事など忘れて居

戀心他の女給に冷やされて

市場 没食子

親類同志喧嘩をさせる後家がある

酔はされて本當の儲け言ふてゐる

正月が産月ですとうれしさう

お世辭にもせよピカーと言はれたり

荒井英賀夫

酒のめば女も強きものと知れ

生がひは金に追はれてゐればよし

猫の子を上げます程の仕度です

二十八手紙の戀のまどろこし

奥さんにされて言葉にけつまづき

満洲の空に雀の小さすぎ

彼女より母が戀しき病床よ

初雪の明日を忘れる支那料理

年寄りを口實にした馴忘れ

山の芋ばかり食つてはたまらない

ツンとした顔で女のひきづられ

君飯は早いと茶碗取り上げる

奥野 禿山

嫁もろてからは銅貨もありがたし

たんまりと貯めて氣前がないのなり

生け花の妻へ手紙の文字を聞き

金の話は聞き厭いた飯にする

日野 華水

中澤 濁水

出羽ヶ獄物理を知らぬ顔で負け  
自轉車で無駄な輪を廻ひ言傳かる  
往診は意味深長に靴を履き

熊谷紅

年五十薬を否定せずなりぬ  
シルクストッキングありありと坐りだこ  
春來れり吸取紙なと替えておこ

(遺吟) 河合紫石

孝行が一層目立つ十二月  
貧乏の伯父と話の合ふくらし  
令夫人噂の通り塗つて出る

竹内機見女

元の日のしめめの心のしばしうれしうて  
春のステツプあの人もある人も  
性格の破綻に本のうづたかし

須崎豆秋

馬の目も信號燈の方を向き  
遠慮して巡査は濡れるとこへ立ち  
はげ山にはげ山だけの陽があたり

首藤竹楓

健康な我が影まろし山のめし  
君の青春僕の青春なり口笛や  
劍劇のチト痛かつた足を上げ

廣江天痴人

謝近火御見舞火元をなじる如く並ぶ  
歎よおまへもちつとは錆て見たいだろ  
立腹の力がほしい百姓だ

平井春光

滞つた家賃拂へば柿をくれ  
意地といふものに命をおとしかけ  
東京はツンとすました女學生

中島鐵洲

逢ひに來たレインコートの掛けどころ  
ミンシん臺子に拾はせたカタン糸  
仲居に聞げば燈火管制

大西八歩

いさゝかな儲けに善人うろたへて  
だまつてる方がつかれて戻つて來

泊る氣と泊らぬ氣とへ灯が這入り

宮岡 白峰

だれもこぬ日の座布團の色

一足の違ひは悪く云ひに来る

呑めば酔ひ酔へば笑つた君なりし

石丸 春峰

喜んでやるにさびしい母一人

初日の出うつかり爛が出来過ぎる

戀人に取りらせて嬉し天津風

石曾根 民郎

赤化再燃に働きかけたと言ふわが

印刷職工A君、突如檢舉さる。

君が赤とは木枯へはやまつた

世相對談

自他ともに許す不平が屯する

大鶴 喜由

斜につくポケツが掏摸をそゝのかし

ホテルの錠戀愛戰に異性あり

渡邊 曉童

産婆悠々湯です水です

赤ん坊の顔みつめれば湯がかげり

越智 虹子

自己卑下でなく上役へおせつかひ

だれもかれもが哀れに見えるお釋迦さん

芝 四葉

罷るるに明かる過ぎるとおどけてる

戀なかる共に働く夢を見し

岸上 錦石

手付金壹圓也の家を借り

松下 小柳子

渡邊橋金の持ちたい心わく

岩崎 柳路

ガレージの裏白少く小さ過ぎ

近藤 勇

京都三條大橋にて

醉眼へ彦九郎の眼の鋭どすぎ

明石 柳次

芋粥に起こされてゐる

月  
金・銀・鐵

評

近作柳樽より

金持ては山を降つてゆくこゝち

觀月

水車——久しぶりにいつもの緊張の十七字に接した。現實をしつかと握つてはなきない作者の態度、此句は刹那的な感じの句である。山を征服して下る氣持ちはまことに愉快であるしかしそれも一步一步消えてゆく儂かない優越感である「降つて」は下つてとしない。下五を假名にしたのは句の餘情をたすける。

山雨樓——水車君の見方も面白い。しかし僕はこの句が儂かない優越感を詠つたものではなくて、金と云ふものゝ人間に及ぼす習性(金持心理と云つてもいゝ)を見付けたところに面白味があるのだと思ふ「降つて」は原句の儘でいゝだらう。

鮎美——句主の心境のさびしさを詠つたのでしよう。佳い句です。消へてゆく金餘情

雅幽・水車  
鮎美・山雨樓

すくない金の冷情さに、ひとり一人ひとりづゝ友の名を消してゆくさびしさです。心にうつる山を降つてゆく姿ですれ。

雅幽——希望は常に彼方々向き亦上を向いてゐる「金持てば」人情のしからしむるところと言ひ度い。佳句であると僕も思ふ。

重壓へ君と僕の氣がそろひ

新市街

水車——君と僕と、の君も作者自身ではあるまいか。重壓と云ふ句語に對し少しあつけない叙法とも思はれるが、作者は赤裸々のすがたもきれいに詠みこなしたそのきれいさは別に拵えた感じがない。同君の「胡瓜もみ」の句にしても、別な境地のきれいさを持つてゐる。

雅幽——さうですな——重壓と言ふ課題に不斷の作句練習がらくる上手さが手傳ひすぎてるやうです。だが重壓に逆らふよりも斯うした軽るさに慣れて行く、社會の一端を思

はせられる。

鮎美——「重壓へわれらふたりの氣がそろひ」とする方がいゝ事はないでせうか。

山雨樓——それでは句の調子が弱くなるやはり原句の儘でいゝと思ふ。そして句の持つ意味は重壓に對する軽い論議ではなくて、寧ろ鋭鋒を包むお互ひ同士の一時的なカムフラージュをほのめかしたものであらう。水車君の解は使はれてゐる間の「君」と自分の身體になつてからの「僕」と同じ人格だと見てゐるやうであるが、同じやうに若い血が通つてゐる二人だと見たい。

あゝ海をひかへた驛の肴鮎

麥刀子

山雨樓——新鮮な感じのする句だ。驛の肴鮎とは驛で立賣が賣つてゐるそれだと思ふが、或は驛の飲食店で賣つてゐるそのことかも知れない。何れにしてもあゝ海をひかへた驛の感じは旅をするものゝ眼に、言ひ知れぬよるこびみ興える。肴鮎を買つて、この肴もこの邊の港で漁れたものだらう、と聯想し乍らバク付く心持はほんのさゝやかな、好感ではあるが、詩が深くこもつてゐると思ふ。そこを見付けた作者の豊かな詩感に共鳴する。

水車——やはり驛の店であらふ。平和な寒

村の情景躍如。スケッチの句もこうした地方色豊かなそして新味のあるのが望ましい。

鮎美——文字の表現もいゝことのひとつです。旅にゐる句主の實感句とも見られ、また磯の香のたゞよひきてほんとうにほゝえまれますね。

雅幽——「びかへた」の「た」か「て」とあれば肴鮎の味が、此の驛の景色で賣れるやうに思はれる。原句のまゝでは「た」がどうもこたわつてゐるが矢張り「た」でなければ「あな海」が効かぬでしうね。

山雨樓——「て」とすれば句の主格が肴鮎に來るし、原句では主格が「驛」と「肴鮎」の二つになつて嫌ひはある。だが原句の方が印象的でいゝと思ふ。

九月號表紙の鬼

臍だけは皆忘れずにつけており

鴉 天

雅幽——前書きから見れば「つけており」は「つけてあり」であらう。前書きを云つてしまつても面白い句だ。「九月號の表紙の鬼から」と前書をして、其の表紙の鬼から人生觀を連想して生れた句と見たい。

鮎美——句主は詩魂のなから童心によみがへつてゐる。ひとときでもこうした詩境

に没りたいものだと思ふ。幸福な鴉天氏よ。

山雨樓——あの表紙は麻生リリちゃんのお切紙細工から取つたものであるが、桃太郎の足が内踏みであつたり、鬼の臍が上の方にあつたりして流石に、娘ッ子らしいやさしさが隨處に表はれてゐて面白い。その臍に川柳を感じた句主も凡ならぬユーモリストではある。

水車——諸説につきる。

父 病む

母と居てそこら重たい夜の空氣

鐵 吉

雅幽——肩書に對して「母と居て」は事實であらうが、働きが無く此の句を損じてゐる。「そこら重たい夜の空氣」で救ひ上げた此の場合の作句氣分からして、不満足でなければならぬ。僕は要求するものを作者が適洋く思つて居ると思ふ。

鮎美——この句解しかれます。今すこし父の姿や母の姿を吾が心のおくそこに、見すえて慈しみに生きればなりません。もう一度詠んで見てもはつきりで、きません。作者の再考を望む。

水車——がみがみ言つてもやり父である其父の病めるを母と看まもる場合「重たい」

と言ふのは勿論感じの表現であらふが、不消化のやうでむしる此語のためにこわされてゐると思ふ。

山雨樓——この句から純情を汲まねばならない。親子三人が重い沈黙の中で不安に襲はれてゐる情景は、寧ろ墨繪のやうにはつきり出てはゐないか。そは／＼とするいつもの母が、ちつと父の重き床から眼を離さない沈痛な面持ち迄が窺はれる。僕はこの句に無技巧の技巧が秘められてゐるやうに思ふ。

娘の嘘を一つ見付けた入黒子

遊 帆

鮎美——つけほくろとしたいね。何れにもいゝ様なものゝや、積極的(入黒子)よりも消極的(つけほくろ)にながれてゐるのが娘らしさを感じしむるものと思ふ。シヨップガールの家にあるときの印象ともみられる。そして相手はかゝる優越感をみたのです。乙女心のひとすぢみちを歩いてゐるときのかゝるい虚飾がかぶさつてきてゐる。よく詠へてゐるおもひます。

山雨樓——入黒子と付黒子との違ひに就て鮎美君のやうな敏感さを持たないが、この付黒子はほんとの黒子のある上に、虚飾を施したものを云ふのであらう。それを娘の嘘と

見たのは決して憎しみの心持ではなくて、寧ろ同情に似た可憐さを覺えしめる。

水車——一つ見付けた、と言ふかげに見まいとして何かのはづみに見てしまつたと言ふかゝるい哀愁があるやうだ。

雅幽——入黒子と付黒子は鮎美君の説がよいと思ふ。「娘」と「一つ」と言ふ句語から見つけた人物を想像して、娘の優越感に對して軽い復讐を感じ、そつほを向いてほくそ笑んだまでの句と思ふ。

川柳塔より

戀をさえざるあばら家の父

新水

水車——十四字詩として内容に迫るものがある。戀をさえざるのは父でなくして實にあばら家であるのだ。あばらや即生活を通して觀た作者の同情と詩情が、此句をものしたものと思ふ。

雅幽——それでは此の戀はあばら家に籠つてゐるのですか。あばら家の父はがんとして許さぬと言ふのではないですか。十四字詩の迫力は大いに認められる。

鮎美——許すも許さぬもない。父性愛の強調されてゐるごい句と言へよう。内容に凡と云へませうが、この情景の父をおもふ

時、いひしれぬ戀愛がおがみたくなること、ちから強さが句のいのちですれ。

山雨樓——句は寧ろ古調のやうだが、現代の視角から眺めたところに又格別の趣がある。父性愛云々の評は考へ過ぎて句意は水車君解の通りだと思はれるが、生活苦に追はれて息子(或は娘かも知れない)の時間を與え得ぬ一家のいらだちが窺はれる。叙法がいかに老練である。

さぶしさはめがねのたまのきずだらけ

春秋

水車——眼鏡を用ひる程の人にして、玉がきずだらけであることは言ひ知れぬ。佻しさと頼りなさを感じるだらう。僕は必要に應じて眼鏡をかける程度だがたまに使ふだけに手入れもわるい結果、きずだらけのをかけて其不透明からうける氣持ちは正に心まで曇る思ひがする。常時使用の人にして此憂き目に會はれるのは其不満足するに難くない。

鮎美——これはまた傷心のめがねですれ、春秋氏を想ふときうなづかれます。路郎師の「元日だせめて眼鏡を拭きませよう」の玉吟

があります。

雅幽——水車君は「必要に應じて掛ける程度」まで突込んで味つてゐるが、其處まで僕は觀ない。眼鏡のきずは作者の淋しき心で一より多を産んだ「きずだらけ」であらうが、ちと誇張すぎてはゐないか。

山雨樓——上五は説明調を脱しない。下五も雅幽君に同感である。しかし一句詠み下して見るとさうした難點が格別目立たない。そこに句の眞眞性があり、作者の個性で塗りつぶされた強みがあるのだと思ふ。

腕力もまじり歪おしつける

變人

山雨樓——嬉しい句だ。と一應軽く見てゐたが、味つて見ると人間味の横溢してゐることに氣付く。上五はちゝ大げさな言葉のやうであるが、その腕力を感じるところにとても痛快な川柳味が漲つてゐる。變人君の酒は知らないが面目は躍如としてゐる。

水車——腕づくと言はぬところに、此句のよさがある。腕力即權力とも觀る。句境の平凡を描寫によつてうまく救ふてゐる。下五が少 不燃焼のやうだ。

雅幽——兩君の説で言ひ盡くされてゐる。變人君の個性を知りすぎて居る僕としてい

つも川柳塔にこうした句の少きを遺憾としてゐた。「猪口の音大和平原秋ばみて」や「秋の色」の句なども君のものにあらすと思ふ。

鮎美——現代思想の一端が酒席にあらはれてゐる君と僕なのである。酒はのんでもまいでもと云ひたくなる、もうあかい顔をした者の勝利と言へよう。

エスカレーター―旦那のあごを追つかける

豆秋

雅幽——矜足の小奇麗な年増女の姿が見える。好人物豆秋氏の笑顔さえ反射して面白い句である。美しい若い女と観るもいゝが恐らく豆秋氏の眼に映じたのは年増だらう。「追つかける」は遺憾なき迄に働いてゐる。

山雨樓——人物は雅幽君の解に譲らう。で僕はこの句の描寫のよさを讃えたい。女のこととは「旦那のあとを」によつて直感出来るし下五に依つて甘つたれた素振りもうかいはれる。作者はそれを素知らぬ顔で眺めてゐるやうで、仲々侮れぬ川柳眼ではある。

水車——豆秋畑と言つては失禮だが、全く豆秋調やへるばかり。追つかけてゐるのはお供の者だとも思つたが、雅幽氏説によつていよく句が生きる。此人の天稟の川柳眼多言を要しない。

鮎美——評は諸氏に賛成です、前號の月評

句「秋風の中で乞食におがまれる」と、とも温厚豆秋氏はこのろのそこに座つてゐる。

もう冬だなあ水呑みながら星を見る

小柳子

雅幽——若冠小柳子よ、何故淋しいかと僕は常に彼れに問ふ。彼は之に答へず、言葉をも以つて彼れの先單たらんとする愚劣さを僕は感じさせらるゝ。世間を識り盡くした淋しさはともすれば安逸を掴むが、青年の場合は危険率が多い。廣い社會の風波に向つて其の淋しさを吹かれ或は揉まれてほしい。先々月號邊りより彼れは進路についての悩みが句に観える。

鮎美——句主は健康體の水をのんでゐる。星がきらり空は故郷だ、ふるさとをおもふ星をみてゐるのだから。

水車——齒に沁みろ水、覆ひかぶさる漆黒の空、輝く星、徒にさみしむではいけない。しかし作者のほんとの氣持ちは輕卒に詩を扱つたのではなからふ。常々作者からうける句風上の感じは、燃える詩情を靜かな理性でおさへてゐるやうだ。

山雨樓——この句はも一つ練れてゐない。冬の追つたとをしくしく感じたやうな口吻であるが、それは月並である。恐らく句主は齒に沁みる水の冷たさに先づ冬を感じ星の輝きを見て明日の勤めを思ひめぐらしたものであらう。感懷が淺くて句の中心點がおぼ

ろげになつてゐる。雅幽君の話では句主が今作句上悩みの中にあるさうであるが、それは結局川柳の精神を把握することの悩みであらう。さうした場合名句の味に浸ることの効果的であることを知つて貰ひたい。

(五七頁より)

なぞ非にすきらしい彼、すぐに短冊を持つてきて川柳を是非書いて欲しいとの話乞はるゝが、德筆を以つて書いてやつたのが「爪弾きへ銅蓋の蓋が鳴つて居る。支六」これは彈て東京支六氏より戴いた短冊の句、彼女にふさはしい。その幻想されて情景、それ以來先生の尊稱下へも置かぬ……句に惚れたのか、僕にまゐつたのか判らない。

## 晦日の金

北川あやみ

川柳を活用すれば有難いですね。薄物の女給の肩へ手が滑りと云ふ句によつて彼氏等にとでもしてはやされたです。カフエーを毎日奢つて貰つたです。

晦日の金へ思ひやつれて居るだけさ。

と云ふ句を作つた時は「そんなに一人で考へて居ないで遠慮なく言へよ、幾等位も入用なのだ三百か四百の金なら何時でも貸してやるよ」と、あちらからも、こちらからも云つて貰へたと考へ給え。

川柳一句をもつする事によつて僕は晦日な心配せずに送れる事になつた、なんてこんな割りのいゝ話があるならうか。幻に戀人があり夕ざくら。

# 日本柳壇百人撰

1933年の金字塔

自選一句

ABC順

川柳をやつて

得をした話

一收攬術A・B・C

楊井二南

大阪 麻生路郎  
元旦だせめて眼鏡を拭きましよう

同 麻生葎乃

菜の花はあの屋根のはて屋根のど

同 朝田新水

りもりの天下晝のさびしき

同 阿部閑生

地下室へ並んでおりる邂逅ひ

島根 尼 緑之助

宿命の坩堝各々子を育て

奉天 石原青龍刀

砂金狩り喰ひ扶持のつく面白さ

静岡 榎田珍竹林

出征のはじめて母の手を握り

東京 藤島茶六

焚き終えて風に吹かるゝ身の廻り

大阪 福田山雨樓

踏切で抱けばわが子が猿に似て

東京 古谷盈光  
酒やめて心一つの冬をゆく

鎌倉 富士野鞍馬

女氣の女と見ればとんがる眼

京都 藤本福造

峠茶屋清水を運ぶ處を見せ

青森 小林不浪人

馬鹿だつた記憶をたどる朝のお茶

同 後藤蝶五郎

算盤へ頼るまいぞよ働かう

京都 後藤千枝

破門から役者の習ふ觀世流

大阪 堀口塊人

雨上りの石ころがみな嬉しさう

横濱 早川右近

耳打ちの女は匂ふ聲を持ち

京都 平岩司郎

戀に似てるがたいぶ逢はない

(A) 作文の中へ川柳を一つほり込んで置く

と國漢の教師が大善びで「痛快な句だな」と感嘆し給ふ。川柳で甲の上をとることが出来た。

(B) 先生の御意に叶ふた皮肉な句

ゐた母が無性に嬉しがつて「うちの伴はえらいもんや」と自惚れ給ふ。川柳で親孝行が出来た。

(C) 賞品の面會で一句見参して見たら並ぶ

重役様が「一齊にうなづいて「面白い趣味ですな」と微笑み給ふ。川柳で職にありつくことが出来た。

川柳へ重役の顔みなくづれ

満洲に來た名士

庄萬よし

昭和七年四月十二日午前九時 大阪市議廿二名の満洲視察團が奉天から撫順に着いた。私もメンバーの一人であつたとは、申すまでもない。驛頭に賑わふのは撫順川柳社の紫の旗である。出迎ふ人々は岩崎柳路氏夫妻以下同人十人にも近い。出迎えられるものは私もある。視察を終つてから歓迎會に白酒を傾け乍ら内地柳界の逸話で悦に入つた。同行中の

鳥根 廣江天痴人  
鉄たこをみつめて助からぬ想ひ

大阪 橋本緑 雨  
鯛すしに一人旅とは淋しいね

神戸 日野華水  
人の心を考へて見る月夜

大阪 本田溪花坊  
句帖へも都のさくら咲く散る日

石川 林 革又  
骨納め花の見頃へ思ひつき

大阪 岩崎蟬古  
ことさらに母へおどけて夜寂し

横濱 磯部天邪鬼  
悪を知りそめし幼き二つの眼

東京 井上信子  
空襲の上は涼しい星の空

大阪 生田翠夢  
曼珠沙華秋の女の情熱か

山口 磯部孔雀  
振返るたびにみぢめな自分たち

松本 石曾根民郎  
こそ／＼と秋を拾ひに出たか留守

長野 金井有爲郎  
出世も得せず大型バスに押込まれ

大阪 岸本水府  
教科書の重（是入筆）さと共に踏みしめよ

京都 紀二二 山  
むつかしく書と讀めないげんげ草

東京 河柳雨吉  
元日の夜は寂しく床が敷け

同 川上三太郎  
お元日わが子の小さきばんのくぼ

西ノ宮 黒木鶴足  
臺の たつ 菜の 柔さ

神戸 観田鶴太郎  
靴が靴のうらがねを拾つた

同 喜多春秋  
子持になつて羽織の襟が折れてまい

東京 三浦太郎丸  
木枯に電車都心を離れたり

京 城 正木柳建寺  
訪問着の着初め無沙汰を詫たびる

東京 村田周魚  
買つてやる風にも親の好き嫌ひ

大阪 森雞牛子  
底のない桶を鶏ぬけてゆき

岡山 三村叱吃郎  
一等車から百姓を何ンと見る

代議士竹田君嘆じて曰く 満洲に來て庄君の名士たるを知ると。

### 作苦より作句

朝田 新水

その頃はまだ初心者として、十七字を樂しむ友人の妻君が實業家として金を儲ける才もなく、従つて自分も當分貴夫人に備へるうもない事を遺憾に思ひ常に「僕に話しかけた」「せめては谷孫六の貨殖全集でも讀んで實行してくれ」といふ、人ですが、暇を無理からしらへて下手な川柳ばかり、机にむかつて居るんですから「一ヶ月ばかりして、婦人世界に」「カレンダアと一枚の障がけ」といふ僕の句が漫書となつて出て居た、事をその妻君から知らされ「川柳でエものなかく興味があるものですね」でこで谷孫六も野錦浪と云ふ川柳家ですぜと教へてやると「エ、マアそれからは實にうつて變つた對待振リだつた。

### ようもてまつせ

高橋 かほる

川柳をするやうになりましてからおかけでわてみたいいなもんでも……あつちやからもこつちやからも「かほるさん、かほるさん」とようもてまつせ……。

### 大晦日のおちつき

竹内 櫻見 女

川柳は自由人のやむにやまれぬ衷心の叫び

松山 前田 五健  
平凡の祿大馬鹿になりされず

大阪 松丘 町二  
噓す朝霧厨に流れこんでた

同 松盛 琴人  
幸福のお膳は缺けてゐてもよし

同 水谷 鮎美  
君 雲を話す心になり給へ

同 増位 汀柳  
酒にとけ酒に 生るゝ哲學の

東京 前田 雀郎  
窓の子の何を見つめる秋の雨

大阪 道田 葉平  
赤き鼻緒や兒の下駄草履

信濃 中島 紫痴郎  
兎も角も生きる手段だ落ち付かふ

大阪 長崎 柳秀  
來る迄の酒は女將に酌せとき

高知 中澤 濁水  
嫁かせたく嫁かれば困る娘と暮し

別府 内藤 凡柳  
いちにちの疲れを守る蚊帳のいろ

神戸 西村 明珠  
母も妻も吾れより先に死にたがる  
横濱 中野 懷窓

負ける氣で立てばゆとりの出来る足  
大阪 西田 紳樂

東京 中村 山門  
ちつばけな慾ぢやないと月が澄み

鳥取 中島 鐵洲  
何の事やら政争の誇大文字

福島 大谷 五花村  
既に／＼督促狀が刷つてあり

東京 大野 琴莊  
水引の下に己を賣る心

大連 大島 濤明  
お勅語の日が父うさんと旗を出す

京都 大島 黄子朗  
サイレンにびつたり合つてゐた快感

大阪 大石 文久  
兄弟の同じ女を戀し夏

同 小田 夢路  
寂しさに酔ふ酒なれば酔ふもよし

同 近江 砂人  
いさかひの父のない子に父の顔

東京 岡本 嘘夢  
稼ぐ指飲む指同じ垢をため

大阪 小川 百雷  
否定したあとと空虚にはつとする  
この邊へ洋服箆置けばよし  
兵庫 住田 亂取  
何事も非常時といふ逃げ言葉

でもあらるか、柳人の熱と思ひ切つた表  
現とに日夜觸れてゐる丈けでも 何か知ら有  
難い氣がする。

× × ×  
「次は日本橋二丁目！二丁目であります  
！」車堂さんの聲に川柳雜誌からふと眼を離  
した時は三二年もいよ／＼終る大晦日の正  
午です。あはた／＼いよの流れる車の流れを窓  
外に見て改めて車内に眼を移して見たので  
す。蒼白く緊張した人々の顔が目白おしに並  
んで子供さへ笑顔を見せてゐては、呉れない  
やうでした。この時はじめて車内で本に讀み  
ふけてゐるのは自分だけだと知つたのです。

歸つてからさ／＼やか乍ら兄さんと二人のお  
正月の支度をしなければならぬ私でしたのに、  
大晦日の正午を、よくも斯ふしておちついて  
居られたものだと、川柳を有難く思ひました

### 淨りりの會費

永田里十九

十二月三日忘年支部聯合會が、日本橋俱  
樂部で開催されました。私も支部幹事として  
當日會場内をうろ／＼して居りました。舞臺  
の奥に樂屋として、六疊敷二間位の部屋があ  
ります。ふとその部屋で思ひ出しました。私  
が川柳をやる以前に淨りりを少々かちつて  
ゐました時に、この部屋で舞臺の出を待つて  
居た事がたび／＼ありました。その時には安  
くとも金七圓也は當日の會費として、納めね  
ばならなかつたのです。然し其晩は金參十錢  
也の會費で済むた譯です。つまり、六圓七十錢  
はとくした事になります。

大阪 關本雅幽

鶯釣つて来ては女房に邪魔がられ

同 須崎豆秋

秋風の中で乞食に拜まれる

神戸 相元紋太

うちの子ですと答へるも樂しかり

同 三條東洋鬼

月の出へ鼻筋たかき姉妹

大阪 鹽路吉丁

友情は働盛りにありがたし

名古屋 鈴木可香

藤椅子の二人へ元の虫の聲

京都 齋藤松窓

ものおもふ凡ゆる中に子を思ふ

東京 高木角戀坊

渡舟花屋は蝶を連れて乗り

横濱 田沼瀧の人

まんまるな春整髪の日の平和

東京 田中金一郎

本當の陽氣と風邪を引ひてゐる

東京 高須啞三味

朝寒の音立て啜る大根汁

長野 高峰柳兒

皆出世して居る賀狀へ座りかへ

青森 田澤有石

口笛を吹いて不平の裏をゆく

東京 塚越迷亭

友達も逢はねば僻むことばかり

同 武田玄六

何様の社か旅のお朔日

同 寺井紅太郎

灯を消して寝られぬさの過古未來

大阪 高橋かほる

はこずしはよんべの色の新世界

同 竹内機見女

時計とめて支配をされぬ夜を笑む

東京 高島玉兎朗

酒やめた父の寢巻を煖め鬼

同 海野夢一佛

秋一人正しき星座觀て倦かず

八幡 上野十七八

世渡りの一つとぼけた顔をする

大阪 楊井二南

洋妾の出そうな窓の光彩よ

同 吉田水車

しめられる手も知らずに餌を貰ふ

京都 山川紫明

二見からぬつと天照皇太神

舞鶴 安川久流美

貧しさの中へおもちやの獅子頭

大阪 山本雨迷

霧雨の灯にある娘夕刊賣る

### M署の優遇

廣江天痴人

こんな事は書くべきではないと思ひます  
が切角ですから——。〇〇年の五月頃、ある事件で「一寸来い」と  
やられて久しくM署の部長宿直室に逗留し  
た折或日私の方へ廻つて來た看守君「アナタ  
はなかなか文學の素養がありませう」とい  
ふ私の變な顔をにたりにたりと眺め乍ら「實  
はアナタの居室をさがしましたら短歌や川  
柳の本ばかりすうらりと出て來たには驚きま  
したよ」……「實は私も俳句をすこしばかり  
やつてをりますが精神が清らかになつて好  
いものですね」といふやうな事から一日文  
藝の話をやつたり、私の無聊を慰めてくれま  
した煙草をくれたり、ウナドンを取寄せてくれ  
たり意外の好遇でした。こんな事も「川柳を  
やつて得をした」話にはなるでしやうね。

### 先生のニツクネーム

村松夢裡

「今晚は—あら先生御久振り」ハハと納つ  
て居る處は南地某所友達三人と痛飲の果御  
定りの御清遊、彼れ顔を達したなりこないさ  
の内その他大勢と御定連が綺羅星の如く居  
列らぶ……「先生一つ頼みまつさ」なんとこ  
れは澤山の短冊、墨まですつてある僕を川柳  
の先生にしてしまつた話。

あけても替つても手を離さない、川柳雜誌「  
或日も携帶しておつた處偶然あんなこれな  
んだんの」とひつたくるなり見た彼歌や俳句  
五三頁へ續く

# 日本名所名物川柳

大阪の巻

麻生路郎選

大西長三郎書

木櫛は益々好評で既に道頓堀、大阪の  
夏祭、四天王寺、ダム、築港、新世界、開い  
てゐる。盛んに俳吟を投ぜられたい(箱)

## (七) 粟おこし

岩おこし 本家の分を別に買ひ  
非常時の菓子におこしをしときたい  
先生も生徒も提げた岩おこし  
律氣さを見せる手みやげ岩おこし  
岩おこし 道頓堀を派手に提げ  
やぐらおこし 包んでくれた日本髪  
結局は妻の言ふてた粟おこし  
粟おこし 慰問袋に角が出来  
赤帽の荷と別に持つ粟おこし  
粟おこし 信玄袋の底で割れ  
辛抱をします便りと粟おこし  
幸福な生活にとどく粟おこし  
大阪に住んで嫌ひな粟おこし  
金櫛を持つて夜店の粟おこし

曉童 一 閑生 新市街 美笑 某人 蝶之助 白蟻 萬樂 日華 雄二

岩おこし 屋驛の巾だけ並んでる明坊  
粟おこし 買ふに近所の指を折り 掉二  
御近所の義理をすませた粟おこし 彩泡  
粟おこし あまり故郷が近すぎて 白菊  
節分の霧を吸はせた粟おこし 春光  
網棚へ重みを見せた粟おこし 小松園  
金策と知らず喜ぶ粟おこし 柳笑  
大阪と知れる賣子の粟おこし 久郎  
大阪の埃も包む粟おこし 喜由  
バスケットふたがしまらぬ粟おこし 變人  
梅田行ばかり待つてる粟おこし 明珠  
岩おこし 財布は太い紐にあり 紅  
粟おこし 何所の生徒かみんな買ひ 春秋  
粟おこし 道を問はれて一つ賣れ 司郎  
先發は燕に乗つた粟おこし 鮎美



阿彌陀池

大阪の嫁がこゝろの粟おこし  
 たんまりと貯めて歸つた粟おこし  
 借りてきた金で歸郷の粟おこし  
 大阪をたたんだ話粟おこし  
 粟おこし入れるばかりに荷がでさる  
 大阪よさらば求めん粟おこし  
 大阪の横負だけの粟おこし  
 粟おこし序に拜むあみだ池  
 舞妓の前齒へかたい粟おこし  
 苦節十年粟おこしだけ提げてくる  
 電報が来て買ひにゆく粟おこし  
 地下鐵の世に賣れてゐる粟おこし  
 粟おこし見本の色がはげてゐる  
 粟おこし一粒づゝに阿彌陀さま  
 粟おこしもう大阪を見限る灯  
 粟おこし訛の遠ふ齒にかまれ  
 粟おこし小さい義理をつないどき  
 粟おこしこれは浪花の包み紙  
 子を生みに歸る女へ粟おこし  
 添はさしてやつて歸りの粟おこし  
 許るされて敷居をまたぐ粟おこし  
 スピード、スピード變らぬものに粟おこし

雅 幽  
 岩 石  
 同  
 淡々  
 同  
 蝶之助  
 正甫  
 黙平  
 柳次  
 友帆  
 觀月  
 春秋  
 水車  
 鮎美  
 山雨樓  
 蝶之助  
 日華  
 青踏  
 靖弘  
 變人  
 靖弘  
 亂耽



煙

大島濤明選

やるせなく女給煙を吐いてゐる  
 幸福は朝の煙を二階から  
 果敢なくも自由の空へ煙消え  
 ハンカチを振る手は汽車の煙が蔽ひ  
 繞け跡の白い煙もかなしまれ  
 紫の煙に思案湧いてくる  
 おゝ煙姉を都へ奪ふ汽車  
 吹殻の煙へ話まだつゞき  
 煙突の影も煙吐く壁の月  
 五合の飯たく煙二人きり  
 消火器に執念深い煙なり  
 煙淡く館山町は暮れてゆく  
 教養が出来て煙のない田舎  
 ふり返へる煙の下の大都會  
 夕焼に揃ふ平和の村の煙  
 土佐節をつくる煙の濱の派手  
 生活を階級づける煙立ち  
 新世帯妻は煙にむせてゐる  
 佛壇の煙淋しむ朝の冷る  
 ゴミ捨場疲れきつて煙立ち  
 彌陀の顔畑の中で慈悲に見ゆ  
 むくく〜と煙を吐いて護國艦  
 好啓兒 竹雅 祥月 喜由 九文 一 青 小 三 紅 青 誠 幸 幸 助  
 柳 夢 龍 一 世 義 良 春 幸 助  
 波 那 都 風 之 峰 一郎 助

煤煙の下をくぐつた辨當箱  
 エプロンの白さに煙る箕面村  
 横向いてバットの煙をふく女  
 父が吸ふ煙草の煙に子のむせて  
 山焼の煙も春の景色なり  
 争議團の庭へ煙がのびてくる  
 飯を焚く煙にむせてキャンピング  
 共稼ぎ畑い煙へむつまじく  
 煙草輪に吹ひコンミツション待。  
 持久戦工場愈々煙が出ず  
 煙の中にむせぶ念佛  
 細々と煙を揚げるキャンピング  
 瓦斯宣傳かまどの煙をくすなり  
 捨てられて吹殻従順な煙をあげ  
 薬屋根のはふの煙に粥が煮る  
 隣同志朝の煙が空で會ひ  
 煙吐く家を夜警が見つけ出し  
 遠火事の煙綺麗な渦を巻き  
 空想は煙が消えて横になり  
 斜陽に立つ大煙突の影太く  
 空腹へ旅の煙がうらめしい  
 天馬  
 馬 月 生 静 童 幸 兒 雨 柳 街 汀 光 秀 一 炭 秀 踏 山 助 馬

川柳家戸籍調 (續)

- (1) 姓名 (2) 雅號及別號 (3) 生年月日
- (4) 出生地 (5) 現住所 (6) 職業又は勤務先 (7) 好きな句 (8) 自信の句 (9) 川柳以外の趣味 (10) 配偶者及子供の有無 (11) 嫌ひなもの (12) 川柳に手に染めた年月

- (1) 寺井鐵郎 (2) 紅太郎 (3) 明治廿四年一月廿五日 (4) 東京市日本橋區濱町 (5) 東京市杉並區天沼一ノ二七二 (6) 會社員有隣生命保險 (7) 先輩後輩と云はず柳人に共鳴する句多し到底並べきれないので (8) 一日たつと得意の句が嫌になるのが小生の性分です従つて句集なぞ生のあがり限り出来そうもなし (9) 俳句 (但し本年七月より) 其他澤山 (10) 子なし (11) ぬるい湯 (12) 明治四十二年頃。

(3570) 高須啞三味

- (1) 高須清二戸籍名は鷹巢清治 (2) 啞三味 (青兒) (3) 明治廿七年二月三日 (4) 東京丸ノ内有樂町 (5) 東京市蒲田區女塚町一三〇 (6) 新聞記者 國民新聞社勤務 (7) (古句) 寝てゐても團扇の動く親心、物さして晝寝の蠅を追つてやり、抱いた子に叩かせて見る惚れた人 (8) 妻の髪今日一日の厨の香、妻と子の虚言が許せて笑ふ朝 (9) スポーツ、遊戯、遊ぶ事は何

煤煙の底に蠢めく三百萬  
 煙たさを睫毛に見せる二皮腫  
 ルンペンへ煙がしやくに朝  
 高き家に登り大阪煙の中  
 社長今日葉巻をふかす客があり  
 みはら山極樂へゆく煙が立ち  
 土踏めばかまどの煙走る影  
 一と筋の煙へ無事な日がつぎ  
 草を焼く煙夕べの奈良盆地  
 消えて行く煙の行方身の行方  
 大阪の煙へ弟鉢を捨て  
 勝手からけむい煙と母の咳  
 青い空へ火葬場の煙が立ち

菊路  
 葉光  
 小松  
 寒草  
 子鬼  
 朴甫  
 新水  
 八歩  
 紫玉  
 喜郎  
 三汀  
 たけを

命 令

水車選

謹直を煙むたがられて獨りなり  
 五 容 出で行つた船の煙へ立ちつくし  
 評、都々逸の着想だが下五よろし  
 言ひ負けた顔を煙草の煙がまく  
 評、哀しい皮肉。 明 珠  
 ストライキ煙が威嚇して朝 青 兒  
 評、主観の表現に成功してゐる。  
 煙まであせる氣持ちへゆれてゐる。 あや美  
 評、焦燥と靜態との對照よし。  
 細ぼその煙の中へ猫の産 正 甫  
 評、滑稽味を帯びた、裏長屋の描寫である  
 人 位  
 どこへゆくつもりか煙窓を出る 小 樓  
 評、煙を偽人的に扱つて、一抹の淋しさと  
 同情とな表はしてゐる手腕は鮮か  
 ある。

地 位  
 粥をたく煙の青き身に泌みる 貧 兒  
 評、どん底生活か、看病の家か、何れにし  
 ても豊かならざる寒し主となつた  
 寂寞の感である。  
 天 位  
 ひそやかに煙は人の世を 遁れ 青 兒  
 評、いつ消えたともなく消ゆる煙の恣態  
 を「ひそやかに」と巧みな表現法が嬉  
 しい、着想亦佳。

西村 明珠 共選

命令に日本男子の笑みがあり 小樓

でも(10)妻、二男、二女あり(11)納豆、海鼠、蜘蛛、不規則(12)大正六年。

(3021) 觀田 鶴太郎

(1)觀田長松(2)鶴太郎(3)明治廿五年六月一日(4)石川縣金石町(5)神戸市灘區備後町五丁目一五(6)帝國火災保險會社大阪支店(7)特にこゝへ書くだけの好きな句といはれますと、どれをいつていゝか迷ひます。澤山あるやうで澤山ないやうです(8)これも自分としては澤山あるやうな氣がするのですが、さてといふとお恥かしいことになります。どうぞ御ゆるしを乞ふ(9)短歌、讀書(10)一男四女(11)蛇、漬物、氣取る人(12)明治四十二、三年頃。

(3022) 岩崎 蟬古

(1)岩崎(2)蟬古(3)昭和四十一年六月十八日(4)岡山縣(5)大阪府吹田町都呂須(6)日本電力株式會社(7)夕の膳勤めの不足きかすまじ(番傘二一二一ノ八)(8)ことさらに母へおどけて夜寂し(9)第一、第四、第八藝術及スポーツ(10)無(11)多過ぎて困居候(12)約六年前。

(3023) 北川 あや美

(1)村橋彌之輔(2)北川あや美(3)明治三十五年十月十五日(4)城で名高い尾張の名古屋市(5)大阪市東區内久寶寺町三丁目五十次特許事務所(6)特許事務及製圖(7)秋さらり銀のふすまの思ひ、

命令を聞く身に土の香がしみる  
 兵児帯を締ても閣下命令調  
 命令の通り動いた靴の音  
 命令へ犬冗談と言つた顔  
 命令へお辭儀して出て肩寒し  
 突然の轉任命を俯に落ちし  
 命令を無事にはたして陽を拜み  
 動員に兄が征く日の空が晴れ  
 命令をすまに受けて地位を上げ  
 野心満々命令を大事がかり  
 命令へバツト半分捨てゝ行き  
 命令へサラリーマンはおどする  
 ひつけを忘れた頃に子が歸る  
 命令に面白からぬ使する  
 命令に聲までちめたくとがる  
 ハイハイと聞く命令惹なし  
 命令のどこか故郷のアクセント  
 西東捜査本部を出る刑事  
 榮轉の内命記者を煙にまき  
 命令に動いて社員ひまが  
 土砂降りへ主への命の靴をはき  
 命令の範圍で話まともらす  
 命令へかなしく爪をみつめたり  
 命令を果さぬ前に戀に落ち  
 命令を仕終へた風呂の加減なり  
 命令の夜を淋しく銅羅が鳴り  
 命令は殿たりフツト故郷のこと  
 命令の父の私服がよく似合ひ  
 命令をする妻の手のしやばん泡

九文錢 愚童 春水 曉童 某人 世都象 祥月 沐天 一木 貴代志 貧兒 四葉 秃山 富美三 ライト 詩郎 團子 利生 朱郎 丁坊 朝雨 曉童 寒草 柳志 新市街 三汀 霞川 春光

命令は無理を通してそれでよし  
 命令へおじおじとして女事務  
 命令の灯にゲートルを巻きやる  
 命令にあくなき生活のかけ茶碗  
 命令がリレーのやうに渡つて来  
 命令の通りロボット踊るなり  
 命令を受けて相談に來た男  
 命令は明るい街をさけるなり

住 吟

そゝくさと朝の時計にしほひぬ  
 俄えろと言はぬ解雇命令  
 命令の通らぬ我を顧みる  
 命令に動く人馬の白い息  
 命令に朝から風が吹いてゐる  
 命令とほり動いて呉の足らず  
 命令を出して寂しき司令官  
 (軸)命令の通りをやつて誠まこと  
 運後感、軍隊を詠つた句が大生おほなまでした  
 れもおちいるべき類想の内小樓氏紅氏  
 が成功し、親の命令はいひつけとしてみる  
 べきで四葉氏のをいたゞいた、佳吟中春秋  
 喜由兩氏はいつもながら達者(水車)

◇ 明珠選

命令を出して寂しき司令官 紅  
 外國で遊んで来いといふ社命 三都  
 命令を守る級長憎くまれる 千雨  
 いひつけを忘れた頃に子が歸る 四葉  
 命令の胸を張るだけ張つてゐる 青兒  
 命令を聞いて素直に帯をしめ 南隅人

路郎。どうおしやすへ丸山の影籠、琴人  
 靈魂を論ずるほどに淋しくて、翠夢。御  
 覽遊はせ金魚死んでよ、れいこ。うぬば  
 れりや惚れた女は横をむき、みつる。(8)  
 (8) 自信の句はこれから作りまします今日ま  
 での白句で好きな句は澤山ありますがそ  
 の内で次の句が一番好きです。幻に戀人  
 があり夕ざくら(9) 寫眞、マツチ聯續レ  
 ツテル蒐集、其他にも浅い趣味を山ほど  
 持つてる男です(10)未だ獨身(11)氣分に  
 そぐわないもの(12)昭和六年二月。

社章 交 附

本社主幹、同人並に支部幹事諸君に左  
 の番號の社章をお渡し致しました。(不題)  
 路郎(1) 綠雨(2) 水車(3) 山雨樓 4、新水  
 (5) 雅幽(6) 山月(7) 没食子(8) 秃山(9)  
 夢裡(10) 萬よし(11) 豆秋(12) 亂耽(13) 白峰  
 (14) 鮎美(15) 丹路(16) 翠夢(17) 紀太(18) み  
 つる(19) 鶴峰(20) 紳樂(21) 二南(22) 英賀天  
 (23) 柳人(24) 濁水(25) いさむ(26) 四葉(27)  
 町二里社(28) 綠之助(29) 閑生(30) 司郎(31)  
 紅(32) 華水(33) 明珠(34) 春秋(35) 竹楓(36)  
 錦石(37) 春光(38) 喜由(39) 青兒(40) 一杉  
 (41) 夏曉(42) (以上洋服用)  
 かほる(51) 機見女(52) 葭乃(53) 里十九(54)  
 螢ヶ池(55) 戀人(56) 小柳子(57) 禪風(58) 夕

命令のどこか故郷のアクセント 詩郎  
 命令へお辭儀して出て肩寒し 某人  
 餓えろとは云はぬ解雇命令 喜由  
 命令に服従パンにはかえられず 吉左右  
 退命の肩に淋しく落葉する 白扇  
 命令は無理を通してそれでよし 紫陽  
 命令の軍刀白く月白し 錦石  
 命令を受け相談に來た男 新水  
 命令を側で聞いてるタイピスト 霞川  
 命令は嚴たりフツト故郷のこと 三汀  
 命令へハット半分捨てゝ行き たいけを  
 そゝくさと朝の時計にしたが 機見女

命令を無事にはたして陽を拜み 祥月  
 命令とほり動いて吳の足らず 末廣  
 命令を待ちくたびれてかたく 章泉  
 命令へ其純情を亂そまい 竹雅  
 命令を果した顔で戻つて來 小樓  
 そんな命令ーわたし女よ 貧見  
 命令の眼鏡さらりと光るなり 曉  
 兩親の言葉にそむき雨に會ひ 一羊  
 命令に釘はみんな付いてゐる 春水  
 命令に慣れて兵舎の朝のうた 春秋  
 命令を托す足もとあやぶまれ 錦城子

## 本社新春句會

お芽出度う御座います。  
 なごやかな初句會を催したいと思ひますから、川柳家はもとより  
 川柳を始め作つてみやうと思ふ方々も誘合せて御出席下さるや  
 うお待ち致します。

日時 昭和九年一月六日夜(六時半)

會場 日本橋俱樂部 (大阪市南区日本橋一丁目)

兼題 「十日戎」三句

兼費 金三十錢 (鉛筆持參) (寫眞攝影)

呈 茶菓、大阪都市計畫地域圖

(幹事) 没食子 山月 八步 夢裡  
 あや美 柳次 春光 機見女

本社京阪神支部聯合句會に寄贈を  
 仰ぎました方々の御芳名を掲げこゝ  
 に厚くお禮申し上げます(幹事一同)

鐘59)紫石(60)曉童(61)民郎(62)左馬  
 (63)友帆(64)天痴人(65)あや美(66)最修  
 (67)八步(68)柳次(69)幸捐(70)(以上和服用)

▼麻生路郎氏累卵の遊び六册 ▼庄萬よし氏  
 金盃一個、すきなべ一個、軸物三卷 ▼橋本  
 綠雨氏盃一組、灰皿十二個 ▼村松夢裡氏本  
 立三個、お茶器十個 ▼朝田新水氏川柳漫畫  
 入湯吞七個、▼永田里十九氏電氣スタンド  
 三個 ▼市場没食子氏サロミン百三十個、石  
 鹼半打入二箇 ▼高橋かほる氏靴下六足 ▼西  
 田紳樂氏クリム五十個 ▼天王寺支部菓子  
 鉢一個、盆一個、アルパム一册 ▼今里支部  
 ホマード三個 ▼萩の茶屋支部川柳茶十袋、  
 状差五個 ▼梅田支部書拔短冊 ▼鶴町支部風  
 呂數十枚 ▼御旅支部石鹼三打、中形石鹼百  
 二十個 ▼京都支部玩具五組 ▼神戸支部狀  
 差一個 鏡一個、臺十能一個、炭取一個、ゴ  
 ムマリ一個、雨傘一本、玩具一個 ▼九三會  
 昭和九年日記帳三册 ▼塗青支部花瓶一個、  
 銀ホーク一箱、句帳一册 ▼玉造支部封筒十册  
 便箋五册、靴下一打

京阪神 支部聯合 忘年句會

十二月三日夜 於日本橋俱樂部

一九三三年を送くる合奏曲と 見るべき忘年句會は恒例により型破りの興趣と、百二十名の參會者として大變な盛會であつた。

鮎美氏の颯爽たる司會の下に、同人二南氏の新鮮な川柳漫談、路郎師の有益なる御講話等に引きついて、晝のラゲビー試合の疲れも見せず京都から馳せ參じた司郎師や圓滿そのもの、如き温顔を久し振りに見せられた神戸の明珠氏……等々がつきつに選者としての壇上に立たれ、賞品が配られ、拍手が溢れ和やかな忘年氣分で句會は進行し最後に路郎師の名所物川柳「粟おこし」を披露あり、柳人としての喜びをたんのうして十一時過ぎ閉會。あとで路郎師、遠來の琴莊氏を中心に同人三十餘名が記念撮影をした。なほ本夜御寄贈品を下さつた各支部並に有志の方々へ厚くお禮を申し上げます。

(豆萩記)

出席者 柳笑、靖弘、美奈部、三日月、紫石、氷炭、曠原、破鼓、秋光、果村

夏光、白戀、秋無草、正甫、天馬、寒木、繁堂、角丸、吉左右、丹生のぶ、昇鯉、一笑、谷泉、一杯、裸人、雨少、鶴郎、蘭水、淡々、詩郎、蝶之助、朱郎、はるを千代子、沐天、末廣、方眠、耕之介、翠峯、默平、申仙、白嶺、文義、日華、掉二、泊童、萬樂、岩石、鳴玉、交流子、鐘史、藤太郎、友帆、遊步、龍之介、まさる、卜居、白菊、好子、白蛾、仰天、開路、彩泡、呂花、佳峰、雞牛子、多郎、文蝶、みつる、某人、雀踊子、山抱子、小松園、白柳子、銀波、久郎、清美、いさむ、青踏、琴莊

(本社同人)

路郎、絲雨、夕鐘、鶴峰、新水、水車、豆秋、夢裡、變人、禿山、八步、翠夢、春光、喜由、青兒、司郎、四葉、機見女、華水、幸捐、小柳子、雅幽、艸樂、明珠、鮎美、柳次、紅、二南、かほる、紀太、没食子、丹路、山雨樓、亂耽、里十九、兼匳、共稼き、絲雨、選

共稼ぎ結婚解消しそうなり  
銀行の破産にあつた共稼ぎ  
共稼ぎ茶漬で晝をますなり  
共稼ぎ暗い露路へ戻つて來  
アパートを仲好く出て、共稼ぎ  
荒つばい言葉もうれし、共稼ぎ  
共稼ぎ夫に休む用が出来  
共稼ぎ男が先きに歸つて來  
柔道を少し覺えた共稼ぎ  
共稼ぎカーバの鐵もそのまんま  
共稼ぎ今日も天ぶら買ひにゆき  
共稼ぎ今も天ぶら買ひにゆき  
共稼ぎ又頼母子がながれ込み  
共稼ぎあしたの星は白かりき  
共稼ぎ何か不安な朝を出る  
共稼ぎ洗濯物が氣にかゝり  
子を貰ふこともめてる共稼ぎ  
共稼ぎ座敷位は掃いてやる  
中風の父を残して共稼ぎ  
共稼ぎ寒になるを知つてある  
共稼ぎ芝居見にゆく日となし  
内縁のまゝでつゞける共稼ぎ  
親類とつき合しない共稼ぎ  
(十秀)共稼ぎ今日は揃つて歸つて來  
(同)朗らかに朝を出て行く共稼ぎ  
(同)荒みゆく氣持を知つた共稼ぎ  
(同)共稼ぎ歸れば電氣消えてある  
(同)共稼ぎ故郷へ意地がある  
(同)共稼ぎ言葉すくなく朝を出る  
(同)共稼ぎ朝の茶碗は伏せたまま  
(同)算盤へにつこり笑ふ共稼

角丸、蘭水、泊童、末廣、昇鯉、岩石、遊步、白菊、幸捐、文蝶、鳴玉、友帆、方眠、葉平、みつる、機見女、裸人、里十九、司郎、亂耽、雅幽、山雨樓、泊童、みつる、鶴郎、文義、柳笑、白柳子、紅

(同)共稼ぎが思ひ出とる暮し向き  
 (同)改札を出て共稼ぎ他人めき  
 (五客)電燈の影にうごいた共稼ぎ  
 (同)共稼ぎだとは見えぬ酒を  
 (同)共稼ぎ口の戸が閉りかね  
 (同)共稼ぎスケツチにして見る  
 (同)白粉ののびの悪さも共稼ぎ  
 (人)共稼ぎ女房が目にしみる  
 (地)お隣りに親しみにくい共稼ぎ  
 (天)共稼ぎ口のきける金が出来る  
 兼座 氏神 山雨樓 暹  
 氏神へ日参りをして株を張り  
 氏神へ来た母親の動く口  
 氏神で昔の生活聞かされる  
 氏神の隣りに住んで朝早し  
 氏神のこゝから子供歩るかせる  
 氏神へ二人の顔は眞面目なり  
 秋祭 氏神様に煙が立ち  
 寒行は氏神までときめるなり  
 志を立て、氏神様に啼くふくろ  
 杭を打つ音氏神にまで聞こへ  
 幼稚園今日氏神で遊ばさる  
 氏神のことで村から無心状  
 氏神の寄進我が名の小さすぎ  
 田を賣つたこと氏神の庭でき、  
 氏神へ青年團の氣が揃ひ  
 氏神の門で漢かむ七五三  
 氏神へ脱帽だけで氣がとがめ  
 腕白時代を知つてる氏神の壁  
 氏神の鳥居に残る親爺の代  
 (十秀)しなの日の氏神へ湯を献じ

夕鐘 二南 白菊 觀月 氷炭 四葉 夕鐘 呂花 機見女 夕鐘 豆秋 幸捐 鐵史 久耶 雀踊子 白蛾 青兒 白戀 葉平 小柳水 蘭水 岩石 沐天 某人 夢裡 華水 二南 紀太 同 朱耶

(同)神殿で遊ぶ一人は父無し子  
 (同)氏神へ申わけない歸郷する  
 (同)氏神の廣き大砲天を向き  
 (同)氏神へ渡満の兵士唄で来る  
 (同)氏神の近くに住んで淋しがり  
 (同)氏神と背中合せにある案山子  
 (同)眞人間になつて氏神様に來る  
 (同)氏神のこれから先は行き止り  
 (同)あまり晴れて氏神小さく見え  
 (五客)氏神へ不幸續きの顔を見せ  
 (同)氏神の松に初着の袖がすれ  
 (同)氏神の寄附へ隣の人が來る  
 (同)氏神のお札を貼つたまゝ空家  
 (同)大阪の氏神すりのある所  
 (人)氏神へ母も一緒に紙の旗  
 (地)待ち呆けて月の出宮と知り  
 (天)氏神へ少年野球は勝つて來る  
 席座 金庫 新水 選

新妻は手提金庫の鍵を秘め  
 金庫は持つぱりに寄附殖え  
 震災に死線を越えた金庫なり  
 金庫から金庫へ父のひげがのび  
 問題は金庫の上のほこりなり  
 金庫へ廻轉椅子が廻るなり  
 大金庫背にして給仕寒むく立ち  
 金庫へ至んだ顔が映つてゐ  
 人間が小さく見える金庫なり  
 見榮ばかり張つて金庫にもなし  
 (十秀)さもしくも瞳金庫に  
 (同)金庫には觸れず銀行員で食ひ  
 (同)整頓の机金庫に近くゐる

岩石 蝶之助 文蝶 寒木 鳴玉 没食子 明珠 新水 四葉 萬樂 裸人 水車 雞牛子 萬樂 秋無草 豆秋 耕之介 一杯 天馬 白菊 鶴峰 豆秋 吉左右 氷炭 小柳子 没食子 華水 萬樂

(同)順境に馴れて金庫の位置をへ  
 (同)金庫からうやうやしくも模造品  
 (同)三人の鍵が揃つて金庫開き  
 (同)支拂日金庫の音はよろこばれ  
 (同)この金庫百萬圓の資本なり  
 (同)ともまば舞臺の金庫破れてゐ  
 (同)吳々も注意金庫の鍵を持つ  
 (五客)我儘に育ち金庫をまかす  
 (同)會計の手提金庫の派手な音  
 (同)御機嫌はなまめ金庫に音させ  
 (同)金屏風今日は金庫を邪魔に  
 (同)後妻ふと金庫を恐いに見る  
 (人)嘘でないこゝ金庫の前で言ひ  
 (地)金庫へマダムのみ淋しすぎ  
 (天)人情を知らぬ金庫の冷たかり  
 (軸)不渡りに金庫の鍵の手が重し  
 席座 愛 翠 夢 選

父性愛荒い言葉の中に知る  
 すき鍋が戀愛論へ煮へつまり  
 愛し得ぬ今やみ雜誌へ寄せてくる  
 愛の名で今日も争ふ宗教家  
 断ち切れぬ愛今日も酒にする  
 愛してはゐないつもりの冷えた酒  
 愛し切つてる類の魚 悴  
 同性の愛に死ぬとか死なぬとか  
 結婚となれば愛情考へる  
 愛しても愛しきれない夜を別れ  
 愛情へ不具の子すれてゆくばかり  
 子に愛は無けれど女給可愛がり  
 愛人と同じ訛りをなつかし  
 容れられぬ愛は行李を片づける

愛は淋しく連れ子の額  
 愛して居る人はあまへてくれぬなり  
 愛されて居る帯止めが氣にかゝり  
 愛の表現に男が吃るなり  
 姉さんの自信愛する人へ編み  
 兄弟の愛は下駄まで貸してやり  
 さしあげるだけかせめても父の愛  
 銀狐愛のしるしになりませぬ  
 愛しえぬ人こそスモスの風立ち  
 愛犬にばかり旦那はかゝりきり  
 母親の愛へよく泣く子が出来る  
 その愛に恵まれずして逝きしなり  
 愛もなく回轉燒きを賣つてゐる  
 愛であつてアルバムを一しよに見  
 此の愛の此のき穢めるとも見へず  
 愛を信じて妻が出すへそ繰り  
 愛情のこもつた肌につとおびへ  
 眞劍の愛の瞳に怖氣つき  
 心境は愛を放れてコツプ酒  
 親の愛子供に氣がつかず  
 愛着をおぼえてからのコンパクト  
 愛すればこそは男のすうくし  
 愛の前五尺の身體曲げにけり  
 その愛も金のとりことなつてゐる  
 失策を引受け兄辭ふてゐる  
 愛すと言へば見せて笑む人よ  
 (十秀)隣人を愛する程の餘裕なし  
 (同)愛情が理論化して賣つてゐる  
 (同)愛し得ぬ惱み益小ますぎ  
 (同)母性愛陰の身分がかなしまれ  
 (同)愛と云ふこそはゆい年になり

紅鶴 變人 雨少 文蝶 裸木 豆秋 吉左右 新水 明珠 里十九 春秋 日華 しのぶ 岩石 山抱子 角丸 喜由 紫石 多耶 蝶之助 葉平 被鼓 久郎 文蝶 掉二

(同)強き愛路一筋の夜を急ぎ  
 (同)愛し得ぬ惱を車夫の子が抱き  
 (同)愛されていつそ美しい女氣の  
 (同)愛情の如何をとほす情婦来る  
 (同)紺がすり着て啼たい人にされ  
 (五客)妻の愛子の愛背廣焼もつて  
 (同)愛の芽チヨキンと切つ人事課長  
 (同)愛情は足袋になりなご言ふ  
 (同)母一人乏しい愛の日向ぼこ  
 (同)愛人を喜ばし愛の不足税  
 (人)死んでもくと言ふ熱い唇  
 (地)愛と云ふ字へ眞劍な紺がすり  
 (天)君の愛宇宙は二人のなるぞ  
 席題 紋付 明珠

八歩 寒木 水車 新水 雅幽 白戀 春光 新水 山雨樓 多耶 青踏 裸人 千代子 掉二 新水 正甫 丹路 舟蝶 淡々 萬樂 蘭水 四葉 詩郎 白蛾 寒木 小柳子 蝶之助

紋付を着てもやつぱり國訛り  
 父が今脱いた紋付俺が着る  
 紋付の中に盃飛ぶ日なり  
 紋付の父は一層ひよる長し  
 紋付の母は小さな鬚を結び  
 紋付はたたまずかけてある三日  
 未亡人紋付で老母の手がふる  
 紋付を着せる老母の手がふる  
 紋付で百人一首負けつゝけ  
 紋付を着て舌がもつれてぬ  
 調下げて紋付酔ふて歸るなり  
 紋付で一人來てゐる空き事務所  
 紋付が似合ふタイプで養子なり  
 紋付を犬のひとみに見つめられ  
 紋付で鉛筆の要る用が出来  
 脱いだり着たり母の一ツ紋  
 借りて來た紋付も居る除隊兵  
 紋付を着て愛犬を遠ざける  
 紋付で來て叔父さんの咳ばらひ  
 (十秀)紋付の紋の白さが頼母し  
 (同)紋付へパスも電車もんでゐる  
 (同)紋付も出來て故郷の土を踏み  
 (同)紋付で出る日の露次が狭まる  
 (同)紋付の紋が寂しい借衣装  
 (同)紋付は無くともくお正月  
 (同)廻らればなほ紋付酔ふてゐる  
 (同)うるさそうに紋付きを着る  
 (同)紋付で訪へば勝氣な孝女なり  
 (同)紋付に我家は寒いところなり  
 (五客)大阪に住み紋付が買へず  
 (同)紋付で座りごこない我家なり

遊歩 交流子 山抱子 方眠 雀踊子 銀波 華水 岩石 しのぶ 艸樂 没食子 秋無草 栗 雨少 白柳子 紅車 水車 鐵史 吉左右 交流子 千代子 岩石 蝶之助 秋光 紀太 春秋 里十九 結美 雅幽 幸捐 蝶之助

(同)紋付の全々暮れて歸つて來  
 (同)紋付を着ても手拭つかむ癖  
 (同)紋付は嬉しい電話借りに行き  
 (人)紋付をたぐれば芝居きて來る  
 (地)紋付で酔へな會と知つており  
 (天)紋付で來た新妻をかこむ也

席題 サービス 司 耶

サービスの上手になつた朝を出る  
 サービスの疲れの多くコンバクト  
 サービスに下駄を揃へる係ある  
 サービスはごこかで會つた顔する  
 サービスへ個性を捨てた影を踏み  
 サービスの女へ犬が吠へて宵  
 サービスに社長と見世辭があり  
 サービスと別に悲しい話する  
 食ふためのサービスの哀れなり  
 サービスに甘えて眼鏡拭いてある  
 興奮をさせてサービス座を外し  
 詰襟を着てサービスに氣兼ねる  
 お馴染み來るとサービス立ち上り  
 おかしさをサービスガール我慢する  
 サービスの一つ灰皿片寄せる  
 思ひ出さずサービス振りとなげり  
 ニンマリと笑ふサービスまでよし  
 サービスは嘘にも泣いてくれるなり  
 サービスの動きの取眼と出合ひ  
 サービスの冷たい蒲團へ戻つて來  
 (十秀)サービスは財布を覗きする  
 (同)サービスと思へど心暗うして  
 (同)心と心觸れてサービス  
 (同)サービスへ真心からの聲になり

春秋 默平 二南 靖弘 白蛾 縁雨 白菊 小松園 山抱子 雀踊子 岩石 白嶺 蝶之助 鐵史 みる 耕之介 雨少 柳笑 春秋 紅鐘 夕車 水代子 千代子 八歩 艸樂 萬葉 四光 夏光 白菊

(同)サービスに御飯が詰も知らず  
 (同)サービスへ食はんがのど佛  
 (同)サービスのタオルへ髭が伸び  
 (同)サービスのマツチ冷たいつて  
 (同)サービスの古い銀髪にけり  
 (同)サービスの古の歳を聞きたり  
 (五客)追忍きての地聲となつて  
 (同)サービスの地聲となつて  
 (同)まだ宵にサービスを淋しかり  
 (同)サービスのマツチ野心の顔  
 (同)サービスへ勝氣な女吃るなり  
 (人)けつ眞似もサービス上手なり  
 (地)學歴のあるサービスはげゆく  
 (天)サービスの聲は吹雪消され  
 (軸)抱き子にサービスは馴れたもの

席題 福引 變人

變人 白菊 柳次 水車 新水 新水 方眠 翠峯 新水 二南 同 明珠 明耶 久耶 變人 司耶 泊童 秋無草 耕之介 掉二 文義 幸捐 文蝶 豆秋 久耶 正甫 喜由 喜つる 粘美 かほる 山雨樓

福引を引けばデパート出るつもり  
 (十秀)福引を引か引いた譯でなし  
 (同)福引を當てて内婦のよく太り  
 (同)福引へ來て厄年の手が迷ひ  
 (同)福引のダンスは街の方を向き  
 (同)當りきにない賞品眼に付いて  
 (同)一等を當てて母親呼びにくる  
 (同)福引を笑ひながらにきりて來る  
 (同)福引が母のない子に當るなり  
 (同)福引が居て福引の運強し  
 (同)園はれて居て福引の運強し  
 (同)福引の等外ばかり噓出る  
 (五客)福引へ無口一座をアツと  
 (同)福引の幕を使ふ大晦日  
 (同)福引に隣のよくを聞いてある  
 (同)福引の女へ聲を振り上げる  
 (同)一等はまだ残つてゐる錢を引き  
 (人)福引の男笑つて戻つて來  
 (地)福引へ不平を言ふ連れがあり  
 (天)一等の顔に福引してくれる

福引を引けばデパート出るつもり  
 (十秀)福引を引か引いた譯でなし  
 (同)福引を當てて内婦のよく太り  
 (同)福引へ來て厄年の手が迷ひ  
 (同)福引のダンスは街の方を向き  
 (同)當りきにない賞品眼に付いて  
 (同)一等を當てて母親呼びにくる  
 (同)福引を笑ひながらにきりて來る  
 (同)福引が母のない子に當るなり  
 (同)福引が居て福引の運強し  
 (同)園はれて居て福引の運強し  
 (同)福引の等外ばかり噓出る  
 (五客)福引へ無口一座をアツと  
 (同)福引の幕を使ふ大晦日  
 (同)福引に隣のよくを聞いてある  
 (同)福引の女へ聲を振り上げる  
 (同)一等はまだ残つてゐる錢を引き  
 (人)福引の男笑つて戻つて來  
 (地)福引へ不平を言ふ連れがあり  
 (天)一等の顔に福引してくれる

鳴玉 交流子 岩石 淡々 豆秋 里十九 雅幽 綠雨 山雨樓 新水 同 朱耶 是るを 銀波 久耶 萬樂 末廣 二南 明珠

新居濱創立句會  
 支部  
 同時 正月六日(土)午後六時  
 會場 新居濱町西町蛭子屋旅館  
 會費 不要  
 兼題 「闘士」 五句  
 「日本刀」 五句  
 愛媛縣新居濱町西町  
 幹事 越智虹子

選ばれた言葉

福田山雨樓

この月の題は「長男」であるが、寄せられた句の中には動く句、即ち詠まれてある句の中には長男とあつても、それが次男でも三男でも甚だしいのは、學生でも友人でも當て嵌る句が尠くなかつた。この弊は課題吟の場合に往々陥り易い作句上の弊であるから、必ず出来た句を再考三思して、見ることが肝要である。つまり題詠には題を最もよく生かす用意と工夫を忘れてはならない。

大學を出た長男に職がなく 二 郎  
長男の戀に無言の夕餉です 輝 親  
刑事課から電話がかかる御長男 たけ坊  
三食も無事長男の ナツバ服 清 雄  
長男の思案に餘る十二月 小 松

是等の句の長男とあるところを、試みに次男又は三男と直して見ても句意に格別の變動を來さないではないか。次に

兄の氣も知らずに姉妹ダンス好き 夢 月  
音頭とる兄へ可愛い靴が 鳴り 白 戀  
の二句は「兄」と云ふ題には嵌つてゐるが「長男」の題には副つてゐない。これは題から離

れたことになる。尤も題詠と云つても必ずその題の文字を詠み込まねばならぬ、と云ふわけはないので、殊に關東あたりでは題の文字が詠み込まれてゐない句に寧ろ佳句が多いやうである。

弟の榮譽へ輝く兄の 歟 木 石  
この句など長男と云ふ文字はないが、長男の句として肯ける。しかし「榮譽へ輝く」は説明的な言葉で面白くない。その上中七が八音字になつて調子が悪い。「弟は博士でゐます兄の歟」と云ふ風に努めて句の具象化を圖る様留意されたい。

長男は八人目で出来るなり 眞砂坊  
この句に至つて題意は濃厚に出て來た。けれども叙法に無駄があり、句意は面白さうだがその事柄に妥當性が欠けるやうである。以前阪井久良先生の選で(題は子供)「七人が七人ながら女の子」と云ふのがあつたが斯う云ふ叙法を選びたい。

川柳が叙事詩の一面を代表し、そこに特異な川柳情調を表はすことは結構であるが、そ

の着想が常に非凡を 目指してゐなくては拔かれない。

長男と長女の戀を持て餘し 丁 路  
平凡な長男 生れた三代目 曠 原  
長男世襲制度になやまされ 天 馬  
是等の句は世の中に よくあり勝ちな事象

を捕えてゐるだけに、句想そのともが平凡を免れない。そして特に選まれた言葉と云ふ苦心が認められない。思ひ付いた其儘を平叙してゐるに過ぎぬ。それかと云つて妙に言葉を歪めたり、これまはしたり、誇張したり、偽つたりすることは禁物であるが、出来た句を幾度も讀出して、より優れた表現へ志す用意を望んで止まない。

長男のみやげに繪本買ふてやり 柳 夢  
句主の謙讓な態度と、作句的熱心さには敬意を拂ふものであるが、川柳味の把握について今一段の努力を望みたい。つまりよりよき川柳味をつかむことに意を用ひられたいと思ふ。○一人子へ土産の劍が嵩ばつて

寝こまれて長男が焚く三度飯 數 男  
寝こんだのは妻であらうが、これでは事實の儘である。素材その儘である。下五は拙い。

○長男に飯を焚かして五男生み  
主観がはつきり表はれた句には、自ら句主の情熱が感ぜられて心から共鳴を覚えるも

のであるが、主観の句はやゝもすれば小主観に了る場合があるから心すべきである。

凍てついた辨當私は長男です 伶人  
長男に生れた覺悟もつて居る 詩の武

強ひられる歎ふやつぱり長男だ 愚堂  
是等の句の主観は敢て小主観と云ふほどではないが、今少しもの足りないところがあるつまり主観が獨り合點に傾いてゐるのである。

伶人君のは弟妹の多いそして貧しい家庭の長男のみぢめさを詠つたのであらうが、今一息だ。

詩の武君のは長男として家業を嗣ぐ意思をほのめかしたものであらうが、あまりに抽象的である爲めピンと來ない。「長男として豆腐屋をつぐと決め」なごゝしたらごうか。

愚堂君のは「強ひられる歎ふ」で強い主観味が出てゐるし「やつぱり長男だ」で詠嘆とあきらめが窺はれ先づ無難である。

長男と云ふ詰襟の止むを得ず 蛙堂  
夢もみずなりて長男士に老ひ 綾紅  
長男にすべてをまかせ父となり 紫陽  
長男は黙し弟よくしやべり 五郎  
この四句は何れも整つてゐるが、何かしら上迂りした感がある。もう一步突つ込んで句の

焦點をきはめ、其處を効果的に表現する苦心を望みたい。

蛙堂君のは弟が澤山あつて思ふ程勉學も出來ず中學を出るや出すで詰襟を着て職業についてゐる長男の姿と見られるが、「止むを得ず」と軽く片付けたのが惜しい。

○長男と云ふ詰襟で稼がされ

綾紅君のは長男として、土の生活になり切つた佻びしい姿を描いてゐるが、下五の「土に老ひ」が言ひ過ぎてゐる。「耕しぬ」とか「土に生き」とかにするところ。

紫陽君のは隱居した父の氣安さと、長男の重荷とが表はされてゐるが、どちらかと云へば父本位の句となつてゐる。

○みんな委された長男父と酔ひ

五郎君のは長男が思春期に入つた姿が、弟の無邪氣さと對照して表はされてゐるが、何だか概念的な見方が眼につく。これを事件的に扱つて○長男の無口へ弟勝つて來ると云ふ風にしたい。尙参考迄に兄弟を言ひ表はした名句を一つ紹介する。

○母の氣持をしんみりと弟言ひ

長男を主義者に出して狭い所 香空子  
長男として滿洲は遠い所 粹句樓  
腰低い長男近所に親しまれ 清香

この三句は先づ無難の作である。長男の立場責任、思慮と云ふやうなものが句を通じて窺はれ、主題が生かされてゐる。

香空十君のは時事吟としても通るが、父母を初め一家の謹慎してゐる有様がよく出てゐる。粹句樓君(同君はもう木欄へ投する作家ではないと思ふのは雄圖を抱いてゐる長男の苦衷がよく表はされてゐる。

清香君のは一寸見ると長男が次男であつてもいゝと思はれるやうな句であるが、此の場合長男でなくては生きて來ない。長男として世間を渡る思慮分別が出來、如才なきが體得し得られたことを見付けてゐる。尤も句は凡人凡情的なコンモンヒユウマニテイに於つて獨創味に乏しい嫌ひはある。

——以上○印は添削句——

### 次回募集

一、課題 「寝顔」 一句

一、〆切 一月十日

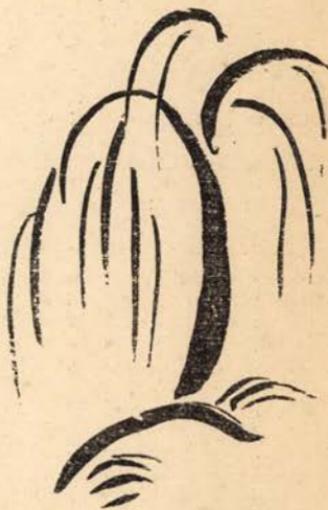
一、投句先 大阪市浪速區湊町保線事務所

福田山雨樓宛

(但し他の投句と共に本社事務所へ寄せられても差支ありません。此の場合はパイロツト川柳と記入ありたし)

# 各地柳壇

いものあを創れ



路郎・縁雨・二南整理

## 川柳 玉造句會 (大阪)

十一月二十二日 於東雲俱樂部 清水友帆  
報誕生三月目の句會へ珍客 辻井柳塙氏が見  
え雞牛子、山雨樓氏の御指導を得ました事を  
厚くお禮申します。

### 雑吟

### 雞牛子選

父と娘にけふは精進料理なり 耕之介  
母親と歩行けば只の新世界 柳塙  
十二月四ツ身の晴着出して見る 艸樂  
子を抱いて日南を探す日曜日 山雨樓  
倦怠期女房の親の口さがな 小松園  
長火鉢言葉すくない師走にて 艸樂

### 席題 突出し

### 水車選

評判の審査子供もうんとあり 柳塙選  
評判になつて白粉濃く見え 山雨樓  
評判を無視して通る十二月 雞牛子  
評判は遠い所に早く知れ 水車  
評判のその人訪へば裏長屋 まさる  
紋付が来て評判の出る長屋 藤太郎  
評判にされて新聞賣れ残り 銀波  
評判を否定もせず太つ腹 耕之介  
評判の店氣持よく待たさせる 小松園  
(秀) 評判に心が痛む親ごゝる 山雨樓  
(同) 評判を鏡の中で聞いてゐる 小松園  
(同) 評判の孝子路次をせまふ住み 豆秋

欠伸してからの毛糸のはがどいす 秋選  
小心にされて毛糸も編む男 山雨樓  
毛糸もう膝を離れて五六尺 耕之介  
買ふただけ習らふて歸へる毛糸店 山雨樓  
毛糸編む妻の若さも秋なれや 水車  
友帆

腹の見へ毛糸のシンペ出来上り 雀踊子  
荒れた手に毛糸の玉が引つかゝり 小松園  
(住) 毛糸編む手へ碁の音が更けてく 山雨樓  
(軸) ききわけの音子へ毛糸よくもわ 豆秋

席題 肌 艸樂選

男てふ誇り双肌ぬいで見せ 耕之介  
空腹の肌へ食ひ入る北つ風 紅  
お守に肌の油が染み込んで 山雨樓  
湯から出た男の肌も十八九 豆秋  
土の色工夫の肌にはじむなり 水車  
レビニーの肌には真冬が迫る 山雨樓  
處女の肌鏡に許すばかりなり 山雨樓  
子の足が肌にあつた朝の冷え 耕之介  
刺青の肌に潤一郎の冷え 山雨樓  
誘惑にすれて戻れば肌寒き 雞牛子  
(軸) 子の母となつて肌も露はなり 柳塙  
兼題 湯氣 艸樂選

飴を焚く湯氣の中から流行歌 紅  
一日の仕合せを風呂の湯氣の中 十起  
湯氣を呑むうまい番茶の舌鼓 銀波  
ロンタンの湯氣がとほしい寒い空 水車  
鏡臺に向ふ素肌に湯氣があり 友帆  
トルコ風呂湯氣と一緒に抛り出さ 小松園  
ベツトから濕布の湯氣をたしかる 水車  
赤飯の湯氣に落つ病み上がり 紅  
こんにぐの湯氣庚申の夜なまりけり 耕之介  
小兒科の醫者が来て湯氣を立て 柳塙  
サーピスのタオルの湯氣をきよ上げ 豆秋  
朝々のお供へ湯氣のある御飯 雞牛子  
山頂でリュクサツクに湯氣が立ち みよ坊  
トルコ風呂いきなり足を履まれ 小松園



席題 少年 春期(檳榔改メ)選

(佳)少年の瞳に映る地平線 茜草女

(同)少年の聲高らかに澄んでゐる 青波

(同)少年の夢に黄色い月が出る 亂笑

(同)東郷元帥になつた少年團 天痴人

(人)少年團世界平和の夢があり 同

(地)貧しさはあはれ少年の本能よ 茜草女

(天)少年の心に迫る日本海 六郎

席題 ぼんやり 天痴人選

ぼんやりの亭主に妻のヒステリー 鹿之介

憂鬱は寝てぼんやりと灯を見つめ 鈴鹿

ぼんやりと煙草ふかして晝下り 亂笑

不眠症ぼんやり朝の床を出る 青波

ぼんやりと立てば道を問はれて 茜草女

ぼんやりと見れば古い歴の傷 同

縁談へぼんやり出来ぬ年にされ 春朗

ぼんやりとしてない返事初年兵 同

反省の心ぼんやりかすむなり 六郎

十二月一人ぼんやりしてゐたき 同

席題 暮 勁一 耶選

面會をすませば外は淡く暮れ 青波

酒場だけ暮れて活氣漲れり 同

マダム戯れ一日暮れてをり 鹿之介

暮近く唯氣がもめる氣がもてる 鈴鹿

一人去り二人去り野火がくすぶる 亂笑

更生をちかつた二十八も暮れ 同

歳末の都會の騒音何處へゆく 春朗

路次の奥子供の聲で暮れてゆき 茜草女

名残の菊に秋は暮れる也 遊星

暮れてゆく外燈が雨に濡れ 同

借金が自惚となる年の暮 天痴人

モラトリアムが續くほしい年の暮 同

高利貸よみんな死ななかな年の暮 同

川柳 松山句會 雜誌社

十一月十八日 於素泉居 石丸春峯報

兼題 大街道情緒 五 健選

月給の高かんがへる大街道 素泉

大街道聯珠ちいさい灯を守り 紫石

午前二時大街道は寝て仕舞ひ 双葉

其處へまでつき合へと言ふ大街道 春峰

行き詰る大街道の三丁目 素泉

(同)女房をせきたて、行く大街道 靈子

(同)自轉車のベルへ忙はる大街道 春峰

(同)極道へ黄昏れかゝる大街道 紫石

(人)大街道急がぬ足にして仕舞ひ 大觀

(地)大街道儲けてるよな店ばかり 靈子

(天)晚酌の酔を大街道へ捨て 大觀

(軸)大街道お寺を知らず通り過ぎ 五健

兼題 羽織 紫 石選

着せかけた羽織へ来る日尋れとき 松葉

羽織だけ替へて奥様應接間 大觀

大空の迷惑は草へ脱ぐ羽織 五健

村中が御羽織で出る歎願書 素泉

羽織から羽織をぬいで隠し藝 かき松

有閑の會に羽織はごれにせう 春峰

(人)恥かしい羽織を仲居ぬがと來 五健

(地)羽織着た看護婦は夜は更ける 大觀

(天)色あせた羽織で神の道は説き 春峰

(軸)派手好も濛い羽織で來る株屋 紫石

兼題 眞劍 大 觀選

眞劍へ相手の度胸ちとゆるみ 花の助

眞劍の瞳へ世辭だつたと云へず 五健

眞劍になつて或る日の眞劍さ 五健

大馬鹿になつてかう向いただけ 素泉

眞劍へ女はむこう向いただけ 双葉

眞劍にほだされ居る母であり 同

眞劍に怒つた父の有難味 紫石

(秀)打ち明ける男の語尾の震へ 春峰

(同)眞劍に打ち明けらる恐くなり 同

席題 秋風 靈子選

秋風へ滿洲の事株の事 素泉

妻楊枝も秋風に觸れて出る 紫石

秋風に抜毛を淋しがる女 五健

秋風の細道友の極ゆく 大觀

(佳)秋風へ稻種は音を立て、ゆれ 紫石

(同)お百姓へ算盤持たす秋の風 五健

(軸)さわやかにシヨール短秋の風 靈子

席題 馬券 松葉選

勝つて來た馬券藝者へ取りまかれ 紫石

女房が買った馬券が當つてる 素泉

上海で當つた馬券他人の事 五健

(佳)女房子へ濟まぬ馬券へ暮せり 紫石

(人)汗の手に勝つ馬券のわになり 靈子

(地)買つ居る馬券へ時間まちごかし 花の助

(天)も一度まあ一度馬券空へ飛び 五健

(軸)瘦せ馬の馬券意外に儲けさせ 松葉

席題 嘘、車、かくれんぼ、女湯 合徳、生活線、巻紙、満足 見積書 五 選

社會的地位満足の日の續き 靈子

満足な笑顔の中に男の子 春峰

見積書儲けは度外した値段かくれんば屏風倒して叱かられる姉 娘生活線が泳がされ合槌を打つ豆腐屋の人間味女房の聲もして居る女湯嘘ばかり云へて舞妓のよく賣れる巻紙の終りに無心一寸書き満足にわからぬ頭撫でられる満足に歩めぬ足へ靴を買ひ子供ももうお伽の嘘を承知せす待たされる車空地の陽にあたり親方の字は讀みによく見積書半分に見ても嘘を笑ひ合い境遇の通り合槌打つ産婆

魚屋の聲裏口で威勢よし裏口に待たして下女は塗つて出る裏口を覚えて里の母が来る裏口は心得へて居る出前持ち裏口で儲けた話しして歸り繁昌と別に裏口菊作り裏口で叱かれて居る御用さ裏口で叱かれた聲で逃げ

川柳 神戶句會 (神戸) 雜誌社 十一月二十二日 於明珠居 明珠報 兼題 スター 華 水選 擲 水 淋しさはスターの素顔見た日なり 監督に拘れる權利をスター持ち 流行の柄はスターによく似合ひ

署名するスターを圍む婦人會 離婚した噂さスターの位置に居る花形も下宿の壁に知る悲哀 撮影所スターの顔が見つからず (佳)繪業書スターの顔が笑つて居 (同)親のあるスター手紙を書てゐる

約束へ時計のれちを捲いて出る 金時計誘ふ言葉かうまいなり 留守番の不覺時計がとまつてる 贅澤を云はず時計のれちをまき 夜の時計勝氣な主婦の手に捲ける 時計捲き 紙日へ望を棄てゝあす

巻紙へ女は強く書いて來る 失業苦にじむ罨紙へ燈の暗さ 紙屑籠に埋れてゆくよ人生譜 (佳)紙鶴を折つてよしい無言なり (同)吐血した思ひ出があり原稿紙

針使ふ姿は矢張り女なり 針持つて母隠居所がほしいなり 針箱の中から煙草錢を借り 針箱に娘の心知つした母 病む父へ針持つ心強うして ふるさとの母の針なりしつげとる (佳)米若をきかせませうと針を (同)灰皿を信じ切つてる針仕事 (同)針落ちた火鉢を夫たのまれる (軸)落ちて針を叱つて上衣ぬぐ

交番を出て正直は勝つた顔 後から正直者はたゝかれる 正直は鍵まかされて二十年 云ひ負けたまんま正直二度笑ひ 正直な男の背にあるまるみ 正直な返事を女たち笑ひ (佳)正直の損は今夜も腹が立ち (同)正直へマダムさだかも足らず (軸)正直を下女叱つる日もありき

氣心を知らず大きな聲を出し 趣味のない女房へ知らぬ花が咲き 年頃の遊びを母は知らぬなり 腹立ちの膝へまゝすぐ猫がくる 超然と知らぬ男の床柱 口入屋から來て知らぬ事ばかり 結局は知らぬ同志で辭書になり 生活を知らぬ瞳の澄んでゐる 川柳雜誌社

萩の茶屋創立一周年句會 (大阪) 十一月廿六日 於奥野禿山居 五選 席題 大笑ひ 大笑ひ帯がこんなにゆるんで來 大笑ひ押入の襖はづれかけ あゝ死ぬの聲に又々大笑ひ

主婦の友脈にはさんでコンバクト 先づ日輪たんねんに見る新刊誌 廣告で賣れる雑誌のもの足らず 足踏まれながら雑誌のをぞき込み 出養生雑誌の通り飲んで見る







軸 女兒なれば美しかれと願ふ愁 心府

席題 すき焼 曉 童選

すき焼の中へ割り込むほどの仲 富夫

(佳)すき焼の香流れる露路をぬけ 心府

(同)すき焼にサラリとけた誤解 一風

(人)戀もなくすき焼鍋をつゝゐる 同

(地)すき焼へ仲居世帯がしてみよ 宵明

(天)すき焼を離れて祖母の小さい膳 心府

(軸)すき焼へ女はソーダ水を云ひ 曉童

席題 三 宵 明選

三年もも逢はぬ女の束ね髪 小樓

職三度變へて師走の寒がしむ 一風

三日月は男の意地に成つて来る 小樓

三日月の寒さへマント着せてやり 富夫

席題 笑 互 宵明選

アスファルトばかりへ洩らす笑 富夫

女にも肚から笑ふ時があり 富夫

職業としての笑ひにフト淋し 心府

川柳 簸川句會 (出雲)

十一月廿二日夜 於緑之助居 尼緑之助報 綠之助報

兼題 忙 章泉

出奔にベンを持つ手の忙しさ 章泉

太陽の微笑の中の農繁期 與詩雄

くしやの髪で多忙をこぼして 愁天

日々の激粉に友情薄れがち 田鶴緒

(人)焦燥へ忙とセコンドの音が 美登利草

(地)忙しい中にはつきり赤澤 與詩雄

(天)事務多忙だけの日記が續く 同

兼題 門 與詩雄選 草路

門前の友に答へて帯を締め 草路

音もなく自家用門へ吸ひ込まれ 鴉天

舊家とは名ばかり大きな門一つ 田鶴緒

門を出るとこゝろ寫した御榮轉 綠之助

(人)燈門に立ち満期の秋を知る 數馬

(地)醜評へ門黙々と立つてゐる 美登利草

(天)門札の古さへ寒く夕時雨 鴉天

席題 藥 田鶴緒選

膏藥の減る日か淋しく病み續け 美登利草

病む心冷たす藥の香をかぎぬ 大朗

まぶた重き母に淋しい藥の香 同

さみし〜藥瓶の埃を見る 綠之助

(人)藥瓶の底でもがいてゐる青春 與詩雄

(地)藥局の底にほひぼん眞晝の陽 綠之助

(天)病む身は賣名藥と知りながら 美登利草

(軸)藥じみた身體へ小春日の 美登利草

兼題 羽 織 草路選

歸郷兵羽織もごこか武骨しり 與詩雄

羽織着れば何處へ行くかざる子等 數馬

(秀)羽織の紐にかけて物言ひ處女 田鶴緒

(同)ぬぎ捨てし妻の羽織に愛情痴 同

(同)羽織ふらり磯節へ合すなり 綠之助

席題 遠 美登利草選

遠征のチームにすまぬ試合なり 草路

(秀)夢がちぎれて遠い所へ行きた 同

(同)お母さんは遠い國が無邪氣で 與詩雄

川柳 塗青句會 (大阪)

十月十六日夜 於岸上商店舗 熊谷紅報 同

兼題 母 互選

泣き事をかくして母の瘦せてゐる 元山

母親へステッキ振つて供になり 碧洋

小包に藥草もある母の愛 光

保護願母の意見が通るなり 紅

母一人早稲田へ入れる子を育て 同

母と娘の慰め合ふてゐる間借 同

初 獵 光

給心へ初獵のフト立ちすくみ 潮

初獵の獲物電車で覗かれる 潮

(秀)初獵の靴は去年の儘の土 潮

安賣 湖

安賣の聲がかれてる人通り 人選

安賣の知らず〜に町外れ 分

安賣へ女同志の手が縫れ 光

安賣の聲が大きい二人連 分

(佳)安賣に大鬚小鬚町せまく 光

(同)安賣へ女性の力見つけた 紅

滯 在 歌選

滯在の荷が御近所へよく目立ち 分

滯在に馴れて訛も使つてゐる 元

滯在の欠伸を捨てる窓を開け 紅

滯在に豫算のくるふ新世帯 光

滯在の子供にだけは喜ばれ 同

滯在の日記に辻褃合はしとき 紅

夢 謙

悪夢から醒めるゝ電話掛つて来 公選

夢見たが皆淫者かと便り来る 元

子の夢はまるし乳豆をぐるゝ吸ひ 紅

兼題 時 計 分 銅選

物思ひ夜中の二時をだるく聞き 紅

院長の時計見つめて一家族 靜

(佳)胸時計見せて丁稚は寫眞撮り 謙

(同)叱られて出たのに合せて腕時計  
(同)月曜の時計の捻を巻いて見る  
兼題 出来心 紅  
出来心それから泣き續け  
出来心と言ふ事にして許される  
年とつた親をいぢめて来る  
出来心銀行の金出して来る  
ほの淡き悔恨とある出来心  
(佳)出来心今は女に引づられ  
(同)出来心越とはならぬ線を越え  
(人)出来心申譯ない事となり  
(地)温泉の町は朝の雨降る出来心  
(天)女房に嘘迄言はず出来心  
(輔)出来心妻には隠す錢が要り

紅 潮人  
静 歌  
光 洋  
碧 山  
元 人  
岩 公  
潮 人  
謙 公

川柳  
今治句會 (あた)

十二月五日夜 一風氏居 曉 童 報  
兼題 事務服 曉 童 選

事務服が社會意識を強くする  
事務服をきるにもぬぐも鏡を見  
事務服で居るにはあまり美しい  
事務服の袖に戀なごありません  
事務服ときかへてストロープのぬる

山 田  
一 風  
小 樓  
同 樓

さからつて姉の無口が氣にかゝり  
出もごりの姉にだか寝る子です  
そはくと姉が出て行く暮の町  
ほくろがめだつたあれのねがおよ

心 府  
朝 風  
一 風  
小 樓

換へられた下駄は重くて隅へおき  
換へられた下駄は氣がスズラン燈

一 風  
童 風

換へられた下駄星空へ音をたて  
換へられた下駄は出て出る雨の夜  
換へられた下駄を今夜もは出る

小 樓  
同 蛇之助  
樓 選

弱點をうっかり言つた朝の膝ひ  
弱點を知られみつめる膝頭  
弱點へ男金齒をチラとみせ  
弱點を知つた女の長煙管  
弱點をにぎつたような口をき

一 風  
同 童  
曉 童  
小 樓

親一人子一人宿題もてあまし  
宿題はせまう兄貴の側へ座し  
宿題へせめても母はお茶を入れ  
宿題も家庭教師が解いてくれ  
(佳)えりあかをみせて宿題忘れ  
(同)宿題の子へ病床の母の咳  
(同)うつつやつた宿題へ月まん  
(同)一年生の宿題へ母と父  
(同)口笛に宿題ふつと浮んで来  
(軸)宿題へ母の丸髻小さいなり  
(同)宿題へ父の万年筆を出し

史 朗  
健 二  
史 朗  
同 風  
小 松  
同 二  
同 風  
小 樓  
同 童

いかに詩社例會 (松江)  
十月例會 於柳人居 祥 月 報

兵 兒 帶 研 一 路 共 選

中年の腰兵兒帶が寂しいね  
催促は兵兒帶かたくしめて居り  
早寝する兄兵兒帶を軽く巻き

天 痴 人  
研 一 路  
天 痴 人

人絹を小さくむすび隅にゐる  
席 題 闇 天 痴 人 選  
(佳)闇夜がとつても好き個人主義  
(同)闇だけが聞いてしまふ溜息か  
(同)闇のサーベルへこぼれ鳴きやむ

席 題 感 傷 柳 人 選  
亡き母にすまない夢を見てなつた  
と人がつた顔で感傷詩人とか  
もう一度わびて見よう風が逝き  
手にふれた夜露が痛い夜を歩む  
感傷を知る夜ダリヤの首が落ち  
欽きらりきり感傷を嗤ふ

夢 迷  
利 郎  
夢 迷  
夢 迷  
夢 迷  
夢 迷  
夢 迷  
夢 迷

秋風に兎の耳のしほらしい  
兩耳をふさいで聞いた戀の聲  
耳たぶの赤さ彼女は純情な  
耳赫く赫く女給のニヒリズム

席 題 耳 卷 二 選  
天 痴 人  
柳 人  
天 痴 人  
天 痴 人  
天 痴 人  
天 痴 人  
天 痴 人

紫石追悼柳會 (松山)  
河合紫石君が八年十二月八日朝、突如腦溢血  
の爲め逝去さる即ち、十二月九日川柳雜誌社  
松山忘年柳會を開く爲め、各所へ案内通知  
を出し其の前日、大會準備も成りて、明日を  
楽しむ時、長逝されしものにて、枕頭の原稿  
用紙、句短冊等、柳友知人の涙を催さしむ行  
年五十四才、雲村院紫石居士(五健報)

遺 稿 (枕頭の手帳より)  
本伏せた窓へ異郷の月がさし  
樂書を妙に賞めてる古本屋  
此の前の嘘を子供は本で知り  
暇を讀む女給靜かな淺頁  
孝行はやはり質素な柄を撰り

紫 石

紫 石

紫 石

紫 石

紫 石

紫 石

紫 石

紫 石





情熱へ黙す二人へ夜は更け  
一人子の内辨慶の馬になり  
二の口がぬ程妻に意見され  
水煙

(三)反省、散步、星、

露、舊友、空、

反省して見れば急に寒くなり  
反省のまぶたに亡き母あらはれて  
反省の効なく赤い灯にすはれ

反省に轉々として夜は白み  
借浴衣にからまる散歩路  
秋風に吹かれ散歩のあてもなし

星なき空を仰いで明日の糧思ふ  
流星へ戀のさゝやきちよつと切れ  
叱られた瞳ににぢむ一つ星

朝露を踏む父と子の足そろい  
舊及の死にありし日の走馬燈  
思ひ出話しに舊友の目はうるみ

(四)栗、鏡、主義、變風、

火鉢、

栗落す竹竿の先に光る秋  
友歸つて淋しく栗の皮を捨て  
木枯をきいて栗を焼いてゐる

手前の子よその子栗の数がなし  
病める身の鏡顔がこぼくなり  
惜げなく鏡に見せる處女の肌

處女の日を鏡に秘めて嫁ぎ行き  
鐵窓の月へ誤れる主義なりし  
意見され俺の主義だと逃げてゐる

主義は主義やつげり母は懐しい  
歸つたよ妻は火鉢に居る寒さ

氏神祭奉納句

一可 愁天 水煙 正月も祭も晴衣これ一つ  
丸男 祭から祭へ旅の曲馬團  
榮一 祭の子晴衣に少しすまし顔  
武義 祭だあ、祭だ太鼓がひやく  
苦笑人 御祭の喧嘩も知らせ故郷の友  
水煙 (佳)祭の前奏曲餅搗きの音  
硯水 (同)お祭が待ち遠しい頃がいつか  
汀雨 (同)お祭りだ天下御免と飲んで  
一可 (同)お祭りだ天下御免と飲んで  
愁天 (地)餡しやぶつた頃が戀しい祭の日  
汀雨 (天)稲の波祭の空は晴れてゐる  
章泉 (軸)童心にふれて祭の太鼓なり

川柳風呂 (その十)

照 初風呂 水谷鮎美報  
夕鐘 初風呂は重たき財布預けられ  
白菊 初風呂で行く初風呂へ傘をさし  
同 初風呂へ今日の顔ぶれ違ふなり  
同 初風呂の鏡に、うづる君と僕  
同 初風呂に双六のこと考へて  
遊歩 初風呂の道いつばいに羽根をつき  
同 寝正月初風呂になど浴つておこ  
同 初風呂の番臺祝儀で飾りたて  
同 初風呂の歸りに聞いた鶴の聲  
ト居 初風呂へ今年は一人殖へてゐる  
同 初風呂の兒ときんと湯あがき  
同 初風呂で人生観に耽るなり  
同 初風呂で子供の云ふがまゝになり  
同 初風呂へ獅子舞の笛聞へて來

天痴人居對座吟 (鳥根)  
十月八日夜満開の木犀の香を愛でつ。  
水掻きが得意の様に家鴨泳ぎ  
かけ出しの下に家鴨は泳ぎ着き  
足音も軽くうばさん逢ひに來る  
同 刈つた田の廣さへ家鴨出してやり  
同 朝露の土手へ素足をうれしがる  
同 蒸し栗の湯氣が秋めく宵の辻  
同 副業の如く茸番栗拾ひ

いかだ詩社例會 (松江)

十一月二十三日夜痴人居にて句作に耽る

席題 笹 柳 人選

笹のり太平洋を知らぬなり  
柳にさらされたる笹のりの鼻  
都之介 激流へ笹流して日が暮れた  
夢迷 流れ流れて笹ようやく岸につき  
同 親子連れ笹の上に住居  
順風 笹師も飛沫にぬれて流れ居る  
磨須雄 笹のり流るゝまゝに飯にする  
同 笹のり唄になる程儲らぬ  
同 急流に笹流しの腰が出る  
利郎 激流と笹にのつて二十年  
夢迷 (秀)一人言水に散らして笹のり  
都之介 (同)動くもの笹 冬の雲ばかり

席題 神 天痴人選

神様を信じて母は死んで行き  
善真に神を信じて寝てしまひ  
柳人 神様を信じていつかおちぶれる  
夢迷 すぐはれた様に氏神からのがれ





# Nishincho MEMO

## 雨 緑

あけましてお芽出度う

▼本誌も十一巻の春を迎へま  
す。昨年は十周年大會、東京句  
會、植物句會などの特異な句會  
を催しいづれも大成功で終りま  
した。尙今年も一層計畫をして  
ゐますから今後も一層御鞭撻と  
御援助をお祈り致します。  
▼別項社告の通り左の方々が同  
人の活躍を祈りました。今後  
の活躍を祈ります。  
吉川啞人君、山口縣久賀町  
明石柳次君、大阪市東區北久太  
郎町四藤井方  
平井春光君、大阪市大正區大正  
通六ノ九  
大鶴喜由君、大阪市東成區大今  
里町四三二  
後藤青兒君、大阪市東成區南生

野町二ノ三八

眞田幸根君、神戸市神戸區再度  
筋町三九ノ八二

▼本社の公認選者を推薦される  
ことになりました。

従來の共選組選者から左の諸君  
が個人選者となりました。

二南、紳樂、華水、豆秋、天痴  
人、水車、翠夢、明珠、汀柳、  
雨迷、梧耶、

新に共選組選者となつたのは没  
食子、山月、春秋、夕鐘、里十  
九、柳人、機見女、

次の諸君は支部選者として推薦  
されました。

夢裡、紅、變人、英賀夫、司郎  
愚籠、

▼新居濱支部を愛媛縣新居濱町  
西町で新設することになりました

た。幹事は同町の越智虹子君で  
今後の活躍を祈ります。

▼塚越迷亭、宮尾しげを、坊野  
壽山の三氏が十二月二日來阪さ  
れて路郎先生と山雨樓君とに會  
はれて歸京されました。

▼食滿南北氏の春掛川柳新作畫  
展觀會を十二月十二日より十五  
日まで大阪南海高島屋で開催さ  
れました。

▼西田紳樂君は十二月二日只一  
人で深み行く洛北の景に親んで  
歸られました。

▼岩崎柳路君から(河省朝陽  
城)川柳塔と年賀廣告とを航空

便で二回に亘つて送つて來られ  
ました。同君の熱心さを感謝す  
る。

▼水谷粘美君は十一月三十日長  
女を儲けられて茂美さんと命名  
されました。

▼熊谷紅君は十二月十二日商用  
で塔の澤へ行かれました。

▼平井若太君は東京へ移られて  
特異な古本屋を始められる由大  
いに發展を望みます。

▼廣江天痴人君は松江署管内の  
公設消防の特別檢閲で乃木第一  
部の旗手として出場されたそう  
で當日は三千五百餘名から消防  
手が集つて島根縣始めての壯觀  
さでした。

▼松江支部の美城、山紫の兩君  
が松江留守隊から滿洲へ交替兵  
として行かれたので松江支部と  
八東支部から多數見送られたそ  
うです。

▼松山支部幹事の河合紫石君が  
逝去されたので後任幹事石丸春  
峰君と替られました。同君の活  
躍を祈ります。

▼宮尾しげを畫伯は肖像畫入の  
「昭和百人一句」限定版で出版  
されました。希望者は東京市豊  
島區巢鴨町六丁目二九〇へ御  
申込んで下さい。並製定價一圓

▼食滿南北氏が、夏以來脚部の  
患で芦屋へ靜養されておました  
が、この頃全快されたので知名

な方々の發起で「南北を見直す  
會」を催されました。私も案内  
を頂いたので出席致しました。

▼松盛彌人、松丘町二の兩君は  
本社の編輯局同人として多年盡  
されましたが家事の都合で退社  
されました。一日も早く復活さ  
れる事を祈ります。

▼松江支部の松本青波君が退營  
で十一月二十六日歸松されました  
ので八東支部の亂笑、遊郎、  
鹿之介、田の字、鈴鹿、遊星、  
檳榔の外百餘名出迎されたさ  
うです。

▼宮岡白峰君は十二月二十日病  
氣で大阪久枝紅門病院へ入院さ  
れました。一日も早く全快を祈り  
ます。

▼庄萬よし君十二月二日叔父の  
死去で歸國されましたので、三  
日の支部聯合會には遺憾ながら  
欠席の旨を知らして來ました。

▼友洲貴山桑原京郎君は家事の  
都合で同人を退かれました。一  
日も早く復活を祈ります。

▼松山支部幹事河合紫石君が十  
二月八日朝脚溢血で突然逝去さ  
れました。支部のため多年盡さ  
れておました。實に遺憾に堪へ  
ません。翌九日の告別式に前田  
五健君が川柳家を代表して告別  
の辭を述べられたそうです。哀  
悼の意を表します。

▼本誌の編輯は山雨樓、水車、  
鶴峰、豆秋、春光、機見女の諸  
君と私とで致しました。



# 編輯の窓

山 雨 樓

▼新年お芽出度う。殊に皇太子殿下御降誕の國民的歡喜に満ちた紀元二五九四年を迎えて慶祝の念を禁じ得ない。

▼その慶びのうちに本誌が第十一卷を迎え、益々堅實な發展を遂げつゝ、茲に颯爽として新春特輯號をデビューすることが出来たのは欣快に堪えない。

▼本號の讀物として社關係の筆の人達から募つた一妻の顔の批評は課題が禮を失する嫌ひはあつたが、初春のお笑草として欣然快諾され、幾多の玉稿に接したことを感謝する。

▼も一つ本號の讀物として同人諸君から募つた「川柳をやつて得なした話」の短文中には願意に副はない抽象的なや、感想文等が多かつたので遺憾乍ら整

理をし、過去の事實に基いた興味的なものゝのみを掲げることゝした。不惡御諒承を乞ふ。

▼本號の表紙繪は田村孝之介畫伯を煩はした。古典的な骨牌に新味が盛られてゐる點味はつて頂きたい。

▼路郎主幹が歳末特に多忙のところを徹底して「新春雜筆」を執筆して下さつたことは感謝に堪えない。しかし先生が此頃健康を續けてゐられるので嬉しい。▼毎號好評の柳壇畫報は廣く全國から之れを轉め、川柳史資料としても後世に遺るものたらしめたいと思つてゐる。珍らしいもの、變つたものは本社宛とし「お送付に預りたい。最近本社を請を容れられ御惠贈下さつた方々に厚く御禮申上げる次第である。

▼文藝落語家として有名な正岡容氏から「演藝今昔名譽帳」と題する好讀物を寄せられた。當分連載されることになつてゐるから御愛讀を祈る。

▼藤里好吉氏の「川柳天神縁起」は何と云つても氏の獨壇場である。回を重ねるに従つて益々光彩を放つことゝ信ずる。

▼本誌が新春特輯號の一大讀物

として一昨年から斷行してゐる「日本柳壇百人撰」は回を重ねるに従つて益々好評であり、柳壇の動きが反映するので最も有意義に且つ興味深く迎えられてゐることをよるこんである。本號からは誌面の都合で一人一句とした。尙最後の校正迄に間に合はなかつた向に對しては社選を行はなかつた。

▼久し振りで紳樂、二南兩君が健筆を揮つてくれた。今後兩君の力に俟つところが多い。

▼月評は十二月十日の夜いつものカナメ喫茶店の階上を煩はした。里十九君は其後病氣全快して何くれとなく嬉しい世話をしてくれた。

▼本號は豫想以上に原稿が輻輳したのでうんと増頁したが尙充分に盛りきれなかつた。勢ひ遺憾乍ら割愛の止むを得なかつた寄稿が尠くない。筆者並に讀者の御寛恕を願ひたい。

▼阪大の笠原路生氏が路郎先生の句を獨逸語に翻譯され、それに關する論説を次號に執筆されることになつてゐる。御期待を乞ふ。

▼十二月十七日の大阪朝日新聞日曜版の半頁が、路郎先生の「川

柳年忘れ」で埋められた。その朝ざれだけ澤山の柳人に依つて刮目就讀されたかを想像して思はず快哉を叫んだ。

▼十二月七日の夜は玉造、蓮久寺で故伊藤愚庵の一周忌會が開かれ、故人監督の元撮影された思ひ出多き長谷川プロ特作「海のゲルシニア」が映寫された主幹は編輯上の無據用事の爲め缺席されたことを残念がつてゐられた。

▼暮れの十七日に路郎先生、綠兩兄と共に閑生氏を訪問した。氏は固疾の中耳炎で未だに通院してゐられるさうであるが、社のことについて色々相談にのつて頂き、その席で大門氏を紹介され佛壇の話で賑はつた。氏の全快の速かならんこと祈る。

## 轉居

▼楊井二南君は大阪市西成區五出本通四丁目一五へ▼安川久流美君は京都府舞鶴町丹州時報社へ▼平井蒼太君は東中市豐島區集鴨町三丁目二七へ▼田中彩秋君は大阪市旭區赤川町一七一四へ▼帆倉川柳會は高知市新京橋谷齒科醫院方へ

## 前號正誤

(四一頁)「さぶしさはめがれのたまのきすだらけ」春秋(六頁)朱耶、四七頁沐天

### 投稿規定

- ▼ 投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▼ 「近作柳樽」は全家の雜吟を募る
- ▼ 「川柳塔」への投句は同人に限る。
- ▼ 各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。
- ▼ 文章は二十字詰半紙判原稿紙に詰める事。
- ▼ 書體はなるべく楷書川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。
- ▼ 締切は嚴守されたし。
- ▼ 投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

## 募 集

### 第十一卷第三號課題

一月五日締切

(各題十句以内)

### 懸引

住田 亂 耽選

### 膝

日野 華水 共選  
須崎 豆秋 選

### 第十一卷第四號課題

二月五日締切

(各題十句以内)

### 陰口

楊井 二南 選

### 初恋

廣江 天痴 人選

### 每號募集

▼ 近作柳樽(十句) 麻生 路郎 選

▼ 各地柳壇(會報)

▼ 文章(評論研究感想吟行漫文)

### 社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

### 定 價

- 一 部 金參拾錢
- 半箇年前金(特輯處共)壹圓八拾錢
- 壹箇年前金(特輯處共)參圓六拾錢

### 廣 告 料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます

▼ 御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼ 誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼ 送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼ 御希望により集金郵便を差立てますが御不在中にも頂ける様に願ひます、但集金郵便(二年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼ 御注文には何月號よりと御指示願ひます▼ 轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼ 川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和八年十二月廿五日印刷

昭和九年一月一日發行

第十一卷 第一號  
(毎日一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸二郎  
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

發行所 川柳雜誌社  
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地  
電話天下茶屋二五七九番

事務所 川柳雜誌社  
大阪市住吉區平野西之町八三番地

振替大阪七五〇五〇番  
電話天王寺一一六七番

### 賣 捌 店

(大阪) 大賣捌二盛社書店 (明文堂 其他 市内 各書店)  
(東東仲見世) 玉森堂 (神戸) 米田、寶文館 (函館) 石塚  
(京都) 三宅 (名古屋) 靜觀堂



# 道アラから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなった。本は寶石などのやうに高價なるが故に厚いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が来たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く讀む方法として古本を買へばいい。古本と云つても虫喰本のことではない。古本が非衛生的に考へられてゐた時代は遠うの昔に過ぎてしまつた。道アラの次で公立社の棚をのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。

(路郎生)

古

本

は

高價に申し受けます。御通知次第早速參上確實迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が従來の店の一軒置いて北隣へ移りました。従來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

## 賀正 公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入  
電話 南 五六二番

### 川柳雜誌案内

六號活字十四字詰三行金五十錢、一行増すごとに金十錢(但し前金切手代用可)  
改題、修繕、句會案内、柳巷廣告、その他

### 川柳きやり

菊判每號七十數頁

月刊一部廿五錢郵税一錢

東京淺草小島町  
川柳きやり吟社  
(取次所) 本社事務所

### 喫茶店 キンク

大阪市西成區玉出本通  
三ノ三六(仲小路)  
電話 天下 二五七九番  
茶屋

### 川柳雜誌投句用箋

本社制規の投句用箋を左の價額でお頒ち致します。なるべく此用箋を御使用下さい。  
五〇枚綴二冊 價金拾二錢 (送料共)

▼御申込は本社事務所宛。  
(一錢切手代用不苦)

### 懸賞川柳募集 題「晴れ」 路郎選

一月十日締切

その他種吟を募る  
▼用紙 官製ハガキ(化粧柳壇と明記の事)  
▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す  
▼投吟所 大阪市玉出本通三の三六  
麻生路郎氏宛

### 化粧新聞社

菊版九〇頁特輯號一三〇頁  
發行日一  
**看人羣**

定價一部四十錢 特輯號五十錢  
半年二圓三十錢 一年四圓半錢

大阪市南區心齋橋筋  
をぐらやビル

發行所 番傘川柳社  
電話 南 一七七三番  
振替 大阪七六九四四番

### 社告

本社の例會案内希望の方は左記へお知らせをお願いします  
大阪市住吉區旭町三ノ一四  
會報係 須崎 豆秋

正 賀  
社 誌 雜 柳 川  
社 吟 旅 御

大 阪 市 東 區 粉 川 町 一 番  
電 話 東 七 五 一 五 六

東區粉川町一六 (電東七五一五)

西淀川區海老江上四丁目三 (電土二九二〇)

此花區草開町三九 (電福一五六三)

東區粉川町二七 (電東二二、三八五八)

東區南農人町二丁目二一

北區瀧川町一三三 (電北四五九二)

東區十二軒町六 (電東二〇四三呼)

東區十二軒町二六 春元方

東區和泉町二丁目一八

東區十二軒町 春元方 (電東二二、三八五八)

東區內久寶寺町三丁目五十次特許方 (電東六八三七)

浪速區貝柄町六

東區內久寶寺町四丁目九 (電東三四八四)

東區內久寶寺町三丁目七 (電東四二一〇)

生	岩	石	春	原	和	神	桑	松	近	北	白	芝	樋
田	本	橋	元	田	田	戶	山	田	藤	川	井	口	口
翠	素	呂	紀	果	好	正	清	多		あ	羅	四	太
夢	人	花	太	村	陽	夫	美	郎	勇	美	仙	葉	一

鶴町支部

大阪市大正區鶴町四丁目一六四 妹尾方

謹賀新年

岩橋 岩石  
林 しげる  
加藤 一突  
照屋 寛柳  
松下 小柳子  
宮岡 白峯  
宮岡 公子  
妹尾 變人  
關本 雅幽  
角田 のぶを

川柳  
雜誌社  
玉造支部

天王寺區上汐町六丁目五四 大久保方 陸丹生

東區東雲町二丁目一四一 若木三日月

東區玉造町三九三 高間藤太郎

天王寺區夕陽ヶ丘町 三好方 瀧昇鯉

東區東雲町二丁目 押谷方 中村みよ坊

東區東雲町二丁目 下田方 中村順一

天王寺區東平野町一丁目二 魚住未廣

東區玉造町 岡本方 黒田青路

東區東雲町二丁目 下田方 佐々木一郎

東區東坂町四六五 佐々木正文

天王寺區夕陽丘町三二 阪上方 佐藤しのぶ

東區東雲町二丁目 木村柳柴

東區東雲町二丁目 岸南柳

東區空堀通り一ノ九三 清水友帆

東區玉造町 鈴木蘆花

客員 東區元伊勢町 昭和園 西田艸樂

事務所 東區東雲町二丁目 岸南柳方



南海電車

賀正 池澤樂居

大阪府下高石町北六二六

大阪帝國大學醫學部

賀正 長崎柳秀

賀正 渡邊虹衣

大阪天王寺區上ノ宮町六一

賀正 阿部閑生

大阪市外豐中  
千歲通二丁目

賀正 柳大門

大阪市淀川區十三東之町二四

賀正 中澤濁水

高知市本與力町

賀正 福田山雨樓

大阪市浪速區湊町保線事務所  
電話戎一〇〇三番

賀正 橫山勝二

大阪府豐中町新免九二二

賀正 住田亂耽

兵庫縣魚崎町五九二八

謹賀新年 一月元旦

明け初めの鐘を納むる暇もなく  
まるびつゝ起ち直りつゝ四十五

大連市平和臺十七

佐々木三福

賀正 畔柳社同人一同

大阪鐵道局經理課調査掛

幹事 植山九天

電話北四七〇〇一七〇四四

祝一九三四年 平井春光  
吳林秋光

紫光會 山本夏光

曠原改

平井冬呼

事務所 大正區大正通六丁目九二

川柳雜誌社西條支部

賀正 荒井英賀夫

愛媛縣西條町新町

川柳雜誌社塗青支部

賀正 熊谷紅

大阪市西區新町南通五ノ一〇

賀正 富士野鞍馬

鎌倉長谷十六

ク井ン喫茶室

ひとりみの女給

クキンの夢を逐ひ

何うぞ御引立を

大阪市西成區旭北通二ノ一

但萩の茶屋驛西へ突當り

夜店通南へ半丁西側

奥野禿山

散髪と白毛染は

岸男前製造所

岸南柳

大阪市東區東雲町二丁目

賀正 木村銀波 大阪市西成區 東四條三ノ一五地	賀正 中島鐵洲 鳥取市川端町二丁目 電二八八番	賀正 金泉萬樂 尻崎市東樺木町四二	賀正 宮内耕朗 臺中市榮町一ノ二	賀正 尼綠之助 島根縣今市町 川柳雜誌社釜川支部	賀正 平岩司郎 京都市嵐山天龍寺前
賀正 三輪九文錢 大阪市西成區 旭北通一ノ九地	賀正 辻いの助 大阪市西區本田通り 一ノ五	賀正 戸倉普天 兵庫縣川西町鶴ノ莊 (阪急寶塚線能勢口)	賀正 西田艸樂 大阪市東區元伊勢町 昭和	賀正 前田五健 松山市眞砂町二一	賀正 高橋かほる 大阪市南區北炭屋町二〇一 電話南五九六番
賀正 福田鶴峰 大阪市天王寺區 北河堀町六九	賀正 山本葉光 大阪市天王寺區 伶人町八四	賀正 大橋素月 關西土地株式會社	賀正 岸上錦石 大阪市泉北郡高石町 羽衣六番地	賀正 奥野禿山 旭北通二ノ一 川柳雜誌社萩之茶屋支部	賀正 はりこ 月刊川柳研究雜誌 見本請求も同じ 京都市東大路二條北 はりこ吟社

<p>賀正 大西八歩</p> <p>大阪市東區博勞町一ノ一八 竹中一方</p>	<p>賀正 奧田綠水</p> <p>金澤市石坂川岸町五ノ五 電話四二九一番</p>	<p>賀正 川柳雜誌社光續會</p> <p>竹内 機見女</p> <p>大阪市天王寺區 勝山通り三ノ四八</p>	<p>賀正 楊井二南</p> <p>大阪市西成區玉出本 通四丁目十五番地</p>	<p>賀正 大野琴莊</p> <p>東京市向島區寺島町五ノ一二六 電隅田六〇七番</p>	<p>賀正 武田立六</p> <p>東京市神田區久左衛門町一 電話浪花五六二〇番</p>
<p>賀正 杉谷湖山</p> <p>鳥取市職人町</p>	<p>賀正 川柳雜誌社守口支部</p> <p>賀正 朝田新水</p> <p>大阪市外守口町車庫裏 電話守口二五五番</p>	<p>賀正 川柳雜誌社御池橋支部</p> <p>賀正 村松夢裡</p> <p>堺市出島町三五八</p>	<p>賀正 川柳雜誌社奉天支部</p> <p>賀正 江戸みつる</p> <p>奉天千代田通三七 寺庄洋行内</p>	<p>賀正 川柳雜誌社松江支部</p> <p>賀正 奈良井柳人</p> <p>松江市雜賀町</p>	<p>賀正 川柳雜誌社北濱支部</p> <p>賀正 谷村稔</p> <p>大阪市東區北濱二丁目 武鹿方</p>
<p>賀正 川柳同</p> <p>枝松規堂</p> <p>神戸市灘區八幡三ノ四</p>	<p>賀正 川合舟々</p> <p>大阪東區 南農人町一丁目</p>	<p>賀正 鳴田翠峯</p> <p>大和龍田町五百井</p>	<p>賀正 高島玉兔朗</p> <p>東京市日本橋區松島町四四</p>	<p>賀正 川柳雜誌社今治支部</p> <p>賀正 渡邊曉童</p> <p>今治市松本通一丁目</p>	

謹賀新年

更生して今月から柳誌を出します  
元旦

函館市青柳町五〇

函館川柳社

川柳雜誌社釜ヶ池支部

賀正

石 森 靜 太  
龜 井 愚 寵  
丸 橋 松 雨  
福 田 縷 紅

賀正

中西久郎

大阪市北区市之町五五番地  
電話北三三七三番

賀正

川柳難誌社今里支部

市場 没食子

大阪市東成區大今里町三九五

西山 山月

大阪市東成區深江町九八九

西木 朴甫

大阪市東成區片江町四一八

大鶴 喜由

大阪市東成區大今里町四三二

吉田 水車

大阪市東成區片江町四五三

村田 新市街

大阪市南區日本橋三丁目三

川柳雜誌社 梅田支部

水谷 鮎美

姫田 夕鐘

上久保 まさる

松枝 靜波

藤澤 白菊

天野 卜居

樋口 坊茄子

辻遊 歩

横田 方眠

都藤 古木

川村 觀月

永田 里十九

恭賀新年

大島 濤明

大連市西公園町  
川柳居平洞  
電話自宅三七一三番  
振替口座大連二五六五

謹賀新年  
元旦

改號仕候

山本 宍道郎

舊號 銀雪  
松江市北堀町一七

賀正 和漢洋醫院

大阪市南區長堀橋二丁目  
電話南四一八八番  
醫學博士長谷川成一  
私宅 大阪市東區大手通一丁目

謹賀新年

色紙、短冊の御用は

大阪市東區安土町堺筋西

川柳雜誌社指定

書畫用品商 和正堂  
風流雅品

電話本町二一六番  
振替大阪九一七五番

# 奉祝

皇太子殿下御降誕

上かんや

賀正

万よし

大阪市道頓堀新戎橋南詰

庄 健一

一月二日より十日まで主人サーブス

柳友の新人舊人の御來所を御待ち申します。

自電 大阪市南區難波新地二番丁二七

賀 安西 杏三

大阪市旭區北清水町八九一

川柳雜誌社新居濱支部

賀正 越智 虹子

愛媛縣新居濱町四町

南海電車

賀 阿形 一杉

大阪府泉南郡東島取村黒田

南海電車

賀正 三輪 夏曉

大阪市住吉區王子町一ノ二七

賀正 橋本 綠雨

大阪市住吉區平野西之町八三

電話天王寺一六七番  
振替大阪七五〇番



# 賀春

▼川柳家の皆様の柳運長久をお祈りいたします

▼本年も相變らずお引立願ひます

▼作句に小集に御集り下さるやうこれ又お願い  
いたします

南海玉出本通三丁目

（年中  
休中）

喫茶酒場 **キング**

路郎・葎乃

電天下二五七九番

恭 賀 新 年

# 弊社の特種設備

高速度式嶄新輪轉機の設備と活字鑄造場あり、就業人員七十餘名、

活字豊富にして新聞雜誌等の印刷は弊社の最も得意とするところなり。

## 營業種目

新聞雜誌印刷  
圖書出版引受  
紙型鉛版活字製造販賣  
各種製版印刷  
其他附隨事業一切



社 主 藤 本 卯 之 助

「川柳雜誌」創刊  
以來の印刷所

## 藤本兄弟社印刷所

大阪市東區農人橋二丁目

電話東一七〇番・七七〇番  
振替大阪八二八四番

# 清

# 酒

## 白鶴禮讚

白鶴をチントンシャンと提げて来る  
 午後六時白鶴が待ち妻が待ち  
 百事意の如く白鶴呑んでゐる  
 白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子  
 腰掛へ白鶴狭う飲むうまさ  
 來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ  
 白鶴が縁とはなりぬ君と僕  
 白鶴に素直な父となつて寝る

賀  
正

攝津灘

嘉納合名會社釀



從來誰も手をつけなかつた、名鑑と句集を兼ねたものを作らうと心掛けまして、足かけ四年経ちました。漸く茲に一冊に纏めることが出来まして望外の幸福です。明治、大正、昭和を通じて、全國の著名作家を網羅したとまづ自讃して居ります。句はすべて作家の自選になる名吟ばかりです。そこにあたりまへの句集とは趣きを異にして居るところがあるのです。川柳を愛好するみなさまは、座右に備へて全國著名作家の名吟を愛誦したいと思召しませんか。そして作句するときのよき教科書にすることをおすゝめいたします。

# 初篇

宮尾しげをを畫並編

# 昭和川柳百人一句

附 全柳壇情勢一覽

特製 和紙和裝豪華版

一五〇部限定

上製 和紙洋裝普及版

五〇〇部限定

定價 特製 金貳圓 上製 金壹圓 (送料八錢) 一月上旬出來

「川柳きやり」へ連載したものをまとめましたので、本集へ入らなければならぬ作家で入らなかつた作家諸君のために、又これからよりよき成長を遂げられる新進作家諸君のために、第二第三と引きつゞき「昭和川柳百人一句」が生れます。全部を揃へるためにあの時買つて置けばよかつたと、悔を残さないやうにまづこの一冊を御購求になるやうおすゝめいたします。殊に特製の方はそれをおそれて居ります。

東京市豊島區集鴨町六ノ一二九〇

申込所 宮尾しげを

昭和九年一月

東京市淺草區小島町七一

申込所 川柳きやり吟社代理部

振替東京六三〇五番

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

# ドーマポ椿豆伊

精の椿島大 一唯産國

## 輝く美髪



伊豆椿香油本舖



いさ下用愛御に直今  
りあに店薬品粧化名有國全

# 水顔美びきにと

うせまりこそを物の出で吹ふきに  
うせまりなに麗れ綺さらか地生



▲最も信用あるニキ  
ビ薬・美容剤！  
現代紳士淑女の愛  
物です！  
▲蚊などに刺された  
時にも非常によし！

定 價  
    .30  
    .50  
    1.00

館天順谷桃 株式 舗本

大正十三年三月三日第三種郵便認可(毎月一回)  
昭和八年二月廿五日印刷刷本 昭和九年一月一日

川柳雜誌 (第一二〇號)

定價金三拾錢 送料金壹錢